
電腦世界ディストピア

OTAM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳世界デイストピア

【Nコード】

N4930W

【作者名】

OTAM

【あらすじ】

舞台はAR技術とそれに特化した次世代ゲーム機Another Region、通称“アーリー”が爆発的に普及した近未来の日本。

高校受験を無事に乗り切り、中学最後の春休みを満喫する羽原 秋一。

ある日を境に得た不思議な目を持っていようともしそれを活かせるような機会もなく、ちよつと変わった友人の起こす妙なドタバタに巻き込まれたりする事もなく、至って平凡な一日を過ごす筈だったが

⋮
o

1話 西の聖地なんて言われているが半分以上は歓楽街でアウエーの空気が半端

この作品はフィクションです。実在する人物・団体・地名とは一切関係ございません。

1話 西の聖地なんて言われているが半分以上は歓楽街でアウエーの空気が半端

Another Region——それが今、日本で一世を風靡している携帯ゲーム機の名称だ。

日本国内だけでほんの3年足らずの間に実売1億台を突破。

発売当時はまだ無名も良いところの新興企業”新天寺社”はこの大ヒットの後押しを受けて一気に世界に名をとどろかせる一大企業へと成長を遂げた。

”アーリー”と略される事の多いこのゲーム機の特徴は何と言っても拡張現実の特化している点だろう。

拡張現実。 或いは強化現実とも呼ばれ、世界的にはAugmented Reality（略式はAR）という名で知られている技術で、SF映画なんかではわりと良く見かける代物。

分かりやすい例を上げるとすれば某世界的に有名な漫画の視界に映った人物の強さを表示してくれるメガネなんかが代表的だろう。

他にも一昔前のアニメで見かけた現実の世界と重ね合わせの電脳世界を視る為のメガネなんかもこれの一種と言えるかもしれない。

前者は対象のある情報を数値化する事で現実を、だいたいこんなものだろうという推定から正確な値の把握へと強化している。

後者は現実中空想を持ち込む事で視界に広がる世界の多様性を強化している。

かたや次世代ナビゲーションシステムを筆頭に様々な場面でその恐るべき利便性を発揮し、かたやアーリーに備え付けられたカメラ越しに世界を視る事で現実の世界とゲームの世界の垣根を取り払った遊びを提供し続けている。

特に現実を強化する方面に関しては凄まじいものがあり、1000万人を超えるネット会員・新天寺社の通販サイト・自社の保有す

るサーバの貸し出しや多彩なアプリの提供といった様々なサービスの合わせ技によって、アーリー所有者が欲しがりそうな今月発売の商品を自動的にリストアップし、外出時にカメラ越しに街を見るとどの店にどの商品が置かれているか、在庫状況はどうかといった買い物に必要な情報を懇切丁寧に表示してくれる。

これは通販サイトに蓄積された個人のデータと、通販・流通・アプリの使用等、何かしらの形で利害関係を結んでいる小売店（何とその数は数十万店にも及ぶとか）の在庫情報の二つを画面上の映像に重ね合わせる事によって成立しているらしい。

理屈は何となく理解出来るが、実際にそれを初めて見た時には圧巻させられた。

更に新天寺社はこの爆発的なヒットを背景に、様々な事業に手を出し、膨大な情報とユニークなサービスを利用して多くの協力者を得て、ついには既存のインターネットとは異なる規格のアーリー専用ネットワーク、通称“ニューロン”を保有するに至った。

今や日記も手帳も家計簿も通帳も財布もメールもこれ一つ。もはやインフラと呼べる程の地位を確立、持っていないのはお年寄りや赤ん坊くらいである。

当然、このゲーム機は俺、羽原 秋一の周辺でも誰もが所持していて、誰もが生活に欠かせない必需品として肌身離さず持ち歩いていて、誰もが当たり前のようにその恩恵を享受していた。

春休みを間近に控えた3月21日、つまり春分の日。

俺は友人の北里 千里と大阪の電気街、今となってはオタク街と

しても有名な日本橋——より正確に言えばでんでんタウンをうろついていた。

今日はコスプレイベントが開催されるらしく、通りにはイベント開始が13時であるにもかかわらず、表通りの歩道はフライングぎみに思い思いの衣装に身を包んだコスプレイヤーたちで溢れかえっている。

普段は地味な色の服ばかり好んで着るタイプの人々ばかりが行き来するこの街においてはかなり異様な光景だった。

この街のマスコットキャラのツインテールの少女——確か名前は音々（ねね）ちゃんだったか——や、現在絶賛放送中のアニメ（不思議とその大半は深夜番組である）のキャラクターのぼりが掲げられ、お祭り気分を盛り上げるのに一役買っていた。

「千里、そこにカメラ向けてみるよ」

俺の言葉を素直に聞き入れた千里はポケットからアーリーを取り出し、備え付けられたカメラをのぼりに向けて「おお」と歓声を上げる。

アーリーの画面ではのぼりに描かれたキャラがこちらに向かって手を振っている。

千里がカメラを構えたまま茶髪のツインテールとヘッドフォン、ピンクの制服と中途半端に属性過多のマスコットの側面に回り込む。さっきまで向かい合っていた彼女の横顔が画面に映っている。

流石に視線を認識して反応する程の機能は無いらしく、彼女が手を振る先にARを構えている人はいない。

「これは……もしや！」

何かに重大な事に気付いたと言わんばかりの表情を前触れに、千里は両膝と左手を地面についた、いわゆる四つん這いの姿勢になっ

た。

……何をか言わんや、である。

「おい、そのローアングラー。通行の邪魔になるからさっさと立て」

「待て待て待て待て。あと10秒だけ、お願い!？」

「却下。公衆の面前での変態行為はさすがに友人として看過できないね」

首根っこを掴んで、千里を強引に立ち上がらせる。

「普段は『お前みたいなキモオタが友人とかねえよ。身の程わきまえて死ね』とか何とか笑顔で罵詈雑言吐きまくるくせに! こんなときだけデレるなよ! チクシヨウ、ちよつときめいたじゃないか!」

「そうかそうか。じゃあ、そのときめきを抱えて今すぐ車道に飛び込もうな?」

「ごめん! ふざけ過ぎた、私が悪かった! だから背中を押すのは止めて!？」

「ここでそんなに速度出す奴なんて滅多にいないから死にやしないって」

「そついう問題やない!!」

背中からの圧力に必死に抵抗する千里。

両足を腰よりやや前に突き出し、いわゆるくの字になっているため、全身を浮かせるぐらいの勢いで押してやらないと車道に叩き落とすのは不可能だろう。

もつとも、本気で落とすつもりは毛頭ないのだけれど。

いい加減疲れて来たし、飽きたので千里の背中から手を離し、一歩退く。

「んのわっ!？」

支えを失った千里は車道とは反対の方向に盛大にすっ転んだ。
幸い、受け身は取っているので頭部に深刻なダメージを負ったとか、そう言った様子はなさそうだ。

「ま、多少頭をどうかしたって大した問題はないだろうけどな、アホだから」

「あのなあ、流石にこれはやり過ぎやろ……あいたたた」

「大丈夫か？」

声をかけてやると手を貸すまでもなく、後頭部をさすりながらむくりと起き上がった。

無事をアピールように、右手をひらひらと振って見せている。

「大丈夫だ、問題ない」

「そうじゃなくて、アーリーは無事か？」

転んだ拍子に千里の手から投げ出されたアーリーへと駆け寄り、軽く汚れを払ってから画面を覗き込んでみる。

電源を入れて動作チェック。液晶にも傷が無いかを簡単にチェック。

「良かった、特に何の異常も無さそうだ」

最後にもう一度汚れを払ってからポケットに滑り込ませた。

「ちょっと待て! 何で至って自然な感じで私のアーリーを懷に収めてる!？」

「違う違う。アーリーの方から俺のポケットに入って来たんだよ。」

今の持ち主があまりにも変態でボンクラでカスだからいい加減見切りをつけたってさ」

「そんなわけあるか！ そんなわけあるかつ！ 大事な事やから2回言いました！」

「じゃあ、今の持ち主が素敵過ぎて自分じゃ釣り合わないからで良いや」

千里が素敵とか、言ってる気持ち悪いけど。

「今絶対に『こいつが素敵とかそんな事はあり得ないし、ウソだとしても言ってる虫唾が走る。後で口ゆすごう』とか考えへんかったか」

「思ってるよ。そこまでは」

「そこまでは、って何だよ……」

はたから見ると口論しているようにも見えそうなの、けれど当人たちにとっては平常運転のやり取りを繰り返しながら、ポケットから取り出したアーリーを千里に返した。

受け取った千里はアーリーをポケットにしまい込むとその場で軽く二回ほどジャンプ。ポケットから落ちてくる様子が見られない事を確認する。

短めの淡い水色のスカートと頭の両サイド、こめかみの少し後ろでまとめられたツインテールのやや色素の薄い髪が揺れる。

俺は現在中学3年生で、千里は俺と同級生。つまり、中3である。

年齢を考えるといささか幼い髪型だが、小柄かつやや童顔の千里にはよく似合っていた。

「……まあいい。それより、大会までまだ時間があるから、ワクドで時間潰そうか？」

「もちろん、お前のおごりな」

「いいよ、参加しないのについて来てもらってるしな。それくらいお安いご用さ！」

正確には参加したくても参加出来ない、だけど。

「流石、千里。超素敵、マジ美少女」

「棒読みにも程がある」

心にもないことを口に出しているからな、仕方ない。

いや、正確に言えばこの男友達と変わらないノリでいびつても差し支えない友人は丸顔で、瞳が大きく、全体的に年齢よりやや幼い顔立ちに反して体つきは年齢相応以上に女性的というアンバランスさも含めて可愛らしい女の子だと言えるだろう。

ワイシャツの上にユニオンジャックがプリントされたタイトなシャツ、更にアクセントにネクタイ。下は前述の水色のスカート、靴下はスニーカーソックスらしく機能性を優先しつつも女の子アピールしようと試みた結果と思われるピンクを基調にしたスニーカー。つまり、スカートからスニーカーに至るまでの太ももやふくらはぎは漏れなく生足。とは言え、華奢な二本の脚は見事なまでにつやつやで、日頃からしつかり手入れしている事を伺わせている。

——といった具合に、オタクといえども女の子なんだなあと思える程度には見た目にも気を遣っており、まず間違いなく美少女の部類である。

（全くの余談だが、俺は意味も分からない英語の書かれたTシャツ&シャツジャケットにジーパン、スニーカーと普通過ぎて評価しづらい格好だ）

ただし、それはあくまで客観的な評価であって、付き合いがそれなりに長い俺にとっては水泳の授業の最中に「堂々と女子とくんづぼぐれつ出来る出来るんだぜ！羨ましいだろ？」と笑顔で語り出

したり、「ああ、このネクタイになって自分のおっぱいに挟まれたい」などと抜かす変質的なイメージがあまりにも先行し過ぎていて性欲が全く向かない。

「そっぴや、ワクドって今は何か配信してたっけ？」

「うん、レア木の実持ちモンスターの第三弾」

最寄りのワクドナルドへ向かって歩き出した千里は隣を歩く俺の顔を見るでもなく、正面を向いたままそんな言葉を口にした。

ワクドナルドは全国的にはワックと略される事が多いようだが、関西ではワクドと略されがちな言わずと知れた世界的に有名なハンバーガーショップの事である。

そして、ワクドでの配信というのはごく一部のベストセラーゲームだけに許された特権のようなもので、それらのゲームを手にワクドナルドへ行くとワクドナルド限定ミッションを受領出来たり、限定配布のレアアイテムなどが入手出来る。

そして、千里の言うレア木の実持ちモンスターの第三弾とは爆発的に普及したアーリーのタイトルとは言えど、決して多くはない実売300万本超クラスの大ヒット作品“フトコロモンスター”の配信イベントを指す。

全五弾、2週間ごとにレア木の実持ちフトモン（フトコロモンスターズの略称である）を配信して行くこの企画のおかげで俗に廃人と呼ばれるフトコロモンスターズの熱心なプレイヤーは足しげくワクドナルドに通う羽目になったとか。

かく言う俺も少し前まではその一人に近い存在だったのだけれど。

「秋一のアーリー、まだ直らないのか？」

「直らないもなにもまだ修理にも出してねえよ」

「早くしろよ。ないと不便なんだから」

そう、俺もアーリーを持っていた。ゲーム機であるにもかかわらず、ケータイに先んじて学び舎への持ち込みを許可される程に浸透しているのだから、当然と言えば当然だろう。

けれど、数日前に雨上がりの道路を占拠していた非常識な水たまりへとうつかりダイブさせてしまっただけ以来、ウンともスンとも言わなくなっちゃった。

さっさと修理に出せば良いものを、横着かまして自室に放置し続けて、なんやかんやで今に至っている。

「朝ワックになるけど、何にする？」

「クーポン、何がある？」

「あ、また見てない。ええっと……」

思い出したようにアーリーを取り出した千里は慣れた手つきで操作し、2秒とかからずにワックのクーポンサイトへのアクセスを済ませる。

「相変わらず馬鹿みたいに早いな、その不正改造機」

「この世代の機種のカセにとろくさいのが悪いんだよ。それにモニーみたいな処理能力の差が立ち回りにダイレクトに影響するゲームの大会に参加する訳じゃないんだし」

「まあ、確かにそうだけだな……」

億単位の実売という桁外れの実績を持つアーリーだが千里の言う通り、思いのほかマシンスペックは高くない。

アーリーとほぼ同時期に発売された当時のゲーム機の中ではARの性能の高さを除いては素人目にも間違いなく低い部類だった。

もっとも、その低スペックには相応の理由があり、その理由が独自の強みに繋がっていたおかげで並いる強豪を押しつけて現行のゲーム機の頂点に立つ事が出来たのだが。

「双生児エッグマフィンセットが300円だって」

「んじゃ、それで。あと、お前のハッシュは俺が食ってやるから感謝しろ」

「どんだけ上から目線なんだよ。横暴だ」

ため息ついでに突っ込みで返す千里。突っ込みながらもクーポンサイトを表示した状態のブラウザを最小化し、アーリーの電子マネーシステムを立ち上げる。

「……そういや、アーリーがないと小遣いも減るんだよな」

新天寺社と協賛しているカード会社のロゴが表示された画面を覗き込みつつ、今度は俺がため息をついた。

「だから早く修理に出せば良いって言ってるのに。私みたいに改造している訳じゃないんだから」

「いやあ、すっかり失念してた」

「って言うか、秋一ってコレ以外に自由に使えるお金あったか？」

「一応あるぞ。月々1000円だけだけど」

俺の返事を聞いて千里はもう一度盛大にため息をつく。

「どうしてそれですっかり失念する？」

「現金なんてアーリー買ってから殆ど使わなかったから2万ほど貯蓄があつてさ。ちょうど欲しいものもなかったから全く困らなかつたんだよ。スマホの料金は親持ちだし」

「まあ、それは私も一緒だけど」

「いや、お前の場合、ある意味俺よりひどいだろう、天才少……っと悪い」

「……ん、別にええよ」

新天寺社の電子マネー。

これもアーリーが爆発的に普及した要因の一つで、”ゲームを通じて稼げる”という強烈な個性を有している。

まず、アーリーを所持しているだけで毎月1000円相当の電子マネーが各々のアーリーに送られてくる。次いでアーリーを利用してネットに接続、ブログなどを更新する度に少額の電子マネーが配布される。

他にも新天寺社と提携しているネット通販で商品を買う、レビューを書くなどの形でアーリーや新天寺社及びその関連企業を利用する度に少しずつ貰える金額が増してゆく。

そして何と言っても特徴的なのがゲームメーカー故か、公式・公認の大会に参加したり、そこで実績を残したりする事でも電子マネーが賞金として贈与される。

今日、千里がこの街に来た一番の目的はコレだったりする。

と、この辺りまでは一般的なユーザーのアーリーを利用したお小遣い稼ぎである。

こういったやり方では俺も含め、せいぜい月々5000円も得られれば良いくらい。

賞金を得るのが一番見返りの大きい方法ではあるものの、その為にはいろんなゲームを購入し、なおかつ相当やりこまねばならず、それこそ新天寺社の思いつぽ。

流通している電子マネーの総額を考えるとお上に睨まれそうな気もするが、現にこうして流通しているってことはそうならない構造になっているんだろう。もっとも、それがどんな仕組みなのかまでは一介の中学生の預かり知るところではないが。

「で、千里は幾らほど蓄えてるんだよ？」

「人差し指と親指で輪を作るのはやめろ、なんかやらしいから」

と、非難がましい視線を向けつつも、つま先立ちして俺の耳下へと口を近づける。

「5000万ほど」

「……………マジかよ」

予想をはるかに上回る金額に軽くめまいを覚えた。

勿論、人並み外れた金額を稼いでいるであろうことは予想していたが。

それでも、5000万という金額はあまりにも突飛な数字だった。

「どうやってたらそんな稼ぎになるんだよ？」

「新しいアプリを開発したいから手伝ってくれてメールが時々来んだけど、そのプロジェクトに参加した報酬が大体百万単位」

「あー、それって新天寺社からの直々の依頼か？」

まあ、その依頼が無くても2000万を自力で稼いでいる計算になるんだが。

「そういうこと。　って言ってもそうしょっちゅうある訳ではないけど。　普段はアプリなんかのバグを直したり、脆弱性の指摘したりしてちよつとずつ稼いでる」

「ちよつと？」

「1日2万くらいかな？　あと、フトモンみたいな情報戦とか、読み合いがモノを言うゲームなら滅多に負けれないから大会に参加すれば大体賞金貰えるし」

「1日2万をくらいとか。　将来お前と結婚する奴は色んな意味で苦勞しそうだな」

やれやれと肩をすくめつつ、千里と肩を並べてワグドのドアをくぐった。

2話 Q・メロブが開店する11時くらいまで2時間近くも某世界的に有名な

双生児エッグマフィンセット二人分を千里に持たせてワクド内の狭い階段を昇る。

祝日で、複数のイベントがあるという事もあつて店内は普段以上の賑わいを見せていた。

フトモン大会参加者と思しき小学生、大きなお友達は早くも大会前の最終チェックに勤しんでいる。大会前に情報を漏らさないためか、プレイヤーの大半はARの共有機能をオフにしているようだ。AR共有。この機能のおかげで普段はアーリー同士の無線ネットワーク——これも“ニューロン”と呼ばれる——を介して各プレイヤーのお気に入り、フトモンが他のアーリーからでも確認出来るようになり、店内は賑やかな反面、カオスなことこの上ない状況になる……のだが、今日は店内をとことんせましと走り回るフトモン達の姿がほとんど見られない。

一方のストフェスの開始を待ちきれないコスプレイヤー達は各々の衣装の最終チェックに余念がない。既に衣装に着替えているフライング気味な連中もいれば、アーリーに入力された自分のデータに衣装を重ね合わせてアレコレ確認している人もいる。

と言った具合に、店内は満席ギリギリの活況を見せていた。が、幸運にも2階で二人分の席を確保出来た。3階まで登るとなると結構面倒くさいのでありがたい。

「なんでおこつた私が荷物持ち？」

「そりゃあれだ。俺がご主人様でお前が下僕だから？」

「その台詞、ちょっと興奮するな」

少し頬を赤らめる千里からセットをトレイごと受け取りつつ、席に座る。

一体、こいつの脳裏ではご主人様と下僕をどんな風に解釈されているんだか。

うっかり訊ねようものならエロゲ的なアレコレを聞かされるだけなのは分かりきっているので、あまり深くは追及しないが。

「表情がガチっぽいのがすっげー気持ち悪いな、おい。あと、今回の配付フトモンは天井に張り付いてるから、ちゃんと捕獲しとけよ?」

「あ、本当だ。 んじゃ、食べる前にさっさとゲットしとこ」

そう言いながら、千里はARを天井に向けてピコピコ操作し始めた。

我ながら今日日、ピコピコという擬音はどうなんだろうと思うがまあ、どうでも良い。

「よし、捕獲……それにしても、相変わらず妙な目だね。 どういう原理なん?」

「知るかよ。 気がついた頃には見えるようになってたんだから」

ARが有名になってきたのが俺が小学生の頃で、アーリーの普及が中学に入る前後くらいだから、生まれつきなのか後天的に得たものなのかも分からない。

右目を閉じてから改めて天井を見上げる。 さっきまで天井を這いまわっていたクモのようなデザインの虫フトモンの姿はどこにも見当たらない。

その姿勢のまま右目を開く。 すると、さっきからずっとそこにいましたと言わんばかりに可愛らしくデフォルメされたクモが機嫌良く木の実を齧っている。

右目を閉じる。 クモの姿が消える。

右目を開ける。　クモが姿を現わす。
左目を閉じる。　クモは相変わらずそこにいる。

「本当に何なんだろうな、これ」

「とか言うわりにはあんまり気にしてないよな？」

「まあな。　気になるけど誰かに相談出来るようなものでもないし、現実と仮想の区別はつくからこれといって困ることもないんだよねあ……」

もちろん、家族や千里のような親しい友人にはこの事は伝えている。　今のところ話の内容も俺の頭も疑われた事はない。

とは言え、彼らにこの現象を説明できるはずもなく、思い付きの実験やら経験則や助言、・分析などから、思った以上に非科学的なことこの上ない技能であると結論付けるのがやっとだった。

たとえばバーコードやQRコードのようにそれら情報を解読し、そこにある指示を出力する事でカメラの映像に何かしらの像を重ね合わせるタイプのAR。　こういったものの場合そもそもそこにコードがある事に気付かなくてもその何かしらの像を認識できる。

コードを見れば認識できるのであれば、脳にコードを解読するシステムが内蔵されていると考えればまあ、筋は通る。　どうしてそんなものがインプットされているのか、という果てしない疑問を除けば。

それ以外の方法で出力した映像をカメラ越しの景色に重ね合わせるARに至っては更に理不尽極まりない。　出力する映像が外部から得たものであれば、その情報は電波の形を取って飛んでくる筈であり、それが見えると言う事は電波が見える＆解析できるのと変わらない……のだが、生憎と携帯電話などの電波は受信も視認できない。

もしもそれが出来てしまっていたら、アーリーの比では済まない膨大な情報の洪水の前に正気を失っていたかもしれないが。

それに有線やアーリーに差し込んだソフト（どちらも無線通信オフ状態で）など外部に余計な情報を漏らさないようにした状況でも俺の目はちゃんとARによる重ね合わせの世界を認識してくれる。

ならば複数人が同時に他のゲームをやる、或いは同じゲームの別のシーンを、同じシーンをと色々試したところ、あまりにも情報量が多い場合はどれか一つ、多くても3つくらいの情報を厳選して認識するらしいという結論が出た。

情報の取捨選択、優先順位については不明のままだったが。

今、他のソフトの情報などは一切反映されず、クモの姿のみが左目に写る形になっているのもその不明の優先順位によるものだろう。

「まあ、夜中にホラーゲーをすると真剣にトイレに行けなくなりそうなのがネックだけだな。あと、ワクドでたまにロナルドが店内を徘徊してるのが見えたり。あれとゾンビの集団だけは本気で勘弁して欲しかったな」

「ロナルドとゾンビの集団は同格？」

「ああ、ゾンビからは恐怖を感じる。ロナルドからは狂気を感じる」

特にロナルドは物凄いスピードで踊りだしたりするからなあ。

某動画サイトが元ネタなのは理解できるけれど、製作者はいささか悪ふざけが過ぎる。

というか、そういうのはオフィシャルでやる事じゃないだろう、と言いたい。

「何か有効活用出来る方法があれば良いんだけどな」

「ああ、色々考えた事はあるけど。他人のやってるゲームが何かなんて分かってても特にメリットはないし、対戦なんかで優位に立てるような情報が出力される事なんてほとんどない。通販やカーナビ、欲しい物の検索機能なんかはそもそもネットに繋いでいるか、他のアプリと併用しないと意味がない。自分のアーリーがあれば

スリープ状態でポケットにしまっただけでもその機能が使えるのはメリットと言えばメリットかもな。でも、それだってアーリーが手元にある事が前提になっている時点で手が一つ空く程度のメリットしかない訳だ」

「まさしく宝の持ち腐れなのか」

「持ってた腐れるようなものを宝とは言わん」

「んー、しかるべき機関にその目を持ち込んだら……」

「この無駄機能の正体が脳にあったら俺の脳みそホルマリン漬けにされるな」

「……ごめん」

「そんな事、いちいち気にすんな」

目に見えて落ち込む千里。肩を落とし、うなだれている彼女の表情は長い髪に隠されて良く見えないが、きっと今にも泣きそうな顔をしているだろう。

普段は多少ぞんざいに扱ってもへこたれないクセに、変なところでデリケートな奴だ。

うん、と頷きながらも立ち直る気配を見せない千里のトレイにハッシュポテトを差し出してみる。

「それやるから、早く立ち直れ」

「うん、ありがとう」

と、顔を上げた千里はまさかの半泣きだった。

これは傍から見ていると俺が泣かせたみたいに見えるんだろうか？

「お前なあ、俺があれくらいで怒る筈がないのは知ってるだろ？」
「ちやうちやう。秋一がどっかの機関に連れてかれて、手術台に縛り付けられて麻酔なしで生きたまま顔を裂かれて、頭蓋を割られて、中身を取り出されて、徐々に目が濁っていくのを想像したらな

んか悲しくなつてもーて……」

「……なんでそこまで心身共にグロ方面に緻密な想像するんだよ」

いや、想像するのは一向に構わない。

こんな目を持つている手前、他人と世界観が相容れないとか、自分以外のすべては異世界に生きているといった類の捻くれた価値感
は人並み以上に理解している。

他人が普段どんなとんでもないことを考えていようと、その事に
対して驚きはしない。

が、あえてそれを口にされるのはやっぱり良い気がしない。

ましてや「今私の脳内であなたは生きたまま脳髓を引きずりださ
れました」なんて宣告されたら、さすがにそいつとの付き合い方を
見直さざるを得ない。

もつとも、泣きそうになるほど悲しかった、なんて言葉がつく場
合は例外だが。

「……冷めるから。 涙を拭いたらよ食え」

ハンカチ代わりにテーブルに常設されている紙のナプキンを押し
付けてやった。

「うん、ありがとう」

ナプキンを受け取った千里は、俺の顔をまじまじと眺めながら少
しだけおかしそくに笑ってみせる。

それから差し出されたハッシュポテトを別のナプキンで包んで、
一口。

ゲーマーだからというのもあるんだろうが、手が汚れるのを気に
しているのを見るとああ、女の子なんだなあとか不意に思っ
てしま
う。

まあ、だからと言ってそういう仕草にときめいたりするかと言うとそんな事は全くないのだけれど。

「ん、何？」

などと愚にもつかない事を考えながら千里を眺めていると、見られている事に気付いた彼女は首をかしげつつ視線をハッシュポテトから俺の顔へと移す。

「ん、別に」

とだけ応えて、彼女の顔以外で適当に目についたものへと視線を逸らした。

俺の視線を追いかける千里。その先には――

露出度の高い衣装と長い金髪が特徴的なボーカロイド、Yulの格好をした色っぽいお姉さまの太ももがあった。

「……むっほお、エロい太もも」

「自重しろ、変態」

女の子がそんな台詞を口走るんじゃないやありません、と軽く頭を張るとは言いながらも、俺の目もその色っぽい太ももにくぎ付けなのだ。

何かしらのスポーツをしているのか、平均的な女性のそれに比べるとやや太いが無駄な脂肪はなく引き締まったおみ足が、白地に黄色のラインの入ったミニスカートから覗いている。

太ももに限らず、うっすら割れている腹筋や締まりの良い二の腕と、露出の多いコスプレから覗くパーツの一つ一つが鍛えられた健康的な色気を纏っていた。

「思わずかじりつきたくなるおみ足……もふもふ」
「マフィンを齧りながら言うただの食事が変態行為に見えてくるから不思議だ」

アーリーで何かを読んでいるその女性が足を組みかえたりする度にスカートで隠された部分のその向こう側が見えそうになる。

その都度、店内の男性陣（千里と店員、悔しいが俺も含む）が思わず固唾を飲み——直後、安堵と失望の混じったため息が漏れた。しばし、店内にいる人口の3割近くがその神々しい一点を食い入るように見つめていた。

異様な、と言うか酷く禍々しくも痛々しい光景だった。

やがて女性がケータイの着信音と共に立ち上がり、トレイの上のゴミを片付けて階段を降りて行くのをこの上なく名残惜しそうに見送り、ゲリラ的に開催された美女の太もも観賞会は終了した。

「で、何だっけ？」

「何だっけて何だよ？」

「分からないから聞いているんだが」

「俺に分かる訳ないだろ」

「そっか。じゃ、何でもいいや」

不毛過ぎてその不毛さが少し新しいやり取りだ。

そんなやり取りの最中に千里は壁にかけられた時計を横目で見やり、それからのんびりと立ち上がった。

「どうした？」

「もうすぐ時間」

「会場まで送ろうか？」

「いや、ここまで付いて来てくれただけで十分」

立ち上がろうとする俺を手で制し、二人分のトレイとゴミを片付けた千里はのんびりとした足取りで1階へと消えへ行った。

ストフェスと重なる日程で開催されたフトモンの大会の会場はまさかの通天閣。

あの辺りはお世辞にも治安が良くてお子様を安心して歩かせられる場所ではない。それだけに小柄な、そして曲がりなりにも女の子である千里を一人で活かせるのは心配だ。

とは言え、ついてこなくて良いと言っている相手に無理矢理追いかけるのもどうかと思う。女の子だからこそ触れられないプライベートだってあるだろうし。

とは言え見てくれだけは確かに高得点だしなあ。しかも若干口りっぱいので声をかけて来る輩は間違いなく困った性癖をお持ちに違いない。やっぱり心配だからこっさり後をつけようか……？

といった感じの思考を瞬時に展開し、自分の過保護に気付いたところで我に帰り、千里の背中をコーヒーストローを咥えたまま見送った。

「……上から71、52、73か」

あいつ、意外とスタイル良いのな。ウエストとアンダーでそこまで数字が変わるような体系ではないだろうから、トップとの差を考えると確実にD……ん？

目の錯覚だろうか？

一瞬、千里の頭上に妙なプロフィールが浮かんだような……。

具体的に言うとな千里のスリーサイズ的な何かだろう。

不審に思った俺はとっさに店内を見渡す。すると――

久里浜 良太 男 20歳 フリーター

宮本 佐代里 女 19歳 龍山大学

大須 冬彦 男 27歳 新天寺社

梅崎 田朗 男 23歳 ローゾン

今宮 栞 女 33歳 Z y o s h i n

小野 悟 男 29歳 東吉住高校教師

五十嵐 光太郎 男 16歳 フリーター

佐々木 花音 女 17歳 九尾高校

泉野 鍵 男 31歳 フリーライター

・ ・ ・

ざっと目についただけでもこれだけの情報が俺の視野になれ込んできた。

表示方式はフレンドユーザーをチェックする時のそれに近い。しかし、フレンドユーザー機能はプライバシーの問題を考慮して実名や所属は表示されない。

「なんだよ、これ……？」

訝しがりながらも、動揺を表情に出さないように注意を払う。

右目に右手を添え、改めて店内を見渡す。あの奇妙なプロフィールは見当らない。

恐る恐る右目から手を離す。再び 俺の視野を膨大な情報が埋め尽くした。

薄気味悪い。ゲームの映像が見える事よりも、アニメのキャラのARを肉眼で視認できる事よりも、淡白な文字の羅列がただただ不気味だった。

他人の私生活を盗み見ているような居心地の悪さに耐えられなくなった俺はコーヒーを飲み干し、急いで階段を駆け下りて店を後にした。

が、逃げた先でも情報の洪水が僕を待ち受けていた。

人名、性別、年齢、所属。

一つのプロフィールを一定時間凝視すると更に新しい情報が公開されるらしい事にたまたま気付く。

ブログの有無、最近遊んだゲーム、大会等への参加経歴や戦歴。

アドレスやソフトのラインナップを見る限り、このプロフィールはアーリーに関連するもののようだ。

もっとも、そんなものを見なくとも俺の目に映るARはまず間違はなくアーリーのそれなのだが。

更に凝視しているとまたしても情報が更新される。

経歴、病歴、前科。

親の名前、出身地…… e t c、 e t c。

これは本当にアーリーに関連するものなのか？

あまりの情報の細かさに自分の目に対する確信すらも疑わしく思えて来た。

最初の情報はまあ良い。最近ではARを学校教育に活用しようなんて話が平気で立ち上がるくらいに浸透している代物だ。これくらいの情報が求められる事だって十分あり得るだろう。

しかし、経歴や病歴、前科はおろか各人の由来なんて……。

『そのあなた!』

突然、後ろから声を掛けられたような気がして弾かれるように振り返った。

何かるくでもないものを目の当たりにしてしまった、そんな感覚に襲われていた事もあった神経質になっていたんだろう。

傍から見れば挙動不審もいいところの動きに違いない。

振り返った先、戸惑う俺の瞳は一人の少女を捉えた。

茶髪のツインテールとヘッドフォン、ピンクの制服と中途半端に属性過多のどこかで見たような女の子だった。

『……アタシの姿が見えるみたいね』

アニメチック、というかまんま二次元系の顔立ちは確かにこの街のマスコット音々ちゃんそのものだった。

ただ一つ、違うところがあるとすればどちらかと言うとたれ目系で常に笑顔のイメージの強い彼女にしては造形や表情が妙に凜々しい事くらいか。

直感的に、というか常識的に考えて即座に彼女はARの映像なんだと理解する。

が、視線を感知するARの技術的な難しさやアーリーを持つている訳でもないのに音声が届こえてくる事に対する不自然さに気づき、彼女がARであるという確信が持てなくなる。

そもそも、ARの映像であるならばアーリーの画面を眺めながら歩いている連中にだって見える筈で、『アタシの姿が見えるみたいね』という言葉は不自然だ。

とは言え、生憎と俺は幽霊なんて信じる性分ではない。

『あんまり使えなさそうだけど、この際仕方ないわね。あなたに頼みたい事があるの』

俺の困惑なんてお構いなしに、マスコット少女は話を続ける。
俺を値踏みするような視線を足元から頭頂部へ向かって這わせる。
失礼な態度だ。生身の相手だったらこの時点で既に一発引っ叩
いているだろう。

この女がARである事が忌々しい。
そんな俺の思考になど気付く気配も見せず、ふてぶてしい表情の
まま、頼むという言葉の意味を辞書で引きたくなるような偉そうな
口調で、彼女はこんな事を口走った。

『アタシに協力しなさい!』

半ば反射的に出た突っ込みは彼女の顔をすり抜け、形容しがたい
虚しさをもたらした。

3話 『これから正義の話をしよう』というタイトルを見た時、ソフト。ンクを

本橋 春日（モトハシ ハルヒ）。

職業、正義の味方。

趣味、コスプレ。

初対面の人にこんな自己紹介をすれば大体どう反応すればいいのかわからないと言った風な困った顔をされる。

付き合いの長い友人からは「なまじ才能のある中二病患者が本当の挫折を知らずに突き抜けたらこうなるってモデルケース」などと評される。

けれど、これが間違いなく私を正しく表現したプロフィールだった。

子どもの頃から、女の子向けの恋愛漫画よりも男の子たちの見るバトル漫画が好きで。

物心ついた頃から、可愛いマスコットキャラの活躍よりも、日曜日の戦隊ものが大好きだった。

彼らに倣って幼稚園児の頃からいじめっ子相手に大立ち回りを演じていた。

小学校に入って年齢差や性差が出てくると丸腰では勝ち目のない相手が現れた。でも、私の正義漢という名の無鉄砲は挫折すらも糧に勝利の方程式を描き始める。

勝てないならもっと強くなれ。それでも勝てないならちよつと卑怯だけど武器を使い。

それでもなお勝てない相手は油断している隙を狙え。トイレに行った時を狙い目だ。

必要なら徒党を組め。裏切りを促すなどの権謀術数は大勢を相手にするには実に効果的。

男勝り、ガキ大将。 時代遅れのスケバン刑事。

行く先々でそんな肩書きを貰いながら、止まることなく突き進んだ。

そして、ある日——確かその日は鉄パイプ片手に中高生をターゲットに麻薬を売り捌いている犯罪組織の親玉を追い詰めている時だったはず——ただならぬ気配を纏ったスーツ姿の大男が現れて、身構える私にこう切り出した。

「君のその素晴らしい才能を、もっと素晴らしい事の為に使ってみないか？」

低い、けれど良く通る存在感のある声だった。

胡散臭い話であるにも関わらず、男の目は真剣そのもので声色には一部の揺らぎもない。

もしもこの言葉が本心からのものでないとすれば、彼はよほどの大嘘吐きか、狂い過ぎて一種の悟りを得たかのどちらかだろう。

ひとまず彼の言葉を信じるふりをして、退路を確保しながら注意深く彼の後を追い——そして、私は真正正銘の正義の味方になった。

ある時は未だ足取りの掴めない連続殺人犯を独自のルートで追い詰め、捕えた。

またある時はとある暴力団の親分に関する重大なスキャンダルをネタに強請をかけて、民間人に害が及ぶ行為の一切を止めさせた。そこはある種必要悪的な側面も備えていた為に解体するには至らなかったのが少々心残りではあったが。

時には東京でのテロの情報を得て、それを未然に防いだこともあった。

そんな正義バカの私だけれど、時には休息も必要だ。

ここ数カ月、連日休みなしに働き続けていた私は、東京を離れて関西で2週間ほどの長期休暇を過ごすことにした。

ついでに幼少のころから正義の味方大好きっ子だった私は、行動だけではなく形から入ってみる事にも怠りなかった。

たとえば幼稚園児の頃から戦隊もののフード付きのパジャマを愛用していたのを、女の子向けのアイテムには目もくれない私を見て母が嘆いていたのを、今でもよく覚えている。

それが高じてと言って良いのかは分からないけれど、正義の味方を本職とするようになってからは正義の味方でない自分を演じる為の手段としてコスプレを嗜むようになっていた。

とは言え、ある程度隠密性を求められる立場にある以上、ネットで公開という訳には行かないので日頃コスプレを他の誰かに見てもらう機会を得るのはなかなか難しい。

普段着ない服を着るだけでも楽しいと言えば楽しいのだけれど、慣れて来るとどうしても誰かに見てもらいたいという願望が首をもたげてくる。

しかし、知り合いに見られるのはやっぱりちょっと気恥ずかしい……。

と妙なところで平凡な思考を経た私は「旅の恥はかき捨て」という先人の偉大な名言（どっちかと言うと迷言か？）に従って、大阪は日本橋で開催されるコスプレイベントへと足を運ぶ事にした。

今日の為の卸した新しい衣装はYuiyのコスチューム。

最初は別の会社のヴォーカロボット、廻音リユカにしようかと考えていたのだけれど、こっちのキャラの会社の本社が大阪にあった事を思い出したのが決め手になった。

イベントを言い訳に少し早めに着替え、初めての衣装で街を歩く。時折、道行く人が私を見て振り返る。それがこそばゆくも心地良い。

道中でちょっとやり過ぎな感もある怪我上等のコントをしている中学生くらいのカップルの横を通り過ぎ、時間を潰す為に適当なワ

ツクに入る。

電気街、オタク街といったイメージに反して意外にこの街は飲食店の多い。探せば良い店なんて幾らでもあるのにわざわざワックでお茶を濁す自分に思わず苦笑してしまう。

アーリーを弄りながら……正確にはアーリーを弄るふりをしながら店内を見回す。

私に向けて、主に男性から熱い視線が注がれているらしい。

仕事柄、視線に対して人一倍敏感な私に限って自意識過剰と言う事はないだろう。

視線は主に私の太ももに集中しているようだ。

確認の意味も兼ねて、組んだ足を組みかえてみる。衆目は私の予想を裏切らず、その動きに確かな反応を示した。

あくまでも気取られないように表面上は平静を装うものの、内心は面白いやら嬉しいやら恥ずかしいやらで思わず叫んでしまいだ。

と、そんな昂揚感に冷や水をぶっかけるようにポケットの中のケータイが耳障りな音を奏でる。これまた内心の忌々しさを包み隠したまま液晶を眺めた。

——表示されていたのは私をこの世界へと誘った、上司の名前。それが意味するところを即座に察した私は急いで店を後にし、人通りの少ない裏通りで電話に出た。

「はい、ハルヒです。珍しいですね、オフの時に電話だなんて」

『ああ、休暇中にすまない。26の案件で、そっちで動きがありそうなんだ』

「そうですか。じゃあ、後で調べておきます」

本題となるやり取りを5秒ほどで済ませ、後は1分ほど他愛のないやり取りを交わし、電話を切った。

快晴ではあるものの、両側に建つビルの影と電線によって薄暗く

見える空を見上げてため息を一つ。

26の案件。私の所属する組織が現在抱えている厄介事の中でも特に重要なものだ。

内容は簡単に言ってしまうえば新天寺社がらみ。ここ数年で急激かつ急速に勢力を拡大し、時にはもう一つの国家とまで言われるようになった謎の新興企業。

ゲーム機を利用して瞬く間に独自のネットワークシステム“ニューロン”を築き上げ、更には短期間で通信販売・ネットバンクなど様々な業種・企業を取り込み気がつけば日本国内で使用される円の1割超がニューロンを介して、つまりいったん新天寺社独自の電子マネーに交換される形で行われるに至っている。

にもかかわらず、出来て間もないシステムは尋常でない肥大化にいとまたやすく適応し、殆どトラブルを起こすことなく、その実績も含めて人々に受け入れられた。

果たしてノウハウのない新興企業にそんな事が可能なのか？こんな前代未聞の成長、よほど優秀なブレーンが居たとしても、物理的に追いつけないのではないか？

あまりの躍進にそんな疑問を抱く人が現れるのは無理からぬことだろう。そう言った人は私達に仕事を持つてくる人達の中にもやはり存在し、調査を進めていくうちに、数多のマスコミや組織をして“謎の”と言わしめる新天寺社の死角の無さと、それ故のきな臭さが浮き彫りになった。

その死角のない新天寺社の、いつ切れるかも分からない尻尾をようやく掴めるかも知れない。それが26の案件の詳細だった。

なるほど、日頃から公私の区別はしっかりしている彼が思わず私に電話を寄こすのも無理からぬ話だった。

「さて、頑張りますか！」

気持ちをし仕事モードに切り替え、意気揚々と表通りに戻って行っ

た。

私の名前は本橋 春日。

趣味はコスプレで。

そして職業は——正義の味方だ。

3話 『これから正義の話をしよう』というタイトルを見た時、ソフト。ンクを

初の秋ー以外のキャラ視点。

今後もちよくちよく別キャラ視点の話があるかと思っています。

4話 用件を聞いた後で女子の無茶ぶりから逃れようとすると非難轟々だから

「色々突っ込みたいところはあるが、とりあえず名を名乗れ」

と、突っ込みの平手を見事にすかした俺が取り繕うように発した言葉がコレだった。

周囲から変な目で見られないよう、ちゃんと大通りから一本裏に入って人目に付きにくい場所に移動している当たり我ながら妙に冷静だと言わざるを得ない。

『あ、それもそうね。 アタシは中野 夏芽よ、ヨロシク』
「はぁ……」

確かに名を名乗れと言ったが、本当にそのままの反応を返されるとは……。

見ず知らずの相手に突然声を掛けられた上にそいつが妙になれなれしかつた時に暗に失礼だろという注意だとか、お前に対して警戒しているぞという意思表示の為に発せられているものであって、名前を知る事がその言葉の核心ではないのだが。

が、どうやら目の前のAR少女はその事を理解していないようだ。二次元（体積が存在しない）だから多少おバカなのは仕方がないのかも知れないが、何とも面倒くさい。

『なんか今失礼なこと考えなかった？』

「モノローグでも表示されてたか？」

『そんな訳ないでしょ、ゲームじゃないんだから』

呆れた、とばかりに肩をすくめてみせた。

俺の胸中の「お前、その格好で言うなよ」という突っ込みには一

切反応しない辺り、どうやら本当にモノローグは見えていないようだ。

『で、アンタは？』

「は？」

『は？ じゃないでしょ。 アンタの名前は、って聞いているの。まさか人に名乗らせておいてそっちは秘密です、なんて言うんじゃないでしょうね？』

睨みつけるような挑戦的な目線で俺を指差し、さあ早く名乗れとあごをしゃくる。

そんな仕草を音々ちゃんのを借りてやっているのだから違和感が凄まじい。

「ああ、悪い悪い。 俺は羽原 秋一だ、よろしく」

と、手を差し出す。 夏芽はそれを握ろうとするものの、彼女の手は少しばかり俺の手にめり込んでしまった。

分かりきっていた事だが、握られている感触は全くなかった。何となく、夏芽の手がすりぬけた後の手をじっと見る。

「…… 本当に実体がないんだな」

『実体はあるわよ。 今、ここじゃないだけ』

「って事は本体はどこかで昏睡状態だったりするの？」

『ご明察。 意外と鋭いわね』

鋭いも何も、漫画のお約束を思い付きで口走ってみただけだけど。本体が昏睡状態で幽体離脱して誰かに憑依して密かにリターンしてみたり、好きな人の右手になってみたり。

「それで、夏芽だっけ？ 君は俺に何をして欲しいんだ？」
『それは……』

一旦口を開くも、何かに気付いたように言い淀む夏芽。
そうして俺の様子を伺いながら口ごもっている彼女を眺めつつ、
なるべく表情に出さないように気をつけながらも、考える。

常識的に考えれば分かる事だが、彼女はあまりにも普通じゃない。
幽体離脱だか超能力だか生き霊だか知らないが、とにかく存在自
体が超常現象である。

この点に関しては残念ながら程度の差こそあれ一種の超能力者で
ある俺がとやかく言う筋合いはないだろう。

問題はその次だ。 その超能力者がわざわざ自らの超能力を駆使
して助けを求めている。

しかも、本人の話によると本体は絶賛昏睡中。

これまた漫画や映画のお約束、飛躍しすぎた妄想に過ぎないのだ
が――

「君が昏倒するに至った出来事に大なり小なり関わってくる、どっ
かの超能力を研究する悪の秘密結社の陰謀を阻止してくれ……とか
言うんじゃないだろうな？」

『ほぼ正解よ』

……マジかよ。

未だに脳みそが思春期から抜けきらないようなお年頃の少年少女
や陰謀論者の毒電波と同レベルという現実の安っばさに思わず頭を
抱えそうになった。

『と言っても、何もその秘密結社を壊滅させてくれなんて言ってる
訳じゃないわよ』

「当たり前だ」

『……そこまで当てられたんならもう隠す必要ないかも、ね?』
「そこで可愛らしく首を傾げられても同意しかねる」

隠している内容が分からないし。

まあ、可愛いのは大いに結構なのだが。

「とにかく、早く本題に入ってくれ。でないと何の判断も出来ない」

『そうね。アタシとのやり取りを盗み聞きするのは不可能みたいだし、いざとなれば聴かなかった事にすれば済みそうだし。分かったわ、あと3分だけ待ってちょうだい』

そう告げた彼女は不愉快そうに空を見上げた。つられて早春の空へと視線を向ける。

彼女が睨むように見つめるその先には雲ひとつない青空が広がっている。

ビルと電線に遮られてはいるものの、それでも広く、澄み渡った空だ。

「なあ、一体何が起きるって言うんだよ」

『見てれば分かるわ、きっと』

きつとって何だよ、いい加減だな。そう口にしようとした瞬間、確かに俺は思い知らされた。

まず始めに、街の景色が塗り替えられた。

見慣れたでんでんタウンの風景が一瞬にしてどこか異国の、建造物の雰囲気から察するに西欧の長い歴史を持つ街へと変貌を遂げる。驚き、戸惑いながら様相の一変した街を見まわす俺の頭上に、巨大な影が差す。

再び見上げた空には、ちょっとした高層建造物をひっくり返した

ような、流線形の物体が浮かんで——と言っか、こちらめがけて落ちて来ていた。

ARだと理解しつつも逃げなければと警鐘を鳴らす本能。常軌を逸した事態にショートする理性。結果、俺はぼかんと口を開けたまま落下する巨大建造物の行く末を見守り続ける羽目になった。

それから2秒ほどして、ようやく我に返って右目を瞑れば良いんだけど気付いた時には視界が真っ赤に染まっていた。

我ながら要領を得ない情景描写だとは思っが、そうとしか説明しようがないのだから仕方ない。

あまりにも鮮烈で強烈な赤、赤、赤。

現実の出来事でないにもかかわらず、その色彩だけで皮膚が熱を帯びるような錯覚を覚えるほどだ。

現実であればそれらの内のどれか一つとして認識する暇もなく消し炭になっっていただろう。

そう確信出来る程の圧倒的な迫力を伴っていて、熱はなくとも、その強烈な閃光を焼き付けられた右目が痛む。

耐えきれなくなった俺は手で右目を覆い隠して、その場に膝をついた。

「なんなんだよ、これ……」

『その言葉に対する説明は何通りかあるわ。アナタがこのまま何も見なかった事にするんならARで映し出された映像と説明して終わっておくべきなんでしょうね』

「……っ」

返す言葉が思い浮かばない。

何とも言い難い気持ち悪さと、ろくでもないことを知ってしまった恐怖から嫌な汗が噴き出してくるのを問答無用に実感させられる。彼女の言う通り、このまま何も見なかった事にしてしまうのがきつと賢明なのだろう。

右目から手を離すや否や飛び込んできたARの死体の山（と言っても多くは今や影だけだが）と廃墟となった景色がその想いの正しさを証明している。

けれど――

「いや、やつぱりちゃんと説明してくれ。それと君の頼みについても。最終的な判断はそれからでも遅くないだろ？」

「……そうね。それじゃあ、何から話せば良いかしら？」

「まずはさっきの映像についてだ。アレはアーリーの、ARの映像だよな？」

「その通りよ。アナタも知ってると思うけどアーリーはあつちこつちに設置された基地に加えてアーリー同士でネットワークを繋ぐ事で地下街みたいな電波の届きにくい場所でもネットに接続できる」

彼女の話は要するにニューロンの説明だった。

インターネットのようなものだが、丸ごと新天寺社の独自規格、つまりアメリカで誕生し、今や世界を席卷しているネットワークシステムの文脈から完全に独立している上に、電波とゲーム機を利用する事で極めて低いコストで作り上げられたネットワーク。

それが、アーリーが全く新しいインフラと呼ばれる一番の要因でもある。

もつとも、電波に依存するところが大きいが故にどうしてもアーリー間の距離が開きがちな田舎ではそのパフォーマンスを存分に発揮出来ない等の弱みはあるのだが。

『で、その機体同士のネットワークと演算処理の為に結構なメモリを消費しているから同世代の他のゲーム機に比べて性能が低いの』

「ああ。それでメモリの一部を貸し出す謝礼として基本報酬の1000円が約束されているんだよな」

ちなみにこの基本報酬、いつ届くかは月の最後の10日の間と酷く曖昧だったりする。

その上、電源を切っている最中に送られてきた場合にはその報酬を受け取れない。なおかつ後払いはお断り。アーリーを最初に起動した際にそんな契約に同意させられる。

とは言え、スリープ状態であつても電源さえ入っていれば受け取れるから、大した問題にはならないのだけど。

『でも、その消費しているメモリってニューロンの構築や維持のためにしては明らかに多過ぎるのよ。本当にその目的だけに使えば今の二割もいらないわ』

「それはたまに聞くな」

もつとも、ソースは主にネットとかだけど。

それだけなら完全に都市伝説の部類として一笑に伏してお終いである。

ただ、千里も同じようなことを言っていたからある程度の真実は含まれているのだろうとは思っていたのだけれど。

「で、その話はさっきの映像の説明にかかって来るんだよね？」

『もちろんよ』

その一言で余計な分の使途が何となく予測できてしまった。

「まさかとは思うけど、その過剰な8割を束ねたネットワークを超強力なスパコンとして貸し出している、なんて言うんじゃないだろうな？」

『本当に鋭いわね。ちなみに、今日フトモンの大会がここで開かれるのもより高性能なスパコンを調達するためね。ストフェスと合わせてこのエリアにある数十万台のアーリーが集中しているわ。』

勿論、いざとなれば基地そのものや基地を経由して遠隔地のアーリーを動員することだって可能よ。他のアーリーを経由する分余分な要領を消費する事になるけど」

「で、どのくらいの演算能力になるんだ」

『今、この周辺にあるアーリーの合算？ それとも日本中のアーリーを総動員した場合？』

「この周辺で」

『1台当たり180で、今この辺りにあるアーリーの総数を50万と仮定して、基地のコンピュータも含めて考えると……ざっと20ペタフロ？』

「基地のコンピュータとやらもさり気なくスパコンレベルか……つて、この辺一体だけで50万台もあるのかよ」

『で、日本中のアーリーの演算能力を結集すると基地も含めてエクサの大体に突入するわ』

あまりの単位に驚くよりも呆れ返り、思わずため息が漏れる。

まるでヨタ、いや与太話を聞いているようなそんな気分になってきた。

しかし、そのジャンプ漫画ばりにインフレした単位の真偽がどうあれ、その凄まじい演算能力とARで培われた映像技術をろくでもない事に転用している不屈きものがあるという事実は変わらない。

『もう気付いているでしょ？ その演算能力を誰が売って、誰が買っているのかも』

売っているのは新天寺社だ。これだけ大掛かりな仕様とあつては一部のものの暴走とは考えにくい。アーリーを発表するそのずっと昔から、こういう裏の稼業を視野に入れて事業を展開し続けていたのだろつ。

そして、買っているのは先の巨大建造物のようなもの——今まで

に実物を見た事はないが恐らくミサイルだろう——に関する情報が必要とするような連中だ。そんな勢力、国家を置いて他には存在しない。さも無ければ大国を相手取って戦うテロリストか、世界を裏で牛耳る秘密結社の構成員の死の商人とか、そういった現実ではなるべくお目にかかりたくない類のろくでもない連中だろう。

ついでに言うならばあのミサイルの爆発。あれは尋常の兵器のそれとはとてもじゃないが思えない。全く根拠のない推論、いや妄想に近いがアレはきつと核兵器だ。

「ふざけたシミュレーションのための道具の管理を知らない内にさせられてたつて訳か」

『そうね。で、その見返りが1000円から電子マネー』

アーリーは結構高価で、発売から数年経った今でも3万近くする。充電にかかる電気代、新作や有料のアプリにかかるコストを考えれば、投資分を回収できる人は思いのほか少ない。

それに加えて宇宙、大気圏内、水中、地下とあらゆる空間で禁止されている核実験が未だ禁止されていない仮想空間を提供する事での多額の見返り。

それが、最低金額で考えても年間千億単位という狂気じみた電子マネー供給のからくりなのだろう。

個人の思想も信条もあつたもんじゃない。

「確かに知らない方が幸せな部類の事実だな……」

『でしょう？ 声をかけておいてこんな事言うのもなんだけど、何も見なかった事にしあって別に恨みはしないわ』

最初の態度からは想像もつかない言葉だった。

あの時は彼女も相当切羽詰まっていた、といったところだろうか。……何にしても、俺の心はとっくに決まっているのだが。

「で、結局のところ君の望みはなんなんだ？」

『聞いて、くれるの？』

「どうするかは聞いてから決めるけどな」

俺の言葉に驚きを隠せないと言った様子を見せる夏芽。

パチパチと2度まばたきをして、今にも泣き出しそうな表情を浮かべた。

それからどこか凛々しい雰囲気を纏った顔立ちには少し似合わない柔和な笑みを浮かべたまま、深呼吸をひとつ。

ゆっくりと、これから話す内容を吟味しているかのように口を開いた。

それはA Rの中に閉じ込められた少女の、日本屈指のリーディングカンパニーの裏の顔を知る少女の、あまりにもささやかな願いだっ

『……兄さんを、止めて欲しいの』

4話 用件を聞いた後で女子の無茶ぶりから逃れようとするとは非難轟々だから

“京”の性能やムーアの法則を踏まえると近未来が舞台の作品で20ペタは正直ポンコツかもしれない

5話 世界征服を目論む悪役連中は征服後は世界各地で反乱分子を生み出さない

「……はい」

『報告をお願い致します』

「10時のシミュレーションは無事完了。現時刻の周辺の演算能力は14程度。午後から開かれるフトモンの大会とストフェスに向けて徐々に人が集まってきているので、ピーク時には20を超えるものと思われます」

『そうですか。では、引き続き監視を継続して下さい』

受話器の向こうで電話の切れる音がした。

……全く、あの愛想も可愛げもない機械音声はどうにかならないものか。

もつとも、そんな下らないものをこの仕事に求めて就いた訳ではないのだけれど。

まだ少し寒い春の日本橋。

つい先ほど仮想世界でミサイルが飛んできた方角を眺めながらため息をひとつ。

ボクは新天寺社の裏側に所属する人間だ。今や世界中に爆発的な広がりを見せている奇跡の携帯ゲーム機、Another Religion。

拡張現実を意味するAugmented Realityとこじつけて、少し無理のある感じに「もう一つの世界」の名を与えられたこのマシンには文字通り二つの顔があった。

一つは全く新しい形の娯楽と便利を提供するツールとしての側面。ブログの記事、新天寺社の運営する各種SNSコミュニティや動画サイト、通販などの情報を複雑に、しかしユーザーの目にはシンプルにリンクさせ、それらの情報をアーリーに蓄積、ユーザーが各

種サイトにアクセスする度にその情報が新天寺社のサーバに送られ、パーソナルデータが更新される。

それらのサービスを日常的に利用している人であれば、新天寺社は本人よりも緻密に、正確に本人の好みを把握し、欲するであろうものを提供してくれる。

その他にも有料・無料を問わず存在する多種多様なアプリ。それらも活用して、たとえば自分用の日記や家計簿を自動でつけることだって可能。

そういった有用なアプリの中には学校や病院などの公共の機関と提携し、共同開発されたものも多数存在する。

人工衛星を所持する組織と手を組んで、AR機能を活用した最新のGPSもまたそれらの内の一つだと言えるだろう。

言うまでもないことだが、それらの情報も新天寺社は無断で集積し、利用し続けている。ステークホルダーへの誠意なんてものは微塵も持ち合わせていない。

更に悪質なものになると実は機能を立ち上げていなくとも、スリープ状態であっても一部の機能が自動でオンになって情報収集を行っているものもあり（勿論、ユーザーの目にはオフに見えるように偽装されている）、カメラ機能もその一つである。これによって無警戒にアーリーを持ち歩き、仮想世界を見るためにアーリーを開く度に自動的に周辺の風景を収集する——なんて機能もある。

当然、ユーザーがその機能を意識して使った際に集めた情報もしっかり送られてくる。

数千万の目が勝手に日本中を歩き回って膨大な風景を切り取り、基地などから割り出せる位置情報と抱き合わせて持ち主の活動をほぼ完全に把握。

同時にその土地に関する情報を更新する、というものだ。利用方法は幾つか思い当たるが、新天寺社が何を思ってこんな機能を実装したのかはボクも知らない。

こうして合法・非合法や同意の有無を問わず、消費行動、学力、病歴、位置情報などの膨大なデータが集められ——そして、それらはアーリーの、ひいては新天寺社も一つの顔へと流用される。

ボクは一度たりとも会った事はないが、新天寺社を本当の意味で牛耳る連中の理想——世界征服、へと。

字面だけ見れば頭の悪いフィクションそのものでしかない。

しかし、彼らはその途方もない妄想を

”万人が新天寺社の各種サービスによる本人よりも本人の好むものを探し出し、提供してくれる環境を肯定している状況”

”万人とはアーリーユーザーの8割超と仮定し、ユーザー総数国内で1億を経て、世界全体で10億をひとまずの目標とする”

”環境を肯定しているか否かは各人のパーソナルデータやレビューを加味し、専門家に分析を行わせて判別する”

”専門家は厳密な判定を行える、新天寺社及びその関連企業に属さない第三者とする”

——といった具合に、どのような状態を世界征服完了とみなすかを一言一句細かく定義しながら、実現可能な目標として見据えているらしい。

そして、少なくとも曲がりなりにも先進国の一つであり、世界有数の経済大国にニューヨークという新しいインフラを生み出すに至った。国民の自覚の有無はどうあれ、もはやこの国は国家と企業の二つの軸のせめぎ合いによって機能していると言っても過言ではない。

彼らは子供向けの特撮番組の悪役ではない。ただ支配して蹂躪したい、搾取したいなどといった軽薄な欲望を御せない程愚かでもないし、そもそもそんな利己的な目的で突き進む程幼くもない。

あくまでも大衆の幸福の為に。大衆と一緒に幸せになれるのが

自分達である為に。 自分達の愛に確実に人々が報いてくれる社会を築くために。

そんな普通に暮らしている一般人には何の問題もない、ある意味では崇高でさえある野心を胸に動いている。

新天寺社が人々の暮らしを支え、考え得る最高の幸福を。

人々は様々なサービスの恩恵を受け、その対価を支払う事で新天寺社に利益を。

利益はそのサイクルに加わらない人にも巡り巡って還元される。

三方よしを体现したかのような商人の理念に何一つとしてやましい所はない。

新天寺社は今日もユーザーに素敵な出会いを、楽しみを振りまいてゆく。

子どもたちに学ぶ機会を、より楽しく学ぶ手段を与える為の工夫を繰り返す。

世界中の全ての人を新天寺社の手によって幸せにしよう……そんな純粋な願いの為に。

もつとも、ボクにとってはそんな事はどうでも良いのだけれど。

6話 不意に視線を感じて虚空に「貴様、見ているな！」と指差したのを家族に

「兄さん、だつて？」

『そう、兄さん。 兄さんは小さい頃に親を亡くした私のたった一人の家族なの』

「そうか……」

その説明と、さっきの映像をわざわざ俺に見せた理由を考えれば
おおよその事情は把握できた。

新天寺社の裏の顔と彼女の願い。 その二つを繋ぐものがあると
すればこうだ。

寝たきりの彼女の入院費を賄うために、彼女の兄が新天寺社の裏
側に所属している。

情報漏洩の許されない仕事である以上、そこに属する者にはしつ
かりと首輪をつけておかねばならない。

唯一の肉親が寝たきりで、莫大な金銭が必要になる。 よほど関
係が険悪でもない限り、これに勝る抑止力は存在しないだろう。

で、夏芽としてはたとえ自分のためでもそういう汚れ仕事をして
欲しくない、と。

「……一応確認しておくけど、君の名前は中野 夏芽だよな？」

『ええ、そうよ。 それがどうかしたの？』

「君と君のお兄さんの名字が違う理由は？ あと、君の兄さんは新
天寺社の裏側に関与している。 それで間違いないね？」

その一言で、彼女の瞳が驚愕によつて大きく見開かれた。

もともとが萌え萌えしい絵なので目は最初からバカでかいのだけ
れど。

『兄さんを知ってるの?!』

「知ってるって程のものではないけど。多分、さっきワクドで見かけた」

夏芽は俺が次の言葉を紡ぐのを固唾を飲んで見守る。

その表情はあまりにも真剣そのもので、つられて俺の表情も硬くなる。

そして、夏芽の兄と思しき人物の名を、ワクド内で見た光景を思い返しながら口にした。

「確か、大須 冬彦って」

『間違いないわ! 兄さんよっ!!』

やっぱり。

その知名度と影響力に反して比較的新しい企業である新天寺社の社員数は少なく、俺の知る限りでは大阪に、というか東京の本社以外に支社があるなんて話は聞いた事がない。

急激な拡大にサービスやシステムが対応している事を考えると、何とも理不尽かつ不自然な話ではあるが。

「よし、行こう。まだワクドにいるかも知れない」

『……ありがとう』

素直に礼を述べる夏芽。その態度に少し居心地の悪さを覚えた。実のところ、彼女の兄がまだワクドにいるとは思っていない。

ただ、それ以外にめばしい場所がないからワクドが拳がっただけだ。そう考える理由は至って簡単。まだ、俺の視界に例のプロフィールが映っているから。

最初は訳が分からず困惑するばかりだったが、夏芽の話を聞いた今ならこれらが何を意味するのか、何故こんなものが見えるのかも

容易に想像がつく。

これは新天寺社の、裏側の仕事に携わる人間のみが閲覧可能な、新天寺社に関わりを持つあらゆる組織から集められた情報だ。

そして、俺の目にコレが映っているのは夏芽の兄、大須 冬彦のアーリーの情報の優先順位が高かったからだろう。

未だにプロフィールが視界に入りこんでくると言うのは即ち、大須 冬彦は俺が情報を受信できる範囲内にいる、という事だ。

もしかすると千里とのやり取りを盗み聞きされたのかもしれない。もしかすると俺と夏芽のやり取りが――仮に不気味な独り言に見えたとしても――監視されていたかもしれない。最悪の場合、俺の目の事を知って、尾行している可能性だってある。

もしも、この目の事を知ってしまったと仮定して、大須 冬彦はどうするだろうか。

ただの与太話だと思って聞き流すだろうか？

希望的観測ではある。 が、こんな非常識な目の存在をはいそうですかと素直に信じる奴なんて滅多にいない。 よほど俺の事を信用してくれている人は例外として。

ただ、俺はワクド内でフトモンを肉眼で探し当てているし、千里との会話もある。

そして何より、彼の妹もまた非常識な能力を有している。

もしも、夏芽が意識を失う以前からこの能力を持っていて、そのことを周囲に伝えていたとしたら。 少なくとも唯一の肉親である兄にまで黙っていたとは考えにくい。

よって、この可能性は現実的ではあるが現状に即してはいない。

何より未だに俺の目にプロフィールが映っている事の説明として、たまたま近くにいるはあまりにも不自然だ。

ワクドで目の話を聞いて、俺に興味を持ったと考えるのがまあ、妥当だろう。 それで俺を尾行して、一体何をするつもりなのかはあまり考えたくないが。

さて、どうしたものかな？

「なあ、夏芽。君の本体はどこにある？」

『愛千橋病院だけど、それが何？』

「やっぱりこの辺にあったか。短期決着を狙うなら君の兄貴を説得するのに一番適した場所はそこだろうな、と思ったんだよ」

適当な信号を渡り、更に奥の通りへと進んでゆく。

愛千橋病院。 ”人間LOVE！隣人LOVE！”を基本理念として標榜する総合病院としては平均的な規模の病院。ここからなら歩いて10分とかからずに到着する程度の距離だ。

「で、病室はどこ？」

『……分からないわ。でも、そんなの受付で聞けばいいじゃない？』

「教えてくれるならな。病室を知っている事をアピール出来れば勝手に知り合いだと思ってくれるかもしれないだろ？」

人の目を盗んでこそそこそこ病室に行くよりは後々面倒事が少ないだろう。

もつとも、病室で彼女の兄貴に騒がれたらどうにもならないけど。

「となると、あの手で行くか」

一旦表通りへと戻って信号を渡り、反対側の通りの裏通りへ。あつという間に病院に到着した俺は小走りで受付へと向かった。

「すみません、中野 夏芽の病室はどこですか？！」

「はあ、その方とはどういったご関係ですか？」

笑顔で、しかし胡散臭そうな視線を向ける若いナース。

その態度も質問も彼女の立場を考えれば至極当然のものだろう。

「俺は夏芽の弟で、大須 秋雄って言います！」

「大須……？」

ナースは首を傾げた。あの短い文章で食い違っているのだから当然と言えば当然か。

しかし、同時にあまりにも堂々と間違っているからこそ、その間違いの背景を想像してしまい詳細を尋ねにくい、といった困惑の色が徐々に強くなる。

「おや、夏芽ちゃんの知り合いかい？」

そんな彼女に助け船を出すように声をかけてきたのは初老くらいの医師。

助け船を出しているようで、患者の存在という形で情報を漏らしてしまっているが。

この辺の情報に対する意識というのはある程度年を食った人の方が希薄だ。

という事で、ターゲットをナースから医師へと切り替える。

「はい、大須 秋雄です。兄貴の用事に無理矢理ついて来たついでに見舞いに来ました。多分、兄貴も後から来ると思います」

「ふむ……」

初老の医師は下あごに手を当てて二度ほど頷く。彼なりに俺の言葉を吟味しているのだろう。

中野 夏芽を知っている。大須姓を名乗っている。名前に季節が入っている。

だからと言って、何一つとして身内である事を証明するに足る要

素はない。

そもそも、この医師が夏芽の家族構成をどの程度知っているかも分からない。が……

「彼女なら1007号室だよ」

幸いにも俺の話を信じてくれたようだ。

医師にお辞儀をしてから早足でエレベータへと向かう。

→ボタンを押し、エレベータが降りて来るまでじっと待つ。

『よくもまあ、とつさにあんなウソが飛び出るもんね』

「大したもんだろ？」

『確かに凄いけど、犯罪も良いところじゃないの？』

「必要悪と言ってくれ。　　と、来た来た」

エレベータに飛乗り込み、10階のボタンを押した。

ドアが閉まる。　　わずかに揺れた後に、静かに上昇を始める。

「そう言えば。　　さつきは何とか濁して誤魔化したけど、君は何歳なんだ？」

『今年で17歳。　　順調に進学出来ていたら4月で高校2年生、の筈だったんだけどね』

「……　　そっか、俺より1つ年上なんだな」

俺の目にしか映らない彼女の表情に少しだけ翳が差す。

失言だった、とは思わないがそれでも何となく申し訳ない気持ちにさせられた。

何とも居心地が悪い。

『つて、アナタ中3なの？』

「そうだけど？」

『とてもそうは見えないわ』

「老け顔のつもりはないんだけどなあ……」

『見た目の事じゃなくて。見た目もちよつと大人っぽい気はするけど。状況に対する対応とか見てると20歳以上って言われても驚かないくらいの感じだったら、もつと大人だと思つてたわ。あ、流石に本当に20歳以上だとは思つてないわよ』

夏芽がそう言い終えるのが早いか、エレベータが10階に到着した。

フロアマップに目を通し、階の端にあるエレベータホールから1007号室へと歩を進める。

「そう言えば、夏芽は自分の姿って認識できるのか？　と言うか、そもそもどうやって俺の姿や視線や声を認識しているんだ？」

リノリウムの廊下を歩きながら、そんな事を尋ねてみる。

まあ、視線を認識する機能に関しては夏芽に限らず、あのプロファイルなんかに備わっていたものではあるのだけねど。

一方で、音声に関するあれこれは未だかつて経験した事のないものだった。

考え出すと止まらなくなりそうなのであまり深くは考えないが、こうして普通に会話しているのも実は色々と不自然だ。

『アナタに係る要素はなんて言うか例外みたいなものだと思う。だから、理屈を求められても見えるから、聞こえるから、感じるからとしか言えないわよ。それ以外の現実の世界の情報になるとARカメラ越しにしか見えないんだけどね。だから私自身の姿は見えないわ。それも映像じゃなくてデータを分析してその内容から想像する形。　というか、何かしてないと見える見えないすら

見えていないって感じだったわ』

と、淡々と語る夏芽。

しかし、自分の姿を知る術がないと言った時の彼女の瞳は憂いを帯びていた。

データを分析する、と言うのがどういう事なのかは俺には分からない。何をどんな風に想像するのかなんて皆目見当もつかない。が、彼女が俺に出会うまで誰かにその姿を認めてもらえなかった事を思えば、ARのカメラ越しに彼女自身を見る事が出来ないのは当然である。

そして、その当然によって彼女は孤独な世界へと閉じ込められていた。

ARゆえの、アニメ絵ゆえの感情の分かり易さが、彼女のその苦しみを明瞭に伝えてくれる。

「……自分の姿が見えないってのは不安じゃないのか？ そもそも、カメラ越しの世界しか見えないってのは殆ど何も見えないようなもんじゃないか」

『凄く不安に決まってるじゃない。自分でも自分がどこにいるのか分からなくなることがあったり、私の中から私って意識が少しずつ希薄になっていくような、そんな錯覚を覚えた事もあったわ』

とてもじゃないが、想像すら出来ない世界だった。

無明の闇ですらない限りなく無に近い世界で、何も見えず、何も聞こえず、自分すらもやがてその無に溶けてゆく。

想像する限りでは、それは恐怖以外の何者でもないだろう。もっとも、そうなった時には恐怖するだけの思考能力さえ残されていないのかも知れないが。

よくもまあ、そんな状況にあって実兄の心配など出来たものだ。そんな事を考えているうちに俺達は1007号室の前に到着した。

何も見えない状況でどうやって新天寺社の裏側に気付いたのか、そこに自分の兄が属していると知ったのか。他にもいくつか聞きたい事はあったけれど、どれも個人的な興味・関心の範囲を出ない程度の瑣末な疑問だ。

今はやるべき事をに集中しようと余計な考えを振り払って、病室のドアを開けた。

7話 寝ている女子の放屁で夢から覚める少年たちに告ぐ、むしろそれが良いと

「うーん……まさしく眠り姫って感じだな」

それがベッドで目を閉じたまま微動だにしない少女を見た時、真
っ先に浮かんだ感想だった。

長らく使われていない四肢は痩せ細っており、もしも今目を覚ま
したとしてもまともに動けないだろう事は容易に想像できる。

痩せこけた少女の顔は不相応に肉が少なく、不健康もいいところ
だった。 が、それでもなお思わず見とれてしまいそうな程に美し
かった。

長く伸びた絹のように艶やかで繊細な黒髪。 手入れをしている
訳でもないのに形の整ったまゆ毛。 閉じられた瞼から伸びるまつ
毛は豊かで長い。 鼻筋は良く通っており、更に視線を下へやると
形の良い唇が微かに寝息を立てている。 どうやら呼吸器の類は使
用していないらしい。

「って、この子が本当に夏芽なのかよ？」

『どういう意味よ、それ？』

「いやだって、なあ？」

もつと男勝りで勝ち気そうな資格好をイメージをしていただけに
これには面食らった。

このかぐや姫もかくやの（と言ってもかぐや姫の実物を見た事はないが）少女が口を開くとこっちのAR少女みたいな感じになるの
かと思うと……とても残念だ。

じつと彼女の寝顔を眺めていると彼女のプロフィールが浮かび上
がってきた。 さすがにそれをまじまじと見るような真似はしなかつ
たが、少女の名前が中野 夏芽である事だけはしっかりと確認さ

せてもらった……ああ、残念だ。

出来る事なら彼女が夏芽の本体だなんていうのはただの妄想で、この子は上品に微笑んで「ごきげんよう」とかそんな感じの挨拶をする深窓のお嬢様であって欲しかった。

別に夏芽の人柄が嫌いなわけでは断じてない。が、それを彼女の中に突っ込むのはどうしても違和感が拭いきれない。ギャップ萌えならぬギャップ萎え。

身勝手と言われればまさしくその通りではあるのだが、それでも夢は夢として夢のままに胸の中に留めておきたいのが人情なのだから仕方ない！

『だってなあ、なんて言われても分からないわよ。そもそも自分の顔なんてしばらく見てないんだから』

「それもそうか。まあ、アレだ。悪戯するなら今のうちかな、と思える程度には美人だ」

『ほっほう。さすがはアタシね』

でんでんタウンのイメージキャラクターの姿を借りた少女が妙に得意気な表情で頷く。

……やっぱりなんか違う。

『でも、変なことしちゃダメよ！』

「額に肉って書いてやるぜ……とかか？」

『悪戯ってそういう！？』

「そっいうって、他にどんな悪戯があるってんだよ？」

『そ、それは……』

少し大げさにたじろく夏芽。

徐々に顔が赤くなっていくのが面白くも可愛い。

すると舌の根も乾かぬうちにこっという方向性ならあの子の中身で

も良いかもとか思ってしまう辺り、俺はわりとどうしようもない類の人種なのかも知れない。

『で、でも美人って言うてたわよね？ 額に肉じゃ美人である事と悪戯の間に意味のある繋がりが見いだせないわ！』

「そりゃあれだ。 まっさらな壁を見ると落書きしたくなる心境」
『アタシは壁と同レベルか！？ そしてアンタはヤンキーか！？』

夏芽はうがーっと両手を掲げて威嚇するみたいに構える。
が、相手は二次元美少女のARなので威嚇されたってちつとも怖くない。

「それが嫌なら商店街のシャッターでも良いぞ？」

『せめて生き物にしないさいよ！？』

「んじゃ、よく小学校の校庭に紛れ込んだ眉毛犬」

『……はあ、もうそれでいいわよ』

夏芽は漫画みたいな横線一本の目になり、がっくりと肩を落とした。

ああ、そうか。 ARだからこういう感情表現も出来るんだな。
なんてどうでも良いことに思わず感心した直後、こちらに向かつて近付いて来る足音が廊下に響いた。

「……夏芽、静かに」

口元に人差し指を押し当てた格好のまま、息を潜め、ドアに張り付いて耳をすませる。

遠くから反響して聞こえていた靴音が、徐々に大きくなってゆく。
カッン、カッンとリノリウムの床を叩く音はやがて、1007号室の前で止まった。

そう言えば小説なんかで病院の床材に使われているのが大概リウムなのは何故だろうか？

脈絡もなく湧きあがったそんなアホみたいな疑問を脳の片隅に追いやり、

「なあ、中学生相手にこそこそする必要もないだろ？」
「……」

話し合いを持ちかけてみるも、全くの無反応。
警戒されているのか、相手にされていないだけなのか。 ふむ、
となると……

「あんまりつれない反応するとこのお嬢さんに悪戯しちゃうぜ？」
『オイコラ、ちょっと待て』

「はあ、人質だなんて悪い子ね。 そういうのはお姉さんは感心しないわよ？」

安っぽい作戦ではあるが、効果はあったようだ。

足音の主はゆっくりとドアを開けて俺の前に姿を現した。

ただ、困った事に釣りあげる相手を間違ってしまったらしい。

俺の目の前に立っていたのは、露出の多いファッションと歩くたびに揺れる金色のエクステがひときわ目を引く、そしてそんな中々に敷居の高いコスプレを完璧に着こなす引き締まったボディのセクシーなお姉さまだった。

「……えーっと、ワクドぶりっすね？」

「あれ、私の尾行に気付いていたんじゃないの？」

「いえ、全く」

直後、彼女は「あー、やっちゃったー！」と頭を抱えてうずくま

った。

もつとも、「やつちやったー！」なのは俺も同じなのだが。すっげえ真面目な感じに、ちょっと格好つけて「中学生相手にこそそする必要もないだろ? (キリッ)」とか言っというて別人でし たってどういうオチだよ。

しかも、それに応じた相手がレイヤーのおねーちゃんって……。穴があつたら入りたい心境って、こういう事を言うんだろっうなあ。いや、むしろ私は穴になりたい、そんな心境だ。

「で、何で俺を尾行していたんです?」

間抜けな失敗の恥ずかしさなど微塵も表情に出さず、そう切り出した。

レイヤーの女性もちょうど良い助け舟、とばかりに立ち上がってその話題に乗る。

アーリーを所持していた筈だが、彼女のプロフィールは表示されていない。

大須 冬彦が俺の尾行を止めたからだろうか? それとも彼女のアーリーが特別な仕様なのだろうか? コスプレのせいで顔の認識がうまくいかないのだろうか?

とにかく理由は分からないし、そもそもどうやってこの目が、アプリが、個人を認識しているのかさえも知らないが、彼女の情報を覗き見る事は出来ない。

「私は……君のお友達の事を訊きたかったのよ」

「友達? 誰の事ですか?」

「彼女さんだった?」

「いよいよもって誰の事だか」

ガールフレンド、だなんて全く心当たりがない。

……とは言わないが、思い当たる節をおいそれと話すほどボケてはいない。

「はあ、面倒くさい子ね……。分かったわ、はつきり言えればいいんですよ？」

「はい、なんでしょう？」

訊かれたところで答えたくないものには答えないだろうけど。

「あなたがワックと一緒にいた女の子は北里 千里ちゃんよね？」

「……訊きたいのはそんなことですか？」

はつきり、と言いながら明らかに迂回している女性に訝しげな視線を送る。

相変わらず警戒されている事に気付いた彼女は少し困った風な笑みを浮かべ、所謂降参のポーズをとった。

「別に彼女に悪さしようって訳じゃないのよ？」

「人から何か訊き出そうとしている人が、なおかつ悪さしようとしている人は皆そう言います」

「うっ……」

「アナタはあいつの知り合いでも何でもありませんよね？ 生まれも育ちも大阪のあいつにワックなんて略称使う知り合いがそうそうもいるとは思えないです。仮に知り合いならこんな風に嗅ぎ回っている状況自体かなり不自然。大方、昔の大衆誌の記事であいつの顔を知って、偶然見かけたからミスター心で……ってところですか？ もしもそうだとするならそんな輩に話す事なんて微塵もありませんし、それ以外だと胡散臭くてなおさら話せません」

まくし立てるように、一気に話した。

女性はぽかんと口を半開きにして、瞼をしばたたかせている。
対する俺は口を真一文字に結んだ不機嫌そうな表情でじつと睨み
合う。

「……分かったわ。 あなたの千里ちゃんへの愛に免じて大人しく
引き下がらせてもらっわよ」

やがて、Yuiyのコスプレをした女性が折れた。
再びドアを開けて廊下へと一歩踏み出した彼女は、去り際に一言、
こんな事を言い残した。

「もしも彼女が新天寺社と変な関わりを持っているようなら引き止
めてあげなさい」

言葉通りに受け止めるならば「千里を守ってやれ」という意味に
なるのだろうか。

しかし、同時に「よほどの意思がないなら千里に関わるな」と受
け取ることも出来るし、或いは「新天寺社に気をつける」という忠
告の可能性もある。

他にもそれらの複合、俺の反応から何かしらの情報を引き出す為
のトラップなんて可能性も考えられるか。

色々なケースを想定して、どれと断ずる事も出来そうにないと判
断した俺は、

「なぜ新天寺社なのか分かりませんが、悪い付き合いなら言われ
るまでもありません」

ひとまず適当にはぐらかすことにした。

7話 寝ている女子の放屁で夢から覚める少年たちに告ぐ、むしろそれが良いと

千里に関しては追々

それはそれとして、任。堂カンファレンスのAR。クさんが可愛過ぎて生きているのが辛い……

AR技術さえあれば手乗りミ。さんが現実のものになるんですよ
あと【禁則事項です】とか【放送禁止です】とか【規制対象です】
とか！！

8話 コスプレを見た際にべったん子キャラなのにたわわに実っていた時、果た

「熱くなっちゃって。大人びててもまだまだ子どもね」

つい先ほど出会った名も知らない少年のことを思い出し、呟く。
かの天才少女、北里 千里の友人だとすれば、彼女と同じくらいの年頃の子もだろう。

それにしては年齢不相応に落ちついた雰囲気と態度の少年だった。断片的な情報から私が何者かを割り出そうとし、幾つかのパターンを想定した上で悪手は打たないように頭を働かせているかのような言動はなかなかどうして、大したものだ。

私が彼くらいの年齢だった時にあそこまで頭を使って生きていたかどうか。

少なくとも悪党を追い詰めるためにはそれなりに頑張っていたけれど、それに手いっぱい自分の回りにいる人を気遣う余裕はなかったような気がする。

けれど、その気遣いが仇になったのもまた否めない。

確かに北里 千里は一時悪い意味で有名になり、全国的に顔を知られていた。

でも、それはもう多くの人にとってはあるか過去の話であり、大衆紙で見かけたモノクロの顔写真を覚えていられる人なんて殆どいない。

それに、プライバシー上の理由ですぐにその雑誌は回収されてしまっている。

ネットで検索でもすれば簡単に彼女の顔を確認する事は出来るが、わざわざそこまでする程彼女に関心のある人なんて早々いないだろう。

だからこそ、彼女は今日も彼と並んで平気で街を歩いていられた。

実際、私が北里 千里の事を知った（より正確には思い出した）のはあの電話の後で上司から送られてきた資料に写真付きで彼女をマークしろとあったからに過ぎない。

そこを見落としてしまったのは間違いなく彼の未熟ゆえだ。

最後の口ぶりと態度を見る限りでは、彼は新天寺社の裏側を知っていた。

加えて、私の言葉によって北里 千里がそこに関わっている事を察したはず。にもかかわらず、私を利用出来ないか、その道を探ろうとしなかった。

学校という閉鎖的な空間で過ごしていたせいで、どうしても過敏にならざるを得なかった、攻撃的になるしかなかったというのはあるだろう。が、それでも私の名前や連絡先さえも訊き出そうとしなかったのは間違いなく失敗だ。

もつとも、彼に必要以上に警戒されて情報を引き出し損ねたのは私も同じ事なのだけれど。

そんな事を考えながら病院の外に出た私の視界に一人の少女の姿が飛び込んできた。

オレンジと黄色を基調にした、控えめに見ても日常的に着用するものには向かない衣装をまとった緑髪の少女。

もちろん、ゴーグルの乗った独特の色の髪の毛は地毛ではないだろう。

このコスプレは、Yuiyと同じ会社の販売しているヴォーカロボット”RUMI”のそれと見て間違いはない。

ヘッドホンやインカムといった小道具の類までしっかり再現されている。

顔立ちの良さも相まって、中々に完成度の高いコスプレだ。

ただ一つ、いや二つほど問題を挙げるとすれば、胸のふくらみが過剰なのがまず一点。それから、両手に持っているものが30センチメートル程度のスタンバトンとH&Amp;K P2000と

いうのも一つ。

両手の得物をちょうどスカートの内側の太ももに巻き付けたホルスターに突っ込んでいる最中だった。

RUMIはそんなもの持っていない。

……いやいや、そういう問題じゃないか。

コスプレ少女は私を見て無表情のまま私の様子を伺っている。

何かを察した、というよりはたまたま目が合ったその流れでどういった感じの反応だ。

大通りの一本奥にあるこの病院の前は人通りが多いとは言い難い。仮に誰かしらいたとしてもその殆どが彼女のコスプレが何なのか分からない人の方が多数であり、今日のイベントや私と彼女の格好を考えればそういうものなのだと思って軽く流されるかも知れない。

そもそも、彼女は何者なんだろうか？

銃は本物なんだろうか？

何の用があつてあんなコスプレをしているんだろうか？

色々考えてみるが、どう考えてもろくな結論には達しそうにない。そう結論付けるが早いか、一瞬早く身を翻してなるべく不審な気配を察知されないようゆっくりと歩いて駐輪場を通り抜ける。

万が一、拳銃が本物だったらどうあがいても勝ち目なんてない。背中を向けるのもそれはそれで危険だけれど、いきなり撃つてこなかったところを見ると下手に仕掛けない限りは安易に発砲しないと思いたい。

とにかくひとまずここから離れて、それから改めて考えよう。歩きながら、振り返って少女の様子を伺う。

私の事など気にも留めず、当然のように病院へと入って行った。

「ちょ、流石にその展開は卑怯でしょ!？」

まあ、病院の前にいたんだから病院に行くのは当然と言えば当然なのだけれど。

しかし、私と無関係のところでは何をしてくれたって全く問題がないのもまた事実。

それでなくても私には顔も分からない新天寺社の裏側の構成員、大須 冬彦の捕獲と天才少女こと北里 千里の保護という二つの役目があるのだ。

あんな訳の分からない相手に悠長に構っている暇なんてある筈もない。

仮にあの少女がただの狂人で無意味な虐殺が目的だったとしても、大義の為の小さな犠牲として見なかった事にすれば良い。

私の雇い主は国家そのもの。そして、私に課せられた使命はあまりにも短期間に大きくなり過ぎた新天寺社の――今や日本の国土に重ね合わせに存在する仮想の共同体の行政府とすら呼ばれる程になった、かの企業の弱みを何としてでも見つけ出すこと。

東京と比べて新天寺社の回し者の介入が少ない今回のような状況はまたとないチャンス。

どういう経緯でこの情報を得たのかは分からないけれど、ボスが休暇中の私にいきなり電話をかけて来たのも無理からぬ話。

この機会を逃せば新天寺社のスキャンダルの証拠を押える次の機会が巡って来るのはいつになるか。

この国に二つもの国家はいらない。そんなものは騒乱の原因になるだけだ。

その任務と正義の重さを改めて確認した私は――躊躇う事なく、踵を返した。

大義の前の小さな犠牲？

その判断はきつと間違つてはいないだろう。

けれど、私が小さな犠牲を認めるかというそれはまた別問題。

100の正義と1の正義。その二つが両立しないと決めるのは

いつだって自分だ。

だったら、私は迷うことなく101の正義を選ぶ。

たとえ、その為に1000を超える困難が伴うとしても。
それが正義の味方というものだ。

「やったるうじゃないの……！」

自らを奮い立てるように呟きながら、再び病院の自動ドアをくぐった。

9話 ソンビパニック的状况下で日本人が拳銃を手にしたところで普通は使いた

「あー、失敗した……」

あのコスプレイヤーの女性の名前を訊いておくのをすっかり忘れていた。

そもそも彼女が千里にとってどういう存在なのかの見極めすら出来ていない。

何の為に千里の周辺を探っているのか？ その一点でも色々掘り下げて尋ねる事は出来た筈なのに。

もしかしたら、千里が新天寺社の変な研究に無理矢理協力させられていて、彼女はそれを阻止するために来た可能性だってあるのだ。…… もつとも、千里を助ける、と千里を可能なら助ける、と千里を殺してでも阻止するでは同じ動機でも状況が一変するのだけれど。その辺についてもしっかりと確認を取っておくべきだった。

「くっそ、慣れない事態で熱くなってるな」

『物凄く冷静に見えるけど？』

「必死こいてス力してるだけだよ」

少なくとも俺自身、この状況に混乱しているし焦燥感を覚えてもいる。

夏芽の兄を止める。 それだけであつたならまあ、何とかなつた。大須 冬彦をつかまえて、彼に新天寺社のシミュレーションや妹の件について説明してからあれこれと説得すれば何とか…… とも思えた。

しかし、先の彼女とのやり取りを経て、状況は一気に複雑になつてしまった。

どうやら新天寺社を追う勢力が存在するらしい事。

その勢力が何かしらの理由で千里の周辺を嗅ぎまわっている事。新しい情報はたったの二つ。けれど、それだけのせいで俺は大須 冬彦以外に千里も探さなければならなくなってしまった。それも尾行されている可能性も考慮しながら。

加えて、個人情報を書き記したARが大須 冬彦のもので無かった事によって彼の搜索は手掛かりすらない。

それに――

「だったらこの目はなんなんだよ……」

大須 冬彦のARから離れたにもかかわらず、窓の外を行きかう人に目をやると視界には相変わらずプロフィールが溢れかえっている。

目がバージョンアップした、とても考えるべきなのだろうか？
だとしたら、これからは眼帯でもつけて歩くようにした方が良いのかもしれない。

「俺はもう中三だっつーの」

その光景を想像して、盛大にため息をつく。

こう言う訳あって眼帯を常備している人に失礼かもしれないが、これは痛い。あまりにも痛々しくて残念なことこの上ない。

込み上げてきた何とも言えない物悲しさに背中を押されるように病室を後にした。

「悪いな、夏芽。一から探し直した」

『問題ないわよ。それくらいは最初から覚悟してたから』

「ついでに悪いけど、君の兄貴の事は後回しだ」

千里もこの事態に関与している、あるいは関与させられるかもし

れない。

そんな状況下で何処にいるかも分からない見ず知らずの男を、ついさつき会ったばかりの女の子の為に探せるほど俺は出来ちゃいない。

『どうして？』

「友人が厄介事に巻き込まれてるらしいんだ」

『そっか……それじゃ、仕方ないわね』

そう言って笑ってみせる夏芽。

けれど、表情の端々に隠しきれない不満が滲み出ている。

義理もないのに厄介事を引き受けてやったのに、何だよその表情は。そう思う一方で彼女の願いが本物である事を実感し、兄を想うその心意気には感動すら覚える。

自らの目を開く事も、言葉を発することすらかなわない体になつてなお、遂げたい想いの為に見ず知らずの他人に助けを求めて来たのだ。

彼女から見て、俺が彼女を見えると確信できる情報なんて無かった筈なのに。

俺に出会う以前から道行く人々に何度も何度も声をかけ続けていて、たまたま俺を呼びとめる事が出来た——そう考えるのが妥当だろう。

声は届かず、誰ひとり彼女を見ようともしない。　どうあがいても彼女の存在は認識されない。

自分が何者なのかさえもわからなくなりそんな孤独の中で、彼女は必死に助けを求め続けていたのだろう。

それほどの決心を持って、想像を絶するほどの苦難を経てようやく自分の声を、姿を知覚できる人に出会えたのだ。

そこまでの苦労を経ておいて素直にこちらの事情を受け入れて引

き下がるとすれば、それこそ「その程度の願いのために俺を引きずり回すな」と憤る。少なくとも俺はそう考える。

「俺は完璧超人じゃないから確約は出来ないけど、それでも友達を探しながら、探し終わってから、出来る限りの事はするから」
『……ありがとう』

本日何度目になるかの謝意に笑顔を添えた彼女の眩い表情。それを直視しないように少し顔を背けつつ、横目でちらちらと様子を伺う。

果たして彼女は今自分がどんな表情をしているか、自覚しているのだろうか？

なんて事を考えながら廊下を歩いていると、これまたヴォーカロボットのコスプレをした緑髪の女の子とすれ違う。

彼女の名前は『坂田 うめ』というらしい。見た感じ、年齢は俺とあまり変わらない。

なんだ、コスプレしていてもちゃんと機能するんだな。

と、名前を凝視していると次の項目が表示された。わお、デカメロン。

——直後、俺の目に再び異変が起きた。

【The Watcher】

【Mjollnir 300】

【H&Amp;K P2000】

俺の事なんて気にも留めず、背中を向けて歩くコスプレイヤーの額のゴーグルと太ももの付近に、そんな文字が躍る。

その英数字が何を意味するのかなんてさっぱり分からない。け

れど、視界に映ってすらいらないものの情報が反映されるというのは結構不自然な状況だ。

確かにAR機能を利用したアプリには登録されている商品がカメラ内に収まった時、その商品の名称と定価、レビューの評価を表示するものがある。

けれど見えていないものに対してはこの機能は当然効果がない。下着の情報が筒抜けになってしまい、破廉恥なことこの上ないから妥当と言えば妥当な話。

そしてこの制限は今の俺の目にも完全に適用できるものだった。通りを歩いている時、一度たりとも女性の下着のメーカーの情報が見えた事はなかった。

見える筈のないものに関する情報が見える。つまり、彼女の持っているものが見える見えないとは別に新天寺社のARの影響下にあるということ。

位置情報を把握するためのチップでも埋め込んでいればそれ自体は別にむずかしい事じゃない。が、問題はわざわざそんな処置が施されているという事実。

そしてそんなものを隠し持っているという現実。

「なあ、夏芽。 M j o l l n i r 300とH&a m p ; K P 2000って何か分かるか？」

『確かH&a m p ; K P 2000はドイツ製の銃だったと思うけど……いきなり何？』

もったもな質問に沈黙で応えつつ、息をひそめる。

彼女はいったい何者なのか？

どうしてこの日本で銃なんて持っているのか？

そして、何のためにここに来たのか？

湧きあがる疑問と根拠のない推論の数々。 それらをどうせ碌な

もんじゃないうつぞんざいな結論と共に脳の片隅へと追いやりながら、出来る限り気配を消して彼女に近づく。

幸いにも、背後まで近付いてきた俺の気配にはまだ気付いていないようだ。

……とは言うものの、ここから先どうすれば良いのかをあまり考えていなかった。

とりあえず男女の膂力差にものを言わせて強引に押し倒すのが一番だろうかとは思うが、誰かに見られた時の事を考えるとリスクが大き過ぎる。

普通に交渉というのは相手の持っているモノがモノなのであり得ない。

となると、何とかして銃を奪うのが一番妥当な判断だろう。防犯カメラのある場所で奪い取れば、俺が銃を持ちこんだ訳ではない証拠にもなる。

もしかしたら銃でない可能性も少なからずあるが、銃であれば見えなくても位置の分かる処置の必要性はすんなりと受け入れられる。確認するだけ確認しておいて損はない。

意を決して彼女のスカートに手を突っ込んだ。こういう事をするのは物凄く気が引けるけれど、今は仕方ない。必死に自分に言い聞かせつつ、銃のグリップを掴む。

そして力任せにホルスターから銃身を引き抜くと同時に、思いつきり飛びずさった。

ついさっきまでいた場所で少女の白いブーツのかかところが美しい軌道を描く。振りかえりざまの後ろ回り蹴りだった。

「動くな！」

既にMjollnir 300と名付けられた警棒を構えて前傾姿勢を取っている彼女に向かって叫ぶ。

彼女の太もものホルスターに収められていたものは間違いなく拳

銃で、ずつしりとしたという程ではないものの、サイズのわりに確かな重さがおもちゃではない事を否応なく実感させてくれる。

幸いにも周辺に人はおらず、声を訊きつけてやって来る野次馬の気配もない。今のうちにやるべき事をやってしまおう。

震える右手を左手で押え、へっぴり腰で見ず知らずの女の子に向けて銃を構える。

が、彼女は緑髪を揺らして躊躇なく突っ込んで来て、微塵の躊躇いも見せずに脳天めがけて警棒を振りおろす。

とっさにもう一度後ろに飛んでから銃を構え直す。それでも少女の動きは止まらない。

今度は銃を構えた手を狙っての回し蹴り。これも後ろに飛んでよける。

続いて2度目の警棒。横薙ぎに振るわれたこれをまた後ろに飛んで逃げる。

単調な攻防の最中にふと「あ、誘導されてる」と気付いた時には俺はエレベータのすぐ前にいた。

エレベータホールは階の端に設置されている。つまり後ろは壁。

「当たり所が悪くても恨むなよ！」

背に腹は代えられない。思い切って手にした銃の引き金を引いた。

「……あれ」

弾は発射されない。それどころか引き金さえまともに引けていなかった。

困惑の色を浮かべる俺の事なんて気にもとめず、少女は俺の目の前まで歩いて来る。

そして、銃を持つ手に優しく、状況には不似合いの女の子らしい

繊細で柔らかい左手を添え、右手を強く握り込む。

安全装置か、と気付いた瞬間には既に手遅れで、小さくていかんせん迫力に欠ける拳が迫っていた。しかし、俺の手を握る彼女の手の握力は力任せに骨を潰されそうな程に強く、その拳もまた尋常じゃない程の力で握り込まれているのは容易に想像できる。

流石に死ぬことはないだろうけど、痛そうだなあ。

そう言えばこの子、いつの間に警棒を手放したんだろう。

って言うか何なんだよ、この怪力。

拳銃ってとつさに使える武器ではないよなあ……。

などと悠長に考えつつも、身を守るために目を瞑って額を突き出す。

せめて一矢とか、ここを殴られて意識を持つてかれることはないだろうとか、そんな事を考えていた訳ではなく。

ただただ、無意識の防御行動だった。

が、いつまで経っても痛みも衝撃もやって来ない。

恐る恐る目を開けると、どこかで見た色っぽい太もも。

視線を上へと移動させると、先ほど名前を訊き損ねた女性が不敵な笑みを浮かべて俺を見下ろしていた。

左足をしっかりと床に付けて、右足を膝を曲げて宙に浮かせた格好で緑髪の少女に向けている。

緑髪の少女はさっきまで強く握っていた右手のこぶしを左手で押えながら、憎々しそうに女性を睨む。

「や、少年。 逃げるんなら今のうちよ」

そう言いながら彼女が指差した方向を見ると、エレベータのドアが今まさに閉まろうとしていた。

その場を彼女に預け、エレベータへと駆け込んだ俺は銃を懷にしまいつつ1階のボタンを押す。

何事もなく1階へと到着し、ドアが開くと同時に急ぎ足で出入口へ。

ちらりと後ろの様子を伺うが、俺を追ってくる様子はない。

病院を後にしたところで一旦立ち止り、荒くなった呼吸を整えた。

さて、次に俺がすべきことは何か？

色々と思うところはあるが、今はそれに専念しよう。

夏芽の兄、大須 冬彦を探すことか。 それとも千里に合流するのが先か。

大須 冬彦に関してはそもそも居場所が皆目見当もつかない上に、彼自身新天寺社に関与している人間。 考えようによっては敵の目の前にこのこやって行くようなものである。

一方、千里に合流した場合、新天寺社というか、さっきの緑髪の女の子はきつと千里に人質としての価値を見出すだろう。

裏で相当な悪事を働いている（とみて間違いない）企業だ。A
Rを利用したナビゲートシステムに使われるGPSをいつでも私利私欲に使えるような体制を整えている可能性は十二分に考えられる。それでなくても新天寺社直々の依頼とやらをこなしているんだ。下手をすればあいつだって実は新天寺社の裏の部分にとっぷり浸かっている――

「だったら、なおさらじゃないか、バカバカしい」

『それで、これからどうするの？』

「やっぱり友達の方を優先させてもらうよ」

ポケットには収まりそうになかった為にジーンズとベルトの間に挟み込み、シャツで隠す格好になっているH & a m p・k P 2 0 0 0に触れる。

本来ならば一生手にする事なんてなかったであろう、その感触に不思議と安心感を覚える。

と同時に、そんなものに安心感を覚える状況に置かれている事を自覚して、なんともうんざりした気分させられた。

『ふうん。で、その友達は今どこにいるのよ？』

「フトモンの大会会場。 通天閣だな」

『へえ、変な場所ですってるのね』

感心した風に呟く夏芽。 俺も同意見だった。

確かに通天閣の地下にはスタジオが設置されている。そこを使うというのであればまあ、分からない事はないのだけれど。

とは言えあの周辺、新世界と呼ばれる一帯はお世辞にも治安の良い場所ではなく、幼い子どもも多数参加するであろうフトモンの大

会を開くのに適しているかと言うと正直微妙なところ。

何より、フトモンのユーザー人口を考えたとき、そのスタジオはきつと小さすぎる。

もつとも、そのスペースの問題はスタジオだけでなく地上階や展望台までも含めて通天閣すべて貸し切りにすることで解消したらしいが。

しかし、これはこれでわざわざそんなことしなくても他にもっと良い場所があったんじゃないのかという疑問を残してくれる。

大阪の名所の一つをジャックしての大会、と言うのは確かにインパクト抜群ではあるのだけれど……。

「それに、もしかしたら君の兄貴にも会えるかもしれない」

『兄さんが！？ それ、本当なの！？』

「あくまで可能性があるただだよ。 闇雲に探しまわるよりはマシって程度」

『そう……』

夏芽のアニメチックな顔の上で明らかな落胆の色とそれ以上にはやる気持ちが混ざり合い、何とも言えない表情を作り上げる。

そんな彼女の額に手を伸ばす。 が、すぐにどうせ触れられやしないことを思い出して引つ込めた。

そもそも、撫でるにしてもデコピンを食らわすにしても年上の女の子（つてのも妙な表現だが）相手にやる事ではない。

千里を相手にしている訳じゃないんだから、と言いつけ聞かせる。

『何でもいいわ。 こんなところでばさつとしてないで急ぐわよ！』

何より、彼女にそんな安い慰めは必要ないだろう。

すぐに気を取り直して勇ましく先へと突き進んでゆく俺にしか見えない少女。

その小さい割に頼もしくもある背中を苦笑交じりに見守りながら、後を追いかけた。

浪速警察署前の信号機が青に変わるのを待ちながら、通天閣を見上げる。

「警察に助力を求めるのはやっぱり難しいよな」

とてもじゃないが、今の状況を納得してもらえるように説明する自信がない。

時刻は11時22分。大仰な名前のわりにちんまりした塔の向こうには真っ青に晴れ渡っていた。

夜ならネオンは白白と言ったところだろうか。俺の頭上だけは橙一色のような気がしてならないけれど。

そんなとりとめもない思考と一緒にため息がこぼれた。

11話 実際にスタンガンで気絶はしない。そう思っていた頃が俺にもありま

「むう……手強いなあ」

RUMIコス少女が左手に構えたスタンバトンを振り下ろす。

それがある程度余裕を持って右側、対面の少女にとっては左側へと回り込んで回避し、バトンを握る彼女の手、より正確に言えば親指めがけて鉄槌打ち。

伸ばした腕に一撃を貰った少女はわずかに体勢を崩すも、左足で病院の床を思いつき踏みしめて堪える。と、同時に体勢の整いきらない内に強引にバトンを横薙ぎに払う。

こめかみめがけて飛んできたそれをしゃがんでかわし、立ち上がりざまに彼女の横腹にケンカキックを見舞った。

体重の乗った、下から突き上げるような一撃。

突き出された鉄板入りのブーツは彼女を床から浮かせ、容赦なく吹っ飛ばした。

が、吹っ飛ばされながらも体勢を立て直し、しっかり着地を決めてみせる。

顔を上げた彼女は相変わらず無表情。苦痛に耐えていると言った様子も、殴り合いで厚くなっている風情もない。

あまりにも無表情過ぎて爬虫類か虫とでも戦っているような変な気分になえなってきた。

「そんなの効かない」

「……まったく、どんな腹筋してるのよ？」

ほんの数分の攻防だけれど、それでも彼女について幾つか分かった事がある。

まず、この子はあまり戦い慣れしていない。

スタンバトンという触れるだけで効果を発揮する得物を持ちながら仕掛けてくる攻撃は 一つ残らず大振り。

拳を握った時の握り込みが典型的な素人握りで、フラットになっていない。

加えていちいち振りかぶるため、攻撃のタイミングが丸見えと来ている。

けれど、その一方で技術の無さを補って余りあるほど筋力や体力に恵まれている。

散々無駄だらけの攻撃を繰り返しているにもかかわらず、息のことも上がっていない。

何度も蹴られているにも関わらず、苦痛を一切見せずにケロッとしている。

単純に痛覚に異常があるだけという可能性も検討はした。

けれど、鉄板入りのブーツで思いつき蹴飛ばせば骨にダメージが通るはず。

そうなれば否応なく彼女の動きは鈍くなるはずなのだ。

そう思い、何度も脚の一点に執拗に蹴りを見舞ったりもした。

が、彼女はそれすらも「ちょっと痛い」の一言で片付けてしまった。

アプローチを変えて関節技に切り替えたところ、力任せに放り投げられてしまった。

それも、常識的に考えてあり得ないような体勢から。

確かに私は打撃系の方が得意で、関節や締め技、寝技は不得手ではある。

が、ずぶの素人に抜けられるほど下手くそなつもりもない。

———というか、人間を天井の蛍光灯に叩き付けるのは素人玄人以前の問題だろう。

私だったからそこから空中で体勢を立て直し、壁を蹴って勢いを

殺しながら着地出来たが。

そう、要するに彼女は馬鹿力なのだ。

それが生まれついてのものなのか、後天的に得たものなのかは分からないけれど。

少なくとも見た目は至って普通の女の子なのに。一体、どこにそんな筋肉がついているのやら。

もしかしたら彼女はサイボーグか何かなのではないだろうか？

そんな馬鹿げた疑念さえも脳裏をよぎる。

……まあ、彼女の正体なんであれ、私のやるべき事は変わらないのだけれど。

大振りで下手くそな打撃を悠々とかわしながら少しずつ後退。

適当な窓の付近に来たところで、彼女のスタンバトンによる突きをサイドステップで回避、伸びた腕を右手で抑えつつ、左手を背中へ回して窓を開ける。

そこから流れるように彼女の腕を掴み、胴体を腰に乗せてヒョイと浮かせ――

――10階から投げ落とした。

少女の茫然とした表情がスローモーションで視界の外へと落ちて行く。

これは流石に即死コース一直線だろう。

いくら何でもやり過ぎたかな？

そう思いながらも階下を見下ろす。

少女は手にしたスタンバトンで7階の窓を叩き割り、それを支えにする事で落下の勢いを殺していた。考えて動いたというよりは体が勝手に動いたという風だ。

それでも落下を止めることは叶わない。

こちらを見上げる彼女の姿が、ばさばさと髪や裾を乱暴に揺らし

ながら遠のいてゆく。

次のアクションを起こしたのは4階。

さっきよりも少し窓に近づいていた彼女は、手を伸ばして3本の指で体を支えた。

そこでようやく彼女の落下は止まった。

もつとも、10階から落ちた人間が途中で自力で落下を阻止するなんて事は常識的にはあり得ない訳で、ようやくの4文字には我ながら違和感を覚えるが。

「……うつそお」

想像以上のとんでもなさ思わずそんな言葉が漏れた。

下の階から患者や見舞い客、看護師達のどよめきが聞こえて来るが、少女はそんなものは一切気にも留めず、私を見上げて唇を動かした。

——絶対に殺す、と。

言葉とは裏腹に相変わらず無感動な瞳に引きつった笑みと冷や汗が浮かび、悪寒が走る。

弾かれたように窓から離れ、階段を駆け降りた。

多少息を切らしながら1階に降りた私を待ち受けていたのは飛来するバカでかいソファ。

普通の人間の力ではとてもじゃないが投げ飛ばせるものじゃない。当然、女性一人で受け止められるような代物でもない。

身をかめながら向こう側を伺うとソファの着弾点にいるであろう私を睨むRUMIコスの彼女の姿。

着弾点という言葉の頭にソファがつく事に果てしない疑問を覚えるけれど、今はそんなことはどうでも良い。

勝った気になって背を向けていない辺りはまあ評価しても良いと

は思う。

が、相手がどう応じて来るかを考えていないその様子はまあ違はなく素人のそれだ。

宙を舞うソファの下をとっさに前転で潜り抜け、少女の足元へと転がり込むと同時に足払いをかける。

彼女は盛大に体勢を崩し、その拍子に構え直したスタンバトンがその手からこぼれ落ちる。

半ば無意識にそれを掴み、今しがた地面に叩きつけられた彼女に押し付けた。

「……………っが!？」

ビクンと体を仰け反らせた彼女は、その一瞬後に病院の床に崩れ落ちた。

どんなに堅牢な肉体を持っていたても電撃を浴びれば竦む。

それはあまりにも当たり前の反応だったけれど、真っ当な生物に違いないという事実には僅かばかりの安心感を覚えた。

「しかし、幾らなんでもコレは出力上げ過ぎじゃないの？」

床に伏す彼女から手元のスタンバトンに視線を移し、嘆くように呟いた。

スタンガンって本来人間を気絶させられるような代物じゃ無い筈なんだけどなあ…………。

11話 実際にスタンガンで気絶はしない。そう思っていた頃が俺にもありま

くそう、。喰らいに超時間泥棒されてしまった!!
なろうは恐ろしい所だあ……

12話 二度づけ禁止とは言つものの衛生つて意味で言えば各テーブルに置き

幸いにも、特にこれと言つたトラブルに遭遇する事なく通天閣に到着した。

「いくらなんでも何事も無さ過ぎじゃねえ？」

『漫画じゃないんだから、そんなんでもない出来事早々起きないわよ』

「君がそれを言うか？」

まあ、何事もないに越したことは無いのだが。

後ろから例のRUMIコスプレの子——確か坂田うめだったか——が追いかけてこないところを見ると、Yuiyの人の足止めは上手く行っているのだろう。

しかし、通天閣入り口で早速問題にぶち当たった。

「参つたなあ……入場規制されてる」

『狭い会場なんだし、当然と言えば当然よね』

歩き疲れたから、と浮遊という移動手段を身に付けた夏芽がしみじみと呟く。

AR便利だな、オイ。　そもそもARが疲れるのかとは意地でも突っ込まない。

「強行突破は論外だよなあ」

『当然でしょ！　下手に騒ぎを大きくしたら警察に追いかけて回されるわよ！？』

「いまなら銃刀法違反もついて来るってか……笑えねエ」

つまらない冗談はさて置き、本当にどうしたものか。
あそこに今から入場するもつともらしい口実をでっち上げるか。

「隠し通路でも探すか……」

『そんなもん、都合良くある訳ないでしょ』
「だよなあ」

万が一にもそんなものがあるうものなら、通天閣を建てた連中に
「お前ら何を企んでいたんだ」と小一時間問い詰めたい。

もちろん、非常用の避難通路だとかそついった構造であれば話は
別だけれど。

そついうのはあるならあると明示されているものだろうしなあ…
…。

とは思いつつも、もしかしたらと通天閣の周囲をうろついてみる。

『探したってあるはずないと思うわよ』

「俺もそう思……あ、あつた」

そんなバカな

脳裏でその一言が何度も反芻する。 そんなバカな。

が、俺の目には確かに地中に【passage】と書かれている
のが見える。

ARでしか見えない隠し通路、か。 スマホのAR機能でも確認
して見るがやつぱりこちらには表示されない。

つまり、この隠し通路は新天寺社の管轄、という事になるのだろ
う。

しかし、まだその輪郭を捉える事は叶わない隠し通路をじつと凝
視する。

不意に【passage】の文字が消え、代わりに一本の太い管
が地中に浮かび上がってきた。

「なるほど、視線を感知出来るのな」

どういうプログラムなのかは皆目見当もつかないが。

先のプロフィールが眺め続けていると、どんどん詳細を表示するようになっていったのと同じ仕組みだろう。

管の向かう先を目だけで追いかける。

信じがたいほどにあっけなく隠し通路とその入り口が見つかった。こんなに俺の目が活躍するなんて、まるでチート能力所有者になった気分だ。

「こつも便利だと何か変な代償とかリスクがありそうで怖いよな」

或いは新天寺社の罫か何か、といったところか。

『何、契約者気取りの寝言吐いてるのよ。それより、さっさと行くわよ』

「寝言って言うけどなあ、自分だけ見えてる世界が違うつてのはやっぱり気持ち悪いもんだぞ？」

『そんなの、アンタに限った話じゃないでしょ？ アンタ以外は上手く隠しているだけで幽霊が見える人だっているかも知れないし、人間がガラクタに見えてガラクタが人間に見える人もいるかも知れない。死角や急所が可視化された状態で表示される人や並行世界を観測出来る人……アンタが知らないだけで意外と超能力者だらけかもしれないわよ？ それにその目が無くたってアンタとアンタより身長の高い人、高い人じゃ見えている風景だって微妙に変わって来るんだから』

まあ、その通りだ。

その通り過ぎて新発見もありがたみもないが。

似たような台詞は両親や千里、付き合いの長い友人にも言われた。しかし、そんなありきたりな言葉を聞くと不思議と安心させられる。

仮に変なものが見えたとしても、抱える不安が人並みという事実に安堵する。

そして何より、彼女なりに励まそうとしてくれる事が嬉しい。

「ありがとう、夏芽」

『どういたしまして、ふふっ』

少し恥ずかしそうにはほ笑む彼女はきっと俺の言葉の意図を正確には受け取っていない。

励ましの言葉に素直に感謝している、と思っていると考えるのが妥当だろう。

実は「ああ、陳腐な言葉だなあ。でもその陳腐さに癒される」なんて紙一重の侮辱みたいな理由で感謝されているとは思っていないに違いない。

それでも、彼女が笑っていられるのなら礼を述べた甲斐があるというものだ。

どうせ見えるのなら、笑顔の方が良いに決まっている。

たとえば俺にしか見えなくなつて、笑顔の方が良いに決まっている。だから今は俺にだけ見える世界を、俺の視界を信じて進む事にしよう。

「一番近くの入り口はその串揚げ屋の裏手にあるっばい」

『って言われても私には見えないんだけど』

そっぴや、そっぴや。

俺は通天閣の下に位置する串揚げ屋”マルタ”を指していた指を引っ込める。

「スマホのAR機能とかカメラをオンにしたら見えるかな？」
『アーリーじゃないと無理よ』

……前言撤回。

夏芽の言葉は断じてありきたりなものではなかった。

陳腐に聞こえたのは、俺が勝手にそう受け止めていたからだ。

何も見えない、聞こえない。己の存在すら希薄になっていく…

…そんな虚ろな世界を 漂い続けていた彼女の視界はきつと俺のな
んかよりもずっと特殊で、ずっと異様だったに違いない。

他人と違う世界を見ている事を確認する術すら与えられていない
孤独。

分かり合えないことすら許されない世界。

それがどんなものかなんて俺にはやっぱり想像すら出来ない。

もちろん、想像出来ないことすらも、想像出来ない程に常軌を逸
したものを想像している俺の勝手な想像に過ぎないという何やら禅
問答じみたものなのだが。

それでも、その想像すら出来ない世界を生きて来た彼女に身勝手に
に同情してしまう。

「でもさ、夏芽を見ている俺は見えるんだよね？」

『うん、何でもか分からないけど間違いなくアンタの姿は見えてるわ』

「俺の声は聞こえているんだよね？」

『そうよ。 でなきゃこんな風に会話が成立したりする筈ないでし
よ？』

何を今更、とでも言いたそうなその表情はどこか嬉しそうで、声
も心なしに弾んでいるような気がした。

そんな彼女を横目で見守りながら、マンホールに偽装された隠し
通路への入り口を開きつつ、思った。

この目があつて良かったと。
——この目であつて良かったと。

13話 声優とコスプレイヤーを見る時は肉眼で見るとは違う、心眼で見る

ボク自身が馬鹿力を自覚したのはいつ頃のことだったろうか。

物心ついた頃には相手が中学生でもパンチ一発で決着していたのは覚えている。 という経緯でその中学生を殴るに至ったのかは覚えていないけれど。

いくら当たった場所が悪かったとは言え、幼稚園児に一撃で沈められた彼はさぞ屈辱だったに違いない。

それでもボクが女の子だったことや、歳の近い男の子が年齢のわりに紳士だったおかげで、同世代の子達と喧嘩するような事は無く、この頃はまだ平穩に過ごしていた。 もしかしたら、自覚がなかっただけで周囲からは恐れられていたのかも知れないけれど。

小学校に上がってからは持ち前の怪力に更に磨きがかかり、球技のような複雑なルールの無い単純な競技であれば先生も含めて負けなしだった。

一応、自分の力が人並外れているのをそれなりに自覚して、抑えていたつもりではあったのだけれど。

小学生となるとクラスにいるのは幼稚園の頃からの顔見知りばかりではなくなっていて、よその幼稚園出身の子、特に男子の中にはボクの知っている男の子達とは全く異なったパーソナリティの持ち主も少なからずいた。

今にして思えば彼らのようなわんぱく坊主の方がむしろ平均的な小学生男子のような気もするけれど、当時のボクはそんな風に思えるほど大人ではなかったし、何よりなまじ平和な環境で過ごしていた事もある…… 要するに煽り耐性がなかった。

小学生の貧困なボキャブラリーで付けられたあだ名は「ゴリラ」と陳腐なことこの上ないものだったのだけれど、何度も言うように煽り耐性皆無の当時のボクはそう呼ばれる事が我慢できず、男子の

一人を全力で引っ叩いた。

普通ならば殴られたこと取っ組み合いになるか、男子が調子に乗って更に囃し立ててくる程度だろう。でも、当時のボクは既に人並み外れた筋力とそれに負けないだけの肉体を持ち合わせていて、そんな体から繰り出される全力の一撃の凄まじさは想像を絶するほどのものだった。

その男子は顎の蝶番が潰れた拳句、盛大に教卓に叩きつけられて手足を数か所骨折。

流石にそんな酷い怪我を負わせてしまっでは子ども同士のケンカで済む筈もなく、やっぱり色々と揉めに揉めたようだ。

まだ幼かった私はその件についての顛末は教えてもらっていないので、詳しい事は何一つ分からないのだけれど。

ただ、しばらくもやしが食卓に並ぶ頻度が目に見えて増えたのだけははつきりと覚えている。つまりはそういう事なのだろう。

何はともあれ、その日以来、ボクは人から避けられるようになり、ボク自身も人を避けるようになった。

誰かを傷付けないように、誰にも傷付けられないように。

学校では腫れものに触るような態度を疎んじて寝たふりをして過ごして、授業が終われば一目散に帰宅。体育は他人との接触のある競技は出来る限り見学。

小学校時代はボクにとって、未だに黒歴史以外の何者でもない。

——そんな退屈な日々が転機が訪れたのは中学生になってすぐのことだった。

- - - - -

「……んにゅ？」

妙に重い瞼を押し上げると白い清潔感のある天井が視界に飛び込んできた。首だけ捻って周囲を見渡す。どうやら病院の天井らしい。

意識がはつきりしてくると、自分がどうしてこんなところで寝転がっているのかをようやく思い出す。

妙なコスプレイヤーに足払いをかけられて、不覚にも気絶してしまっただようだ。

何やら走馬灯よろしくの夢を視ていたような気がする。むくりと起き上がったボクを病院の関係者が遠巻きに見つめていた。

けれど、彼らの事なんてどうでも良い。視界に映っても映らなくても、意識するに値しない。

彼らに気を回すくらいなら、今ボクの身動きを封じている足と手に巻き付けられたガムテープをどうにかする方が優先だ。

そんな事よりも今は追わなければならない相手がいる。

Yulyのコスプレをした女。

それからボクより少し年下の男の子。

……どっちも本当はターゲットではないけれど。

大須 冬彦とかいう新天寺社の社員の監視とその妹の身柄の確保。それがボクに与えられていた本来の任務だった。

何故、新天寺社の社員を新天寺社の裏側に属するボクが監視しなければならぬのか。

何故、眠ったままの少女の身柄を押さえなければならないのか。よく分からない事の多い任務だったけれど、そんなのは今回が初めてじゃない。

だから、今まで通りただ言われるがままに任務をこなせば良い…… 筈だった。

けれど、あの二人に邪魔された。特に女の方は必要とあればボクを殺すことを躊躇しないといった様子だった。

流石のボクもあのまま10階から落ちていればただでは済まなかっただろう。

ふつふつと怒りが込み上げてくる。

許さない。許せない。

絶対に許してやるもんか。

男の子の方は後回しで良い。とにかく、あの女だけは絶対に…

…！

思い出ただけでも憤りで全身が強張り、熱を帯びる。

手近なものをぶち壊したい衝動に駆られる。

でも、ぐつとこらえた。この衝動はあの女のためにとっておう。

深呼吸して怒りを鎮めながら、まず手をどの程度動かせるのか確認する。幸いテーピングされているのは手首だけで、指は問題なく動かせるようだ。

手首を捻って何とかガムテープの端をつまみ、少しずつ剥がしてみたり、破いてみたりと色々試してみる。

すると思ったより簡単にガムテープは緩み、後は力任せに引き千切った。

腕さえ自由になってしまえば足のテープを剥がすのに苦労する事なんて何一つない。

さつさと引っぱがして立ち上がったボクは、額のゴーグルを下ろしてからインカムを口元に近づける。

「検索。範囲、でんでんタウンを中心に半径2キロ。Y u l y のコスプレをした女」

ボクの声に応じるように、ゴーグル越しの景色に無数の映像が映

し出される。

そのいずれも先の検索の条件に該当するものばかり。
あの女の他にもYuiyのコスプレをしている人がいるらしい。
もっついそ全員潰してしまおうか？

いや、やっぱり全部あの女にぶつけよう。

「身長、推定170センチ程度。 胸、ない」

更に検索条件を絞り込む。

身長の高さのおかげか、胸の平たさのおかげか、当該画像は3枚
まで絞り込まれた。

「目標、捕捉。 追跡。 ナビゲート起動」

最後に残った一枚の画像。

そこには確かにあの女の姿があった。

画像が保存された時刻を確認。

ボクがあのに叩き落とされた数分後に撮影されたいらしい。

撮影したのはアーリーの常駐型自動記録システム。

一般には決して明かされていないアーリーの機能の一つ。

電源を入れると同時に自動的に立ち上がり、位置情報を送信しながら一定間隔で自動的に撮影を繰り返す。

それに何の意味や価値があるのかなんてボクは知らない。

けれど、そんな事はどうでも良い。

グーグル越しの景色に示された一本の赤い糸。

あの女とボクを結ぶ糸。

これでどうあがいてももうボクからは逃げられない。

そう思うと、不思議と熱くなっていた心が鎮まり、安らかに眠ぐ
のを実感する。

焦る事はない。 あっちの攻撃は殆ど効果が無くて、ボクは一撃

でも当てればそれで済むのだから。

その上、ボクの方が間違いなく彼女の動きを把握できる立場にあるのだから。

一度や二度追ひ払われる事があつたとしても、最後に勝つのがどつちかなんて決まっている。

半ば運命づけられた再び相まみえる瞬間を心待ちに、デート前のように入念に衣服の汚れやほつれを確認する。

それから、鼻歌交じりの軽い足取りで愛千橋病院を後にした。

14話 友人の知り合いの知り合いが自分の尊敬する人の恩人なんて事もあるか

薄暗い通路をスマホのライトで照らしながらゆつくりと進んでゆく。

『ねえ、こっつて結局何の為に作られた場所なの？』

「多分、核戦争が起きた時にでも大丈夫なシェルターへの通路か何か。通路を見つけた

時の表示を考えると、まず間違いなく新天寺社の施設だよ」

『前半のえらく物騒な部分の根拠は？』

「下の方を見つめてたらFallout Shelterって表示があった。夏芽なら侵入して中の情報を収集できるんじゃないか？」

遠回しに「情報を集めて来てくれ」と言ったのを察した夏芽は一瞬にして俺の視界から姿を消す。

5秒経過。しかし、薄暗い場所で一人と言うのは何とも心細い。

10秒経過。何とも、というか物凄く心細い。

15秒経過。夏芽、遅いなあ。何かあったんじゃないだろうか？

自分自身の身の周りへの恐怖と夏芽への心配が混ざり合い、何とも複雑な気持ちになる。

で、30秒後。夏芽がこれまた唐突に姿を現した。

「どうだった？」

『うん、確かに奥に何かあるのは間違いないと思うわ。でも、詳細は分からなかった』

「解析できるような機械は置いてなかったか？」

もしも、このシェルターが夏芽と出会ってすぐに見せられたあの桁外れの破壊を想定して作られていたとすれば、ここの設備はインフラが完全に死んでいる状況を前提に準備されていることだって考えられる。

だとすれば、夏芽が外の景色を見る時にやっていたようなデータを解析してどうこうできるようなコンピュータの類は一切置いていない可能性だってある訳だ。

『多分、この下に置かれている機械は外部のネットワークから独立してるんだと思う』

「そうか、夏芽自身はネットワークが俺の目がない場所には行けないのか」

『そういう事。それに、アンタの目があつたとしてもアーリーネットワークから隔離された場所だとアタシはそこにいられないと思うわ』

結構不便なのよ、と夏芽は短くため息をついた。

見下ろし、床の向こうを凝視すれば Fallout Shelter という語は相変わらずそこにある。

つまり、間違いなくそこに新天寺社に関する何かがあるはずなのだが。

「まあ良い。それより、先を急ごう」

『そうね。兄さんとアンタの友達が待ってるわ!』

「待ってるかどうかは知らんけどな」

『そういう事言わないの。少なくともアンタの友達は確実に待ってるんだから』

いや、そもそも事態を把握してないだろ。

もしかしたら渦中にいる可能性もあるけど、それでも俺が首を突

っ込んでいる事は知る由もない筈である。
もしも、何かしらそれを知る術を持っていたとしたらちよつと怖い。

『で、アンタの友達ってどんな奴なの？ 見た目は？ 性格は？』

「んー、童顔のわりにイイ体してる変態？」

『うーん、ガタイが良いのに童顔で変態なの？ なんか嫌だわ、それ』

「いや、そいつ女子だから」

イイ体の意味を取り違えたのだろう。

きつと身長190センチのガチムチボディを誇るベビーフェイスの露出狂とかそんな感じのものを想像してのか、顔をしかめる夏芽の間違いを指摘する。

しかめているというか、ニヤついていたようにも見えるのはきつと気のせいだろう。

指摘した瞬間、彼女の三次元ではあり得ない大きな目が眩しい程に輝いた。

……うっかり忘れていた。 女の子にこういう話を振ると食いつくんだよなあ。

『もしかして、彼女？』

「アホか。 そんな良いものじゃねーよ、あいつは」

『へえ、でもちよつとくらい気があったりはするんでしょ？』

「友達だつってんだだろうが」

そしてとんでもないスピードで恋バナへと舵を切ろうとする。
ええい、これだからスイーツ（笑）は！？

『ふうん。 でも、男と女の間』

「友情は成立しないってか。 あいつは心にイチモツ生えてるから問題ねえよ」

『な、ナニ言ってるのよ、アンタ……』

顔を真っ赤にして真っ直ぐ俺の方に伸ばした両手を振る夏芽。

ARだからやや誇張表現されている部分もあるだろう、そりゃもう見事に真っ赤である。

どうやら、この年上の少女はそう言った話に対して免疫があまり無いらしい。

『で、でも、その子はアンタのことどう思ってるかなんて分からないわよね？』

「んー、普通に異性として好かれてるんじゃないか？」

『しれっと言う台詞じゃないわよね、それ？ どれだけ自信満々のよ』

そう言われてもなあ。 あっちが胸張って「秋一が好きです！

でも、二次元の方がもっと好きです！」と言ってくるんだから仕方ない。

冗談かもしれないけど。

余談だがかつては俺も千里に気があった時期もあったが、仲良くなると同時に変態が暴露されてそういう感情は消し飛んだ。

あれはあれで面白い奴だから、今でも友人として仲良くやってるけど。 あくまでも友人として、だ。

「ま、何はともあれ大事な人って事に間違いはない」

『分かったわよ、そういう事にしといてあげる。 だから、お互い大事な人のために頑張りましょう』

夏芽は胸元で拳を固め、意気込んだ。

「言われるまでもない」

スマホのライトを改めて進行方向に向け、俺と夏芽は再び歩き出す。

『で、一応確認しておくけど、本当に恋人じゃないのよね？』
「しつこいぞ」

その短いやり取りの間の数歩で、行き止まりに突き当たる。
上方へライトをかざすと出口らしきものが見つかった。

「ふう、やっと到着か」
『で、どこに出るの？』

などと言いつつ、先んじて壁をすり抜けて階上へと顔を出した夏芽は辺りを見回す。

パンツが見えている件については知らぬが仏であり、なおかつ彼女自身のパンツではなくあくまでもでんタウンのマスコットキヤラのそれである事などを考慮してあえて言及しない。

ついでに言うとなんな仕草をしているが、彼女にはアーリーなしに外部を認識する能力がないのだからこの動作には何の意味がない。対する俺は備え付けのはしごを登ったその先のマンホールを押し上げ、周囲に人目がないかを慎重に確認しながら地上へと這い上がった。

もっとも、どんなに気を使ったところで見えないものは見えないし、開けたドアが死角になって確認しようもない範囲がかなり存在するので、俺の動作にもあまり意味はない。

こういう秘密通路を抜けると出入り口で意味もなく他者の目を気にしてしまうという、子どもの頃に誰でも一度は経験したと勝手に

信じてやまない人間の悲しい性による習慣的な行動でといったところだろう。

……それ以前に、マンホールの向こうも真っ暗で夏芽以外（不思議と暗闇でも普通に見える）は全く何も見えないのだが。

「多分、通天閣の地下のホールだと思うんだけど……って、夏芽が手近なアーリーのカメラから覗いた方が簡単に確認出来るんじゃないか？」

『あ、言われてみればそれもそうね』

言い終えるが早いか、忽然と姿を消す夏芽。

さっきの事を踏まえると、数十秒は戻ってこないだろう。

その間に、こっちはこっちで出来るだけ情報を収集しておこうか。まず何を差し置いても気になるのが人の気配の有無。

ただ確認を取るだけなら大声を上げれば済むのだが、今は人目について得する事が無い状況である。

誰かに見つかるのは可能な限り避けて通りたい。

入口で入場規制が行われていた以上、見つければ確実につまみ出されるだろう。

大会参加者ですと言い張ろうにも、そもそもこの大会の参加者が参加証を配布されていた時点でアウトだし、応援ですで誤魔化すのも参加者以外入場禁止だったらやっぱりダメ。

となると、適当な物陰に隠れて聞き耳を立てるのが無難か。

辺りを見回す。見事なまでに真っ暗で、本当に何も見えない。

息をひそめて、耳を澄ませる。風の流れや物音も光と同様に皆無に等しい。

「これならライトを点けても問題なさそうだな」

ドアを押し上げる前にポケットに直しておいたスマホを改めて取

り出し、ライト機能を起動した。

天井。 何の特徴もない、強いて言うならば特徴が無いのが一番の特徴と言った風情の天井だ。

床。 これまた何の特徴もない。 天井と同様に無個性が最大の個性と言った印象である。

壁。 こうしてライトを点けた状態で見てみると、広い空間には無数の棚が並べられていて、かなりの数の物資が陳列されている。 どうやら、ここは倉庫か何かのかのようだ。

足元をライトで照らしつつ、棚へと近寄って物資を確認。

「ん、非常食……か、これ？」

それが何なのかを明確に記す文字列は見当らない。

目を凝らしてみるもののARによる管理がされている訳でもないらしく、やっぱり何も見えない。

開けてしまおうか、なんて邪念が一瞬だけ脳裏をよぎる。

一方で、万が一にも危ない謎の白い粉だったりしたらどうするんだよ、という懸念がブレーキをかけてくれた。

……どうせ中身を確認したところで俺になにが出来る訳でもないんだ。

触らぬ神に祟りなし。 この方針で行くのが一番だろう。

という訳で、物資から視線を外して改めて壁を確認して回る。

……出口、どこだよ？

『ねえ、秋一ツ！？』

「何だよ、帰って来るなり大声出して？」

大声、と言っても大声としては聞こえていないのだが。

あくまでも漫画のギザギザの吹き出しのような大声を出している表現として認識しているだけだ。

『い、いいいいつ、いたのよ!?!』

「誰が?」

『兄さんに決まってるでしょ!?! それに北里 千里も!?!』

「いや、ある程度見込みがあるから探しに来たん、だけど……?」

つて、ちよつと待て。 今、何て言つた?

「夏芽、千里を知ってるのか?」

『そりゃあ知ってるわよ。 彼女のクラッキングを阻止したのは兄さんなんだもの』

「……マジかよ」

思いがけない繋がり、頭に抱えた。

あいつを知ってる人がいること自体はさほど驚くようなものでもないが。

『あの女、一体何のために兄さんに近づこうとしてるのかしら?』

2年前の報復とかだったなら逆恨みも良い所だわ!』

「いや、千里はそんな事しねーよ」

『そんなの分からないわよ。 前科者だからってどうこう言つつもりはないけど、あの子に対して好意的な感情なんて持てっこないわ。

あの子のせいで兄さんがどれだけ大変だったか…… ってアンタ、あの子と知り合いなの?』

「さっきから探し回ってる友人が千里だよ」

それを聞くや否や、夏芽は怪訝そうな目で俺を見つめる。

『もしかして、アンタもクラッキングとか……?』

「してねえし、しねえよ」

そんな高度な真似、俺のような凡人にはしたくても出来ません。
と言うか、考えてみりゃ夏芽だって散々ハッキングまがいの事してないか？

まあ、こっちはやむにやまれぬ事情があつての事だけどさ。

「……まあ、なんだ。反省はしてるんだし、ここは俺の顔を立てるつもりであんまり表だってあいつの過去を掘り返すような事は言わないで欲しいんだが」

『うう、アンタにそれを言われると弱いわね』

と、少し不満げな表情で俺の様子を伺いつつため息を一つ。

『まあ良いわ。今、アンタとこんなところで揉めても仕方ないもの。せつかく兄さんの居場所が分かったんだし』

「そうだな、さっさとここから出て千里に会わないと」

ライトで壁を照らし、出口を探す。

出口自体は思った以上にあっけなく見つかった。が……

「……鍵がかかってる」

当然と言えば当然か。ここがどういう施設であっても、鍵をかけない理由は特にない。

二度三度、ドアノブを回そうと手首を返しつつ、押し引きを繰り返すが開く気配はない。

手元をライトで照らしてみる。

「あ、これ電子ロックなのか。それなら……夏芽、ここにある機械に干渉できない？」

『新天寺社製のものなら出来るかも知れないけど』

と、また姿を消し、今度はものの数秒で帰って来た。

『うん、行けたわ。思ったより簡単な仕組みだった』

「そっか。ありがとう、スーパーハカー」

『誰がハカーよ』

むくれる夏芽を尻目に改めてドアノブを回す。何の抵抗もなく回った。

ドアを少しだけ押し開けて、外に人がいないのを確認した俺はその部屋を後にした。

14話 友人の知り合いの知り合いが自分の尊敬する人の恩人なんて事もあるか

【余談】

タイトルに関して

あまり深くは考えず、本文の一部分に関係のある要素を抽出してお
ります

なのであまり深くは考えず流して頂けると幸い

15話 残飯と言うとゴミみたいなイメージになるのに残り湯という言葉には

天才少女。

そんな名誉なようで貰った本人は煙たいばかりの二つ名で呼ばれていたのは2年前。

当時の私、北里 千里は天才とは名ばかりの、救いようのない痴れ者だった。

数ヶ月前に両親にアーリーを買ってもらって以来、表沙汰になれば逮捕されても文句は言えないようなこと繰り返していた。

一応、アーリーの機能・性能に関する不審な点を説明するだとか、悪用されている可能性があるからとかそんなご大層な建前は掲げていたけれど。

何を言ったところで不正アクセス、情報の盗み出し、クラッキング……などの行為が方に背く行為である事に何ら変わりはない。

それらの行為の標的は専ら新天寺社に関連するもので、当時から既に新興企業とは思えない程に堅牢なセキュリティだと有名だった。それこそ、通販で少し商品を卸しているだけの末端中の末端でさえも新天寺社独自の技術を提供し、保護するほどの徹底ぶり。

それでも末端の防衛機能が本社に匹敵するなんて事はあり得る筈もないし、中にはシステム管理を怠る者や、単純にソフト/ハードを問わず機械関係に疎い人だっている。

そういった粗を見つけ出し、情報を覗き見る。更にはそれらの情報がどこに転送されているかといった点についても確認し、次なる標的を定める。

それと並行して徐々に厳しくなる守りをかいくぐる為にアーリーに求めるスペックがどんどん高くなっていき、その要求を満たすだけの性能を発揮させるべく自らアーリーに改造を施した(それも初回起動時の同意事項によって禁止されている改造ばかり)。

その過程で私はアーリーの機能の不審な点を幾つも発見してしまった。アーリーの無線を利用した独自のネットワーク、それを維持し、情報を送受信する為のシステムが食っているメモリが不自然に大きいなんていうのがその代表例。

気がつけば私はアーリーに秘められた謎に魅入られていた。

同時に自分がどこまで行けるのかを試してみたいという欲求に支配されていた。

はつきり言って、ゲーム感覚だった。

そんな若気の至りの暴走は、ものの見事に不正アクセスを見破られた上に逆探知され、おまけに個人情報と思いつき晒された事で終わりを迎えた。

幾ら相手がクラッカーとは言え、個人情報漏えいさせた新天寺社は大きな小なり非難される事になった。けれど、それ以上に大衆の関心は齡12歳にして新天寺社のセキュリティの幾つかを破ってみせた私へと向けられた。

秋一に言わせれば「新天寺社が上手く向けさせたんだろ。未成年だからって許されると思うなよって殺一警百だ」とのことだけれど、過程はどうあれ私は間違った事をしていて、それが公になった。その日から、私を取り巻く環境は一変した。

初めに、あまり話す事のなかったクラスメイトは私を犯罪者と蔑むようになった。仲の良かった友人たちと徐々に疎遠になっていった。それまで大人しい優等生として私を見ていた先生たちの態度も変わった。

影響は学校だけに留まらなかった。

今まで私の事を可愛がってくれていた近所のおじさんやおばさん。

私とは別の中学に通っている小学生時代の同級生。

そして、両親も。

当然の報いと言えばその通りなのだけれど、私は居場所を失った。そんな私をゴシップ誌の記者だとか、下世話な話を好む人達が更

に追いかけて回した。

酷い時には自宅の前や学校の敷地内にまで押しかけて来る始末。

そんな、どこにも逃げ場のない私を救ってくれたのが秋一だった。
ある日、無断で学校の敷地内に入ってきたカメラマンとりポーターが

「悪いことをしている自覚はなかったの？」とか、

「アナタのせいで何かしらの被害に遭った人がいるのは分かっているの？」とか、

そんな風に私に詰め寄ってきた。

普通は無許可での立ち入りなんて認められる筈がないし、取材なんてもつてのほか。

でも、私を庇い立てする事に抵抗があつた先生たちは無視を決め込んでいた。生徒たちは学年を問わず遠巻きからその様子を見守っていた。

カメラマンが私の進路を塞ぐように立ちはだかり、後ろからリポーターが質問・取材と言うよりは罵倒に近い言葉を浴びせる。

進む事も退く事も、反論する事も出来ずに私はただ俯いていた。
やがて無数の視線と糾弾に耐えかねた私が「もう放っておいて」と叫びそうになった瞬間、頭上からバケツの水をひっくり返したような雨が突然に降り注いだ。

と言うよりも、それは文字通りひっくり返されたバケツの水そのもので、バケツをひっくり返したのは他ならぬ秋一だった。

「あー、悪い悪い。でも不可抗力だから許してくれ」

なんて言いながら悪びれる様子もなく彼は2階から降りて来て、私とりポーターたちの目の前へとやってきた。

二人の矛先は私から彼の方へと向けられた。

このビデオカメラは水に弱いのにどうしてくれるんだ、と憤る力

メラマンを前に秋一はひるむ様子も恐れる気配も見せない。

そして、あまりにも平然とした、そして毅然とした態度で

「そんなもん幾らでも弁償しますよ。 100万くらいですか？

それだけでわざわざ不法侵入の証拠を犯人から提供してくれるんなら安いもんだ。 こんな無作法な取材をやらかすところを見るとあんたらワイドショーの芸能レポーターとかその辺だよな？ 最近はその手の番組は先細りも良い所なのに、下手に問題を起こして大丈夫か？」

と、彼らをいとも簡単にあしらってしまった。

すくすく帰る彼らを見送った秋一は人目もはばからず、呆れるほど堂々と濡れ鼠の私の手を引いて学校を後にした。 まだ昼休みの最中で、2時間ほど授業が残っていた。

それから数分後、私は秋一の家でお風呂を借りていた。 更には服を借り、何故か夕飯まで頂いて、彼の母親と同じベッドで寝るに至った。

どうしてそんな流れになったのか私にも分からない。

ただ、家にも休む暇もなかった私にとって事情を知った上で何も詮索せず、

「千里ちゃんはお漬物いる？」とか、

「秋一が女の子を家に連れてくるなんてね、うふふ」とか、

どこまでも呑気な秋一のお母さんの優しさがひたすら嬉しかった。 その日を契機に私の日常は少しずつ平穏を取り戻すようになっていった。

——表向きには。

秋一の家にお世話になった日から数カ月が経ったある日のこと。

改造されまくっているのは相変わらずながらも、用途はがらりと変わって、純粹にゲーム機としての役目を全うするようになっていた私のアーリーに一通のメールが届いた。

見た事のないアドレス、ユーザー名だった。恐る恐るメールを開く。

真っ先に目に飛び込んできたのは”新天寺社”の4文字。

思わず息を飲んだ。嫌な汗が噴き出し、気分が悪くなるのを堪えながら恐る恐る本文を読み進める。

まずは何の変哲もない自己紹介。メールの送り主は大須 冬彦というらしい。

新天寺社のセキュリティ関係の業務に携わっているそうだ。名前を見る限り、まず間違いない男の人だろう。

業務の内容を考えれば私の事を把握していても何らおかしくはない。

読み進めて行くと彼はさっそく本題を切り出していた。

色々と持って回った表現をしているけれど、要するに手を貸せということだった。

外国だと腕の立つハッカーは企業に雇われる事があるという。

この話はつまり、そういうことなんだろう。

たとえばアプリのバグやシステム上の欠陥を指摘し、可能ならば改善方法も添えてメールで送る。その為ならばオープンでないものでもソースに触れる権利を与える。

報酬もきちんと用意されていた。

時と場合と契約内容によっては月数十万の収入を得られる程の好待遇。

新天寺社、ひいてはアーリーはこれまでのプログラムの系譜から完全に独立した独自の技術・規格を採用している。

たとえ私のような子どもであっても、技術を持っているなら野放しにはしたくないのだ。

そして、価値あるものには相応の見返りを。報酬は確かに魅力的だけれど、あの頃の事を思うと素直に飛び付く気にはなれない。

秋一に相談しようか？

彼は私とは違う方向に頭の回転が速い。

多少事情を伏せてでも相談すれば1から3、4の事を察して、7を想像して、10くらいを仮定した上でくつかの解と意見を授けてくれるだろう。

けれど——それはつまり、私の事情に秋一を巻き込むのと一緒に訳で。

ふと、添付ファイルの存在に気付く。ウイルスの可能性を懸念しながら、恐る恐る開いてみる。

秋一と秋一のお母さんと私が仲良くファミレスで食事をしている画像だった。

——ウイルスだったらどれだけ良かったか。

その日から、私は新天寺社の狗になった。

大須 冬彦に指示されるがままに色んなソースに手を加えた。時には新天寺社直々の依頼を受け、それもこなしていった。

中には違法すれすれ、というか倫理的には完全にアウトのものも少なからずあり、そういう仕事をこなす度に秋一を裏切っているような気がして胸が痛んだ。

けれど、秋一に話す訳にはいかなかった。何度か良心の呵責に耐えかねて秋一に相談しようかと悩んだ事もあった。

でも、あの添付ファイルが暗に意味している事を想像すると、相談なんて出来る訳がなかった。

あの時、秋一はまだ赤の他人だった私を守ってくれた。だったら、今度は私が秋一を守らなければ。

洞察力・直観力・想像力と三拍子揃って妙に鋭い秋一に気取られないようにするのはきつと大変だろう。

今から距離を置いた所で、そこから何かを嗅ぎつけてみせるに違いない。

でも、だからこそやるしかない。

秋一の前では笑顔のままに、彼の厚意に背き続けよう。

そう決意した筈なのに――今、私の目の前でついさっき初めて会ったばかりの、メールでは何度もやり取りを繰り返した男性、大須冬彦にその秋一がドロップキックを見舞っていた。

16話 突っ込みにおいて重要なのは相手との距離感。どぎつい突っ込みを見無

「いっつう……いきなり何なんだ、君は!？」

「お前が大須 冬彦で間違いないよな？」

蹴り飛ばされた恨みを込めて、床に尻を着いたまま俺を睨む大須
冬彦を仁王立ちで見下ろす。

すぐ傍で千里が何か言いたそうに口をパクパクさせているが、今
は取り合っている場合じゃない。

とにもかくにも、大須 冬彦と威圧するように向かい合う。

「……ずいぶんな挨拶だな、羽原 秋一」

「やっぱり俺のことも知ってたか。さっきのワクドでのやり取り
を聞いてか？ それとも

お前のアーリーのふざけた特殊機能でか？」

と言いながらも、どれも不正解であろうというのは概ね理解して
いる。

名前を知っていることにこれと言った反応を示さなかったのを見
た大須 冬彦は少しの間、うろんげな目つきで俺を睨む。

が、やがて視線を千里の方へと逸らしたままゆっくりと立ち上が
った。

「話したのか？」

「ち、ちやいます。 私は何も!？」

「それは千里を俺や母さんを知っているぜって脅してた事か？」

相変わらず自分でもふてぶてしいと思わざるを得ない態度を貫く
俺。

千里は「何で知ってるん？」とでも言いたそうな驚愕の眼差しを俺を見た。

対する大須 冬彦はやっぱりか、といった様子で俺と千里を交互に見比べている。

俺のすぐ傍で夏芽が、

『兄さんがそんなことする訳ないでしょ！？』

と憤っているが、今は相手をして仕方がない。

「別に千里が話した訳じゃない。ただ、俺も別経路でアーリーの裏側を見る羽目になって、アンタを探していたらたまたま千里が一緒にいたってだけの話さ」

「ほう、それだけの情報で君は僕と彼女の関係を理解したと言っのかい？」

「大体、な。新天寺社絡みの悩みがあれば千里は俺に相談しない筈はないんだよ」

けれど、何かしらの強制力を伴う口止めをされているのだとすれば話は別だ。

で、友達の少ない千里に対して効力のありそうなものと言えば家族が俺くらいである。

……何故だか言ってて悲しくなってくる話だが。

「まあ、その件についてはさっきのドロップキックで許してやるとしてだ。ここからが本題なんだ。大須 冬彦、なんで俺がお前の名前を知っていると思う？」

「そんなもの分かる訳がないだろう」

幾つかの可能性は頭にあるが、どれも仮説の域を出ないと付け加

える大須 冬彦。

まあ、こいつが持っているであろう情報からならそんなもんだろ
う。 千里が俺についてペラペラ喋るとも考えにくいし。

「なあ、夏芽。 お前のその能力のこと、お前の兄さんは知ってる
のか？」

『え……ええ、知っているわよ』

「……夏芽を知っているのか？ いや、ダイブ中の夏芽が視えるの
か？」

一言で何かしら察したらしい大須 冬彦は俺の視線を頼りに夏芽
のいる、しかし俺以外にとってはなにもないに違いない一点を見つ
める。

そして、そこを見つめたまま暫く黙り込む。

『ねえ、秋一。 兄さんはどうなってるの？』

「千里、お前のアーリーを大須 冬彦に向けてくれないか？」

「え、あ、うんっ」

慌てながらも、慣れた手つきでアーリーを取り出す千里。

それを言われるままに大須 冬彦へと向けた。

意図を察した夏芽はすぐに姿を消した。 彼女の兄は未だ虚空を
凝視している。

当然だが、今は俺の目にも何も映らない。

「で、千里？」

「何？」

「そいつに何か妙なことはされなかったか？」

「何かっていうと、秋一に危害を加えられるのが嫌なら俺のアレを
啞」

大須 冬彦はこれでもかと言わんばかりに盛大にむせた。

「すとおおおおおっぶ！！！」

「えゝろんっ！？」

思わず千里の頭を引っ叩いた。

引っ叩きついでに大須 冬彦を視線で射殺さんばかりに睨みつける。

視線の意味を察して、ちぎれんばかりに首を横に振っている。
その反応にウソ偽りはなさそうだ。

『ちよっと、今物凄い勢いでカメラが揺れたんだけど、何があったの？』

「いや、そのアホに教育的指導をしていただけだ」

『いきなり画面が揺れると結構気持ち悪いんだからちよっとは考えなさいよ』

「あー、はいはい。 そいつはわるうござんしたねえ」

むすうと頬を膨らませる夏芽。 現実の人間では到底不可能なほど膨らんでいる。

つくづく面白いな、A R。

悪戯心で頬をぷにぷにとつついてみる。 が、所詮はA R。 触れることは出来ずスラスカとほほにめり込んでしまう。

「おい、人の妹にべたべた触るなよ?!」

「そいつはもう手遅れだな。 愛千橋ですやすや眠ってる可愛らしいお顔に……」

「ぶっかけた、のか……?」

「んなわけあるかああああ!!」

「んごあつ!？」

思わず固めた拳を振り抜いてしまった。かわすどころか反応すら間に合わなかった大須 冬彦はまたしても盛大にすっ転ぶ。

どうやら俺には何かのはずみで突っ込みがてらに手が出る悪癖があるらしい。

幾ら気に入くない相手だからって初対面の年上相手でも遠慮なしは流石に不味いよなあ……まあ、発言が大概アレだったから致し方ない面もあるのだが。

「くっそ、デスクワーカーを気軽に何度も殴るなよ……」

頬を押えたまま、のろのろと起き上がる。

「それで、君はわざわざ僕を殴る為だけにここまで彼女を追いかけて来たのかい？」

「俺はな。殴ったらすすきりした。でも、本当にアンタに用があるのは夏芽の方だ」

夏芽の方を指差すと大須 冬彦もつられてそっちを見た。

今はカメラ越しに外の様子を覗いている訳じゃないから、夏芽の視線は少し彼からずれているがひとまず二人は向かい合っている。

「ほら、夏芽」

『うん。 兄さん、聞こえていないかも知れないけどさ…… ホントはさ、ちょっとだけ嬉しかったんだよね。 兄さんが私のために、っていうか入院費のために悪いこととしてもお金を稼いでくれるのが……。 でも、やっぱりああ言うのは気が引けるよ。 別に誰かを傷つけた訳じゃないけど、それでも大量破壊兵器のシミュレーションとか、アーリー所持者を不正に監視するだとか、そんなお金

の稼ぎ方して欲しくない』

ゆっくりと、慎重に、言葉を選びながら話す夏芽。

割と思いついた事をぼんぽん口にするイメージの彼女としては少し意外な態度のように思える。が、考えてもみれば相手は自分のために良心をかなぐり捨てた実兄。方法が間違っていたとしても、その意思を安易に否定することは出来ないのだろう。

そして、だからこそ彼女は 大須 冬彦を止めたいのだ。その気持ち嬉しいからこそ。

けれど、彼女の言葉はきつと彼には届いていない。

きつと今までも何度も喉を枯らして叫んだことだろう。

それでも彼女の言葉は結局、大須 冬彦の鼓膜を、心を震わせるには至らなかった。

見えない、聞こえない、触れられない。

その辛さはやっぱり俺には想像すら出来ないもので。

だからこそ、出来る限り一言一句違う事なく彼女の言葉を伝えた。俺が夏芽の口調で喋るのはいささか違和感を覚えるけれど、それでも彼女の言葉をそのまま伝えた。

『だからお願い。私のことは良いから、もうこんな仕事は辞めて欲しい』

一呼吸置いてから、きつぱりと告げた。

そして、全てを聞き終えた夏芽の兄、大須 冬彦は――

「……言われなくてもそのつもりさ。今日で僕は新天寺社から抜けるつもりだった」

いともあっさりとそれを受け入れた。

「伝言役引き受けておいてなんだが、アテはあるのかよ？」

「アテ、というのは？」

「まず昏睡状態の夏芽の入院費とか、次の仕事とかだよ」

どんな世界でも、基本的には人間は正しく生きていきたいものだと思う。

何故それが出来ないかと言えば、要するに世のしがらみゆえだ。たとえば勤めている会社の内部の腐敗。

摘発したくても、社内での人間関係や雇用の喪失を恐れてそれが出来ない。

その間に犯罪の片棒を担がされて、自ら職を辞することすらも出来なくなってしまう

……なんて事はゴマンとある話。

「次の仕事なんて考える必要もないさ。堀の向こうは衣食住が保障されている」

「税金なんだと思ってるんだよ……いや、そんな事より、夏芽はどうするつもりなんだよ？」

その問いを発した俺に向かって、大須 冬彦は会心の笑みを浮かべ、答えた。

「問題ないさ。どうせ今日、目を覚ますことになるんだから」

自信に満ち溢れたその態度から、俺は一つの仮説をひねり出す。

「……ってことは、千里を呼びつけたのはその為か？」

「察しが良いね。彼女は僕なんかよりもずっと優秀だし、年の頃も近いからね」

「……？」

納得し合っている俺と大須 冬彦の隣で千里が首を傾げる。
頭は相当良い筈なんだけど、昔から不思議とこっという面には鈍い。

「でも、どうやって目を覚まさせるんだよ？」

「そりゃあ勿論、脳にアクセスするに決まってるじゃないか」
「は？」

何を言っているんだ、こいつは。

「何を言っているんだ、こいつは」

「そう言いたくなるのが分かるが、話は最後まで聞け」

咳払いをしてから、大須 冬彦は改めて口を開く。

「夏芽の才能については結構昔から知られていたから、データはそれなりに充実しているんでね。能力の使用中は本体の意識がなくなる事も把握している。ただ、本当なら自力で覚醒出来る筈なのに、それが出来なくなっただけみたいで……」

「過去に覚醒時に採取した脳波、でいいのか？ のパターンを分析してそれに似た電気信号を流してやれば覚醒するかも知れない……なんて言うんじゃないだろうな？」

「察しが良過ぎる。君はエスパーか？」

「まあ、エスパーみたいなものではあるけどな」

肉眼では見えない筈のARが見えるし。

しかし、生きた人間の脳に都合良く電気信号を送り込む事なんて出来るのだろうか？

脳と言えばまだまだ機能の解明されていない部分が多い上に、ものすごくデリケートな器官なのに。

とは言え、大須 冬彦は夏芽の実兄であり、仮にも千里相手に知恵比べで勝った男。

何の勝算もなしに、ただヤケになっているだけとは思えない。

「で、その覚醒のための手術だか実験だかは愛千橋でやるのか？」

「ああ。既に話も通してある」

さも当然のように言うが、その為に水面下でどれだけの苦勞を重ねて来たのやら。

下手をすれば夏芽の命に関わるような行為だ。そう易々と協力を得られるものではないだろう。

病院全体の許可なのか、物好きな医者一人を丸め込んだのかは定かでないが。

そこまで考えて、ふとひとつの疑問が脳裏をよぎった。

「……なあ、夏芽の能力使用時のデータってのは誰が何のために収集していたんだ？」

「新天寺社……より正確に言えばその前身に当たる組織だよ」

「だとしたら、新天寺社は今回のアンタの計画については関与していないのか？」

「当然だろう。失敗したら貴重なサンプルが失われかねないんだから」

という事は大須 冬彦は新天寺社に盾ついているも同然ってことか。

腑に落ちなかった幾つかの点について合点が行った。

「だとしたら、アンタの計画はきつと新天寺社にバレてるから急いだ方がいいかもしれないぞ」

「……そう思う理由は？」

「ちょっと前に愛千橋の10階で新天寺社の回し者っぽい女に襲われた」

俺の言葉を聞いた大須 冬彦は「そうか」とだけ答え、エレベーターの方へと歩きだす。

歩きながら、ちらりと俺達の方を見て顎をしゃくつてみせた。ついてこい、ということだろう。

俺と千里は一旦顔を見合わせてから、どちらともなく彼の後を追う。

「巻き込まないために隠し続けてきたのに、どうして首を突っ込んでくるかな？」

呆れた風な、非難がましいような、しかしどこか嬉しそうな表情で俺をねめつける千里。

その視線から目を逸らさず、じっと千里の顔を見つめ返す。

「不可抗力みたいなもんだ、仕方ないだろ？」

「はあ、こつちの気も知らんと。正義感かただのお人好しかは知らんけど、考えなしに突っ走るのはええ加減にしいや。ホンマにアホやねんから、アホーアホー、ドアホー」

「酷い言い草だな、オイ。それに後先云々をお前に言われたくないぞ？」

お返しとばかりにため息をつきつつ、冷めた目を向けてやった。

一瞬、怯む気配を見せるがそれでもじっと俺を睨み続けている。

「……まあ、なんだ。何かあったら今度からは素直に相談しろよ。お前が一人で抱え込んだって解決出来ない事の方が多いんだから

さ」

「……うん」

ようやく俺の気持ちを察してくれたのか、視線を床に落とし、うなだれる。

おおかた、結果的に心配させてしまった事に落ち込んでいるんだろうが。

何も言わず、肩を落としたまま大須 冬彦の後を追う千里。

「でも、気持ちはありがたく受け取っておく」

沈黙に耐えきれなくなった……という訳ではないが、そんな言葉が口について出た。

ついでに千里との距離をつめて、頭をなでる。

「子ども扱いせんといて」

「子ども扱いされたくないんならつまんねえ事で落ち込むなよ」

「……どうせなら頭よりもお尻をなでて欲、じいっ!？」

言い終えるよりも早く、千里の脳天めがけて鉄槌打ちが落ちた。千里はたまらず頭を押さえて屈み込む。まったく、少し優しくするとすぐこれだ。

「黙れ、変態」

『アンタ達……どんな会話してるのよ?』

俺の声しか聞き取れない夏芽が横で呆れ返っている。

「どんなも何も、なんて事のない友人同士のおふざけだよ」

『……ふーん』

本当に？　とでも言いたそうな疑わしげな目を向けて来るが、今は彼女に構っている時ではない。

うずくまって頭をさする千里に手を差し伸べる。

「ほら、早く行くぞ」

「……うんっ」

千里は本日最高記録の笑みを浮かべて、俺の手を取った。

調子に乗って腕を絡めて来た上に当ててんのよとばかりに胸を押しつけて来たので、とりあえずもう一発殴っておいた。

「仲睦まじいのは結構だが、早くしろよ」

エレベーターの前で、呆れ果てた様子で俺達を眺める大須　冬彦。
その表情は不思議とA Rでアニメ絵の夏芽のそれとそっくりだった。

17話 一度でいいからあの歩道の屋根の上に登ってみたいと思う人は結構いる

「なんで逃げても逃げてもすぐに見つかるのよ!？」

かれこれ3度目になる追走から逃れながら、思わずそんな悲鳴を上げた。

1度目は通りの電機屋に飾ってあった洗濯機に頭から叩き込んで、這い出そうともがいている間に逃走。

パンツ丸見えで下半身だけがばたと暴れる姿を見た時は正直済まないと思った。

2度目は消火器で目をくらし、怯んでいる隙にとんずら。巻き添えを食ったうどん屋の店主には後できちんと謝っておこう。

そして、これで3度目。

どう言うトリックで私を見つけ出しているのか、はっきりとは分からない。

いや、正確に言えば幾つかの推論はあるし、額のゴーグルにタネがあると見て間違いないとは思っている。

けれど、迂闊にそれを潰すことで絶対に逃がすまいと意固地になった彼女が何をしてかすか。それを想像すると下手な手は打つべきでない、と私の警戒心が告げている。

あくまでも私に意識を向けさせて、私だけを追いかけさせる。

奇天烈な才能は恐ろしいが、それ以外は小娘と言って差し支えない彼女を相手にする上で、この選択肢は決して間違っていないはずだ。

とは言え……散々でんでんタウンを駆け回っていい加減疲れた。対するRUMIコスの彼女は怒りで疲れが飛んでいるのか、たんにそういう体質なのか、散々走り回っているにも関わらず微塵も疲労の色を見せない。

「で……っりゃあああ!!」

それどころか、相変わらずの馬鹿力で近くに止めてあったスクーターをぶん投げた。

「ちょ、ええ!？」

時速100キロ近い速度で飛んできたそれをとっさに身を伏せてかわす。

スクーターは私の数メートルの後ろの信号待ちのトラックの側面に直撃した。

眉に皺を寄せた強面の運転手がドアから顔を出し、胡散臭そうに私達の様子を伺っている。

憤り半分、呆れ半分、それと少しの怖いもの見たさといった感じの表情だ。

「ごめんなさい!あとで弁償するから!!」

必要経費として認められたら。

運転手に向かって叫びながらも背を向けて車道を全力疾走。自動車はこっちの事情なんてお構いなしに走っている車道を走るのははつきり言って危険極まりない。とは言え、歩道を通ると見境なしの彼女が一般人を撒きこむ可能性がかなり高い。

ついでに言うど流石に車にはねられれば動けなくなるだろう、という思惑もあったりなかったり。

「うーん、どうにかして無力化出来ないものかしら」

このまま追いかけて続いていると私の方が先に参ってしまう

可能性がある。

無駄だらけの身のこなしと過剰とも言えるパワーを思えば先にガス欠を起こすのは間違いなく彼女なのだけれど、一方で彼女は追う側であり私は追われる側であるのもまた事実。

彼女は彼女の好きなタイミングでインターバルを挟める。

飲みたい時に水分を補給し、必要とあれば食事だって取れる。

些細なようでも、積み重なっていくとどこかで私と彼女の持久力の差を覆されかねない。

……と言うか、正直に言うところとお手洗いにいきたい。

「あんまり女の子相手に荒っぽい事はしたくないんだけど……」

だからこそ、病院で気絶させた時は手足を縛っておくだけに留めておいたのだけれど。 10階から叩き落としたのは不可抗力なのでノーカウントで。

こうも執拗に追いかけて回されるようでは致し方ない。 即座に踵を返して歩道へ飛び込むと、すぐ近くにあった肉巻きおにぎりの屋台？から包丁を一本拝借。

バイトと思しき女の子の罵声を聞き流しつつ、改めて車道に戻る。既に目の前にまで迫っていた少女は自動車のドアを掲げている。いつぞや深夜アニメで見たような構図だ。

まあ、私はそんなものに正面から突っ込むほどもうろくしていないのだけれど。

跳躍、頂点に達するのと同時に歩道の屋根を支える柱を蹴ってもう一度跳躍。

彼女の掲げるドアを軽々と飛び越え、着地すると同時に彼女めがけて特攻する。

振り返ろうとする彼女の首筋めがけて、病院で奪い取ったっきりのスタンバトンをかざした。

「うぐ……」

竦み、手にしたドアを落とす。

が、今度は気絶することなく、萎縮する筋肉を無理矢理動かして腕を振り回した。

子どもが駄々をこねて暴れているような、攻撃というにはあまりにも稚拙な動作だ。けれど、電撃を浴びながらではそれすらも即座に出来るものではない。

もっとも、そんな雑な攻撃、油断していたとしても視界に収まっている限りかわせない私ではないのだけれど。

「……電池切れかしら？ 病院では気絶したのに」

「ボクにおんなじ攻撃は2度通じない」

「アンタは聖闘士か！？」

「？」

あ、首を傾げられた。そうか、今の子には通じないのか……。

と言つても、私だってよく覚えていない、というかそもそもリアルタイム世代じゃない。

……そんな事はどうでも良くて。今は彼女をあしらう事だけを考えよう。

スタンバトンを構えてもう一度距離を詰める。通じないと言っても流石に喰らえば痛いし、竦みもする電撃を警戒して、彼女は半歩飛び退く。

攻撃を受けようと構えている両手に向かってバトンを振ると、電撃を警戒して両手を引っ込めた。

そこにすかさずもう一方の手の包丁を突き出す。

狙うは彼女の顔面。より具体的に言うならば眼球。

「——ッシャ！」

「——ッ!？」

私の狙いに気付くよりも早く、彼女の手は眼球を庇うべく動く。顔を守るといふ動作は半ば無自覚に行われる動作であり、それ故に早い。

切っ先が届くよりも先に、その双眸は腕によって隠された。代わりに、彼女の腕に包丁が深々と――

「うそお……」

――突き刺さらなかった。

刃は筋肉を覆う厚さ数ミリの皮膚を貫いただけに留まり、彼女の堅牢な筋肉を傷つけるには至らなかった。

申し訳程度に、傷口から赤い雫が垂れている。

自分でも何を言っているのか理解出来ないけれど、それは間違いなく現実の光景。

もうやだ、この筋肉お化け。

思わずそんな嘆きを脳内に反響させながらも、しっかりスタンバトン添える。

「ぐう……?」

と、毎度の短いうめき声。ただし、効果はいま一つ。

ふらつく彼女に背中を向けて、一連の乱闘を見物していたギャラリィの中を全速力で駆け抜けた。

物陰の隠れて一息吐きながら、思う。

あー、くそ。あの子から拳銃ひったくっておけば良かった……。

彼の持っていたH&K P2000は特別な銃でも何でもない。

が、そもそも、武器として見た時、銃に特別でないものなんて一つも存在しない。

火薬の力を借りて鉛玉を飛ばすだけの単純極まりない構造。けれども、その単純な武器を手にした人間はあらゆる獣を、彼の爪や牙の射程の外側から一方的に穿ち、貫き、絶命させる。丸腰では犬や猫の相手さえも危ういというのに。

彼女の重量から予想される筋肉の質と量でも銃弾が通らないというのはあり得ないだろう。

足に一発お見舞いしてやれば、それでも暴れるようなら四肢を片っ端から潰していけばいずれは無力化出来るだろう。 もっとも、そこまでやると命の保証はしかねるけれど。

一応、警察から拝借するのも手ではある。 が、私や私の属する組織のことは警察の末端には知らされていないし、仮に知っているも悠長に説明している時間があるかどうか。 かと云って警察相手に強盗まがいのことをするのも気が引ける。

「はあ……さて、どうしたもんかしらね」

と、首を捻ってたところで妙案が浮かんでくれる気配は微塵もなかった。

18話 世界観が現実に近いと警察の存在が凄まじくめばちこ

再び愛千橋病院。

看護士の女性の話によると、コスプレした女性二人によるちよつと常識はずれな乱闘があったらしく、病院内は色めき立っていた。が、その割には警察の気配がしない。

聞くところによるとRUMIコスの子は10階から叩き落とされたらしいが、それだけ派手に暴れて誰も警察を呼ぼうとしないというのは少々不自然だ。

「……本当に新天寺社の息のかかった施設なんだな、ここは」

「いや、正確に言えば息のかかった人間が何人かいる、医療関係の機材やカルテの管理なんかでそれなりに利害関係がある程度だ。

警察がいないのはどっちかって言うと余所の判断だろうな。どんな力が働いて動けないのかは知らないがな」

頭の中は妹のことではいっぱいらしい。

その受け答えからは警察に対する無関心が透けて見えた。

俺としては変なタイミングでやってこられてもそれはそれで具合が悪いから、もう少し気にとめておいた方が良さと思うのだが。

「なあ、秋一。ここって脳の手術を出来るような大それた設備があるような病院だっけ？」

なし崩しに通天閣からここまで手をつないだままだった、そして今も手を握っている真つ最中の千里がそんな疑問を口にする。

が、病院の設備のことなんて俺に分かる筈もない。

「……どうなんだよ？」

「問題ない。 脳の手術と言ってもただの電磁波照射だ」
「ただの、ねえ」

だとすれば、わざわざ千里の力を借りようとした理由が説明出来ない。

あと、それは手術とは言わない気がする。

なら何というのかと訊かれても答えられないので、いちいちつく程の事でもないだろうが。

大須 冬彦は間違いなく夏芽の兄で、夏芽のことを誰よりも想っていた。

その事実だけあれば十分だ。 何の意味もなく、何の勝算もなく、ただ自棄になって肉親の命を危機に晒すような真似はしないだろう。
大須 冬彦がエレベーターのボタンを押す。

ちょうど1階に止まっていたエレベーターのドアが静かに開いた。患者や看護師たちの騒ぎを尻目に俺達4人——と言っても一人は俺にしか見えないのだけれど——はエレベーターに乗り込み、10階を目指す。

ドアが閉まり、静かに昇り始める。

「……今から、夏芽の手術の詳細を伝えたい」

ゆっくりと上昇を続けるエレベーターの中で、大須 冬彦が静かに口を開いた。

「夏芽の手術に使う機材は出力、照射位置の調整等にARネットワークを利用して行っている。 で、通常はそこまで多量の演算能力は必要ないんだが、何せ夏芽が眠ったままになっている原因は通常の人間の脳の機能としてはあり得ないもの。 だからいざとなったら中止する事も視野に入れて、いろんなケースに対応できるようにしておきたい」

「ああ、だからストフェスにフトモンの大会を重ねてまで演算能力を確保したのか」

少しでも妹の安全を確保するため。

動機としては納得すべきなのか突っ込むべきなのか微妙な線だ。

そもそも、大須 冬彦のような役目を担う、どちらかと言えば組織の暗部の人間にどの程度の権限があるのかも定かでないし。

「そういうことだ。 ネットワークの無断利用になる以上、それに勘付かれた時に外部から干渉を受けないように演算をこの一帯のエリア内で完結させたい」

「それじゃ、私はエリア外部からのアクセスを出来ない状態にすればおk？」

「いや、それは僕がやっておく。 君はエリア内のセキュリティの無効化を頼む。 …… あと、羽原 秋一。 君はそうだな、夏芽と一緒に病室の前で見張りでもやってもらおうか」

「まあ、そんなところだよなあ」

俺は千里のようにネットワークに侵入して云々なんて大層なことは出来ない。

かと言って何か特別な事が出来るかと言えば特にそんな事もなし。それに、いて損は無い役どころには違いない。

「もちろん、ただ漫然と見張りを押し付けた訳じゃない。 君の目なら……」

一旦言葉を切った大須 冬彦は、懷から取り出したアーリーを弄って何かしらのアプリを起動させた。

瞬間、俺の目にこの病院の間取り図と思しき映像が浮かび上がる。フロアマップだけであれば特に驚くべきものでもない。 が、問

題は複数の丸印がフロア内を行き来しているのが表示されている点だろう。

「青は病院の関係者、赤は患者、部外者は黄、新天寺社の関係者は緑で表示されている」

「へえ、便利だな。もしかして病院内のカメラか？」

「正解。もちろん、データのネットワークへの送信もこういう形で利用も病院には無断で行われている。だから、こんな事も出来る」

もう一度、大須 冬彦が端末を操作する。

1階のエントランス付近を見下ろす画像に切り替わった。

「なるほど、確かに見張りにはうつつつけみたいだな」

「時間があればもっと有効なアプリを用意してやる事も出来るんだが」

「いや、これだけで十分」

大須 冬彦のアーリーを受け取り、ポケットにねじ込んだ。

「操作方法は分かるか？」

「いざとなったら夏芽に頼むから大丈夫」

『なんか良く分からないけど頼まれた！』

本当に何も分かってなさそうに得意気にふんぞり返る夏芽。

その様子が少しおかしくて、思わず嘖き出しそうになってしまう。

「ああ、頼りにしてるぞ、夏芽」

「おいこら、僕に見えないからって妹に変なことするんじゃないぞ?!」

「しねえからちょっと落ち着け、シスコンマスター」

声を荒げる大須　冬彦を苦い笑みを浮かべつつなだめる。

「酷いわ、私というものがあるながら妄想女に浮気するなんて……！」

「変なタイミングで便乗してふざけるんじゃないよ!？」

いい加減付き合っのが面倒になった俺は二人の頭を軽く引っぱたいた。

その直後、10階に到着したエレベーターのドアが開き、俺達を待ち構えていた協力者と思しき人物が頬をひきつらせる。

「ふむ、なにやら愉快なことになっているようだね」

その人物の正体は先ほど俺に夏芽の病室を教えてくれた初老の医師だった。

その言動や態度を見て、脈絡もなく思った。カエル顔じゃないのが惜しいな、と。

簡単な挨拶のあと、初老の医師の立ち会いのもと、夏芽を覚醒させるための手術が始まった。

千里は専用のアーリーを構えて、大須 冬彦はもう一つ持っていたらしいアーリーを手にネットワークへと干渉すべく作業を開始。医師は電磁波を照射する装置にあれこれとデータを入力している。俺はと言えば、先にも述べた通り、やることがないので病室の外の椅子に腰かけて右目に映る風景を眺めていた。

「なあ、夏芽？」

「ん、なに？」

「君は目を覚ましたらどうするんだ？」

預かり物のアーリーを操作しながらそんな事を尋ねてみる。

我ながら漠然としていて答えづらい質問だとは思うが、別に答えを求めている訳ではないからさしたる問題ではない。

そういった意図をきちんと汲み取ってくれた夏芽は下あごに人差し指を当てたまま、視線を虚空に彷徨わせて考え込むような仕草を見せる。

『よく分からない。そもそも自分が昏睡状態にあるとか言われてもピンと来ないし、目を覚ました後のアタシを取り巻く環境がどんなものかもよく分からないもの』

「……そりゃそうだよな」

夏芽にだって昔は友達くらいいただろうし、好きな異性もいたかもしれない。

けれど、彼女は正確な期間は知らないが、それなりに長い間眠り

続けていたんだ。

夏芽の周りにいた人達はきつと夏芽とは異なつた時間を歩んでいる。

その中に舞い戻る事が不可能だとは思わないけれど、思う以上の困難が伴うのは間違いない。

『まあ、体は物凄くなまってそうだから、リハビリから始めないとね』

と、夏芽は屈託のない笑みを浮かべてみせた。

その笑顔からは目を覚ました後の不安とか、そう言ったものはほとんど感じられない。

「ああ、そうだな」

『そういうアンタは？』

「俺か？ そりゃあ、夏芽みたいな特殊な境遇にはいながら、普通に進学としか言いようがないなあ……」

『ふーん。 高校、どこ行くの？』

「九尾高。 千里も一緒だ」

『へえ……それってもしかして、秋一が「千里は俺がいないとダメだからなあ、ついて行ってやるよ」とか言って同じ高校を志望した、みたいな？』

「いや、俺は学力相応のところを受けただけだよ。 わざわざランクを落としてまでついて来たのは千里のほう」

俺はもつと良い高校に通えるんだから、と反対したのだが。

千里はそれを「秋一のいないところでいじめられて不登校になったら意味ない」と突っぱね、九尾高校を受験した。

そして、さも当然のようにトップの成績を収めて合格を決めやがった。

『そつかあ。私も高校通い直そうかな、一年から』
「……不安じゃないのか？」

独り言のように呟いた彼女の表情はあまりにも楽しそうで、思わずそんな事を尋ねてしまう。

『んー、不安がないって言えばウソになるけどさ、兄さんが私のために尽力してくれていたのがそれ以上に嬉しかった、かな？』

少し恥ずかしそうにはにかむ夏芽。

その表情のまま、「それに……」と言葉を続ける。

『新しい友達も出来たしね』

「えっ？」

『えっ？』

思わず間抜け面になってしまったであろう俺に釣られて、夏芽が鳩が豆鉄砲でも食らったような表情になる。

『えーっと、やっぱり厄介事に巻きこんだの……怒ってる？』
「……冗談だよ」

彼女は恐る恐ると言った様子で俺の表情を伺っている。

『本当かしら？ 危ない目に遭ったりもしたから意外と根に持ってるんじゃない？』

「そこは前もつての忠告があったから文句は言わねえよ。 と言うか、むしろ感謝したいくらいだ」

『感謝？ 何に？』

「さあ、何だろうな」

千里が俺のために頑張っていたのを知れたから、とはこっ恥ずかしくて言えなかった。

『何よお、友達に隠し事するつもり？』

「友達でも言えない事はあるんだよ」

俺の言葉に対して『むう……』と頬を膨らませて抗議する。

AR特有の誇張ゆえのフグ科の生き物かハムスターのような膨らみ加減が少し面白い。

「分かったよ。可愛いふくれっ面に免じて教えてやる。一回しか言わないから心して聞けよ！」

夏芽はすぐに真面目な顔に戻って、俺の目をじっとのぞき込むように凝視する。

内心、「うわぁ、コレ滅茶苦茶照れる」と思いつつも、それを表に出さないよう軽く深呼吸し、

「今回の件に巻き込まれたおかげで夏芽と友達になれた。だから、むしろ巻き込んでくれた事に感謝してる」

と、彼女の目を見つめ返して言ってやった。

最初に思った事とは違うが、別にウソは言っていない。

確かに今日会ったばかりで、友達だと胸を張って答えるには付き合いが短すぎる。

けれど、今日夏芽に出会った事で彼女と言う存在を知り、彼女のことをもっと知りたい、その為にも友達になりたいと思ったのは紛れもない事実だ。

彼女が俺と同じ不思議な才能を持っているから。

そして、彼女が身内の悪事に心を痛められる優しい女の子だから。

『……そんな恥ずかしいこと堂々と言わないでよっ!?!』

「言えつつつたのはお前だろ!?!」

『そ、そりゃあ、確かにそうだけど……!?!』

顔を赤くして、両手の人差し指同士をくつつけては離しを繰り返しながらふにやふにやと何やら呟いている。

ARだから顔の赤さが半端じゃない。冗談みたいに真つ赤に茹っっている。

見ているこっちまで何故か恥ずかしくなってくる……。

「まあ、その……なんだ。元に戻ってもヨロシク」

『あ、うん。こちらこそヨロシク』

我ながら初々しくて気持ち悪いことこの上ない。

何とも言い難い微妙な沈黙が流れる。間が持たなくなった俺は居心地が悪い訳ではないが、気恥しい静寂を取り繕うようにアーリの画面へと視線を戻した。

もつとも今起動しているアプリはAR機能を使用しているから、見張りをする上で必要なものは画面を見なくても目視できるのだがそこを指摘されないよう、あくまでアプリの機能を試していますといった風を装う。

ワイド・ズーム、映すカメラの変更。フロアマップの表示、階数の切り替え。

アレコレ試している内に、思った以上にこのアプリが多機能である事を理解する。

「これ……透視機能や他のアーリーのカメラも閲覧出来るんだな」

その事に気付いた俺が真っ先に覗き見たのは千里のアーリーの力メラ。

そこには間違いなく例の医師と大須 冬彦の姿が映しだされていた。

ちなみに、透視機能と言うのは他のカメラの映像を引っ張って来て、今俺のいる位置から”もしも壁がなかったらこう見えていたであろう”という景色を推定し、カメラ越しに見ると壁や床が透けているかのように表示される機能である。

つまり、この機能をオンにした状態で今は閉ざされている夏芽の病室を見ると……室内とベッドと医療機器、そして相変わらず床に伏したままの彼女の身体がドア越しにでも確認出来た。 医師や大須 冬彦、千里の姿が見えないのはカメラが彼らの姿を殆どとらえていないからだろう。

視覚的なインパクトは絶大だが、カメラ越しの映像が見えるならあまり必要ない機能だ。

「なあ、夏芽。 こいつの情報解析をしたら……あれ？」

振り返ると、今日一日中ずっと俺の傍らに浮いていたAR少女の姿が消えていた。

突然の出来事で一瞬うろたえる。 が、すぐに彼女を目覚めさせるための手術をしているのだから消えるのはむしろ当然だと察し、冷静さを取り戻した。

そろそろ手術が終わる頃だろう。

何となくそう考えつつアーリーを弄り、病院の外のアーリーの力メラの映像を眺める。

「……あ」

映し出された映像に見知った顔が二つ。

一方はRUMIコスの女の子で、もう一方はYuiyのコスプレをした女性。

彼女に助けられたのが何時間か前になる。今の今までずっと戦い続けていたのだろうか。

恐るべきバイタリティと言いたいところだが、双方アーリー越しに見てもはつきりと分かる程に疲労の色が浮かんでいた。

それでもなお二人の動きは人間の常識を越える程に鋭く、激しく、荒々しい。

とてもじゃないが、俺なんか首を突っ込む余地なんてないだろう。

そんな事を考えながら常軌を逸した死闘を見守っていると、徐々に両者の力関係と立ち回りが見えてきた。

RUMIコスの子は身体能力が漫画やアニメのキャラクターみたいに高く、その並外れた筋力故の強度のおかげで生身から繰り出される攻撃であればたとえ包丁で斬られたとしてもかすり傷で済んでしまうらしい。

対するYuiyコスの彼女は豊富な戦闘経験で化け物じみた少女と限りなく互角に渡り合っている。より正確に言えば一回一回の攻防は常時Yuiyコスの女性有利で、大局的に見ればRUMIコスの彼女の粘り勝ちといったところだろう。

要するに決定打を与えられないのだからいつか負けると言うだけの話である。

言い換えれば、決定打を与え得る手段があれば勝敗はきつと逆転する。

そして俺なんか考え付くことは戦い慣れているYuiyの格好をした彼女も当然把握していて、なるべく殺さない範囲で、相手を無力化する手段を探っているように見えた。

……その手段の一つが俺の懐にあるものという予想はまず間違っ
てはいないだろう。

ここの見張りという役割を放棄することは多少気がかりではあったが、本来大須 冬彦にとって俺はない頭だった訳で。ならば、俺一人いなくなったところでさしたる問題にはならない筈。

「命の恩人を見捨てるわけにはいかないよなあ……」

ベルトとジーンズの間突っ込む形で携行していた銃の感触を衣服越しに確かめてから、ゆっくりと立ち上がった。

――

ゆっくりと重い瞼を開く。病室の清潔な反面、無機質で味気のない天井が視界を覆う。

「……眩しい」

「なつめ！」

酷く温度差のある声が二つ。

一つは長いにも程がある眠りからようやく目を覚ました私が発したものの。

もう一つは私の為に邪な野望の狗になりながらも、飼い主気取りの野心家を欺いた兄さんの声だった。

飛んできたかのような勢いで私の傍に駆け寄ってきた兄さんがわたしを抱きしめる。

「良かった……良かった……！」

声が少し上ずっている。　わずかに嗚咽が混じっている。
それだけでも兄さんがどれだけこの日を心待ちにしていたのか手に取るように理解出来る。

「兄さん……」

思うように動かない体を、初めて扱う電化製品を操作するように注意深く動かし、兄さんの腰に手を回した。

たったそれだけの動作で、なまりきった体は既に悲鳴を上げる。
思うように動かないのは体だけじゃない。　目覚めたばかりの脳は今の今まで肉体から抜け出して活動を続けていた筈なのに思うように働いてくれない。

……　何か、大事なことがあったような？

けれど、喉元まで出かかったそれを思うように言葉に出来ない。
それでも何か手掛かりになりそうなものを探して視線をさまよわせる。

抱き合う私たち兄妹を一人の女の子が感情の読み取れない目で見守っていた。

北里　千里。　2年前、私が意識を失う少し前に新天寺社の関連会社にハッキングを仕掛けた女の子だ。　技術的には高い水準にあったものの、次のターゲットを決める手順にお粗末な法則性があった為に兄さんをリーダーとしたチームにハッキングを阻止された。
そして、その技術力が買われて兄さんに手を貸すことになった……

…　秋一の親友。

「秋一は……？」

「秋一なら外に……あれ、居ない？」

私の言葉に応えるように病室のドアを開け、外の様子を伺う北里

千里。 秋一の不在を確認して首を傾げる。

そんな何気ない仕草のひとつひとつが彼女の小柄さと相まっつていちいち愛らしい。

なるほど、秋一がシスコンに兄貴みたいに過保護になるのも無理からぬ話だ。

……思い出した。 秋一がいない、その理由を二人に伝えなくちゃいけないんだ。

「お願い、秋一を助けて」

長らく喋っていなかった私の声帯は半ば声の出し方を忘れていた。それでも何とか力を振り絞って言葉をひねり出す。

秋一がアーリーを利用して外の景色を眺めていた事を。 その際に秋一が見たものの一部始終を。

秋一が何を見ていたのか気になって、彼の手にしていたアーリーに潜り込んでいた私が見たものを。

出来る限り手短に、かつ正確に伝える。

それつすらも怪しい有様で、どれだけ伝わったのか疑問の残る所だけだ。

「なるほど。 君の言う二人はきつと病院で暴れていたコスプレイヤーだろうね。 冬彦くん、君のアーリーから監視カメラにアクセスしてくれないか？」

と、私の意を真つ先に汲んでくれたのは初老のお医者さん。

「あ、はい。 どの映像を何時間遡れば？」

「10階エレベータホール前で、2時間くらいかな」

指示されるままにアーリーを操作する兄さん。 あっという間に

お目当ての映像を見つけ出すと、それを全員に見えるように向きを変えて差し出した。

ヴォーカロボットRUMIのコスプレをした女の子のスカートから拳銃を抜き取った秋一が、その女の子に襲われていた。そもそも本気で戦う意思のなかった彼は徐々に追い詰められ、エレベータホールで対に逃げ場を失う。

絶体絶命の危機に陥った彼を救ったのはこれまたコスプレをした女性だった。

エレベータへと秋一を逃がした彼女は鮮やかな身のこなしで対峙した少女の攻撃をかわし、やがて窓から彼女を投げ落とした。

けれど、さっき私が見たRUMIコスプレの彼女は即死も良いところの状況を切り抜け、平然としていた。

「……秋一じゃあどうしようもないと思われ」

「と言うよりも、真っ当な人間の割って入る余地がない、と言った感じだね」

北里 千里とお医者さんの意見は私と同じだった。

こんなとんでもない戦いに介入できる人間なんて滅多にいない。

ましてやごく普通の中学生ではたとえ銃を持っていたとしても当てることすらままならないだろう。

けれど――

「いや、案外行けるんじゃないかな？」

ただ一人、兄さんだけは私達と異なる結論に達していた。

19話 透視とか遠隔視って相当緻密にコントロール出来ないと精神衛生上非常

何気に初めての一話内での視点変更。

チヨイと悩みましたが、丸々1話取るほどのものでもないのだから
いう形に落ち着きました。

20話 某ゲーム機の顔シューティングは地味にハマるから油断ならない

戦うコスプレイヤー二人の居場所を見つけるのはさほど難しいことではなかった。

何せ大須 冬彦のアーリーの機能に加えて、アレだけ派手に暴れているのだ。自然と周囲の関心・注目を引き、二人のいる方へと人の流れが生まれる。

ましてや今は大通りの歩道の屋根の上という目立つにも程のある場所で元気に跳ね回っているのだ。

噂を、伝聞を辿って行けば、むしろ二人を避けて通る事の方が難しいくらいではなかるうか。

しかし、問題はここから先。 どうやってYuiykosの彼女の援護に入るか？

まずあの二人の戦闘能力は凡人の介入を許せるような代物じゃない。

一方の俺は戦闘能力なんて単語を使う奴は「そういうお年頃」と一笑されるような実に平和な世界で生きて来た至って平凡な中学生である。

もちろん普通に首を突っ込んだところでワンパンチ即K.O.なのは間違いない。

下手をすれば助けたい方の足を引っ張ってしまう可能性さえある。

そこで登場するのが懐の拳銃……なのだが。

これはこれで今まで一度たりとも撃った事のないものをいきなり動く標的に向けて撃つことへの凄まじい不安が付き纏う。

有効射程とか流れ弾とか、何に対してどう気を使えばもさっぱり分らない。

自分で撃つのを放棄して彼女に渡すのも手かもしれない。

とは言つものの、これはこれで俺自身が戦いに介入する時と同じようなリスクが伴う。

うっかりRUMIコスの子の手に渡ってしまったりしたら目も当てられない。

などと考えている間も二人は衆目のことなど気にも留めず、延々と戦い続けている。

後悔する前に考える前にかくやれ、といった類の少年漫画の主人公的なスタンスははつきり言つて俺の性に合わない。基本的に小市民であり、凡人である。

と言うか、こんな状況下に置かれて即座に動ける方がおかしい。動かざるを得ない状況であればとっさに体が動く事もあるかもしれないが、今のところ戦況はこう着状態。

ここで拙速を尊ぶとばかりに突っ込んでいけるほど俺の肝は座っていない。

それに……見ず知らずの相手で、かなり物騒な性格をしているとはいえ若い女の子に銃を向ける事にもどうしても抵抗を覚えてしまう。

「さて、どうしたもんかなあ……」

『アンタねえ、プランもなしに一人で飛び出してどうするのよ?!』
「うおっ!?!」

考え込んでいる俺のすぐ隣に怒声とともに現れたのは紛れもなくついさっき消えた筈の AR少女——夏芽だった。

「お前、何してんの?」

『何してんのじゃないわよ! アンタが考えなしに出て行っちゃうから、兄さんの知恵を貸してあげようと思ってここに来たのよ!』

「大須 冬彦の? ってか、知恵って何の? っていうか、そもそ

も何でお前はその姿？」

「ついつい質問攻めにしてしまう。それも、どの質問も少し考えれば勝手に事故解決できるような単純極まりないものばかり。」

『アンタなら一から説明しなくても大体想像ついてるでしょ？』

「ああ、まあな」

夏芽がARなのは超能力で改めてネットワークに侵入しているから。

大須 冬彦の知恵とやらは、それが具体的に何を指すのかまでは分らない。

「が、策もなしに出て行った俺の目的をアーリーの機能を駆使して調べ上げ、これから遭遇するであろう問題を予想した……ってところだろう。」

「で、知恵ってどんなものなんだよ？」

『ちよつと待って。その前に状況を確認しておきたいんだけど、良いかしら？』

彼女の真剣な眼差しを正面から受け止めつつ、首を縦に振る。

『秋一はあそこで戦ってる人……と言っても今の私には見えないんだけど、のYuiyの格好の人を助けたい。でも、あの戦いについて行く方法がないから手をこまねいている』

「ああ、その通りだよ」

素直に認めてしまうのは少し腹立たしいけれど。

『で、唯一介入する手段があるとすれば懐の拳銃くらい。でも、

それを渡すチャンスがあるかどうかも怪しい』

「そういうことだ。 仮にあの人が緑の方を首尾よく撒いたとして、その隙について接触できるかっていうと難しいだろうしな……」

別に運動が苦手って訳ではない。 苦手どころか、さらっと人並み以上の記録を叩き出して体育会系の部活に所属してる連中から「その才能、うちの部で開花させないか？ ついでに北里もマネージャーとしてだな……」と誘われる程度には動ける部類だ。

ただ、今しがた人だかりの向こうで大暴れしているあの二人は異常過ぎる。

俺の知る限り人間は、それも見た目は華奢な女の子はスクーターをかついでぶん投げるなんて芸当は出来ないし、そもそも何で屋根の上にスクーターがあるのか教えて欲しい。 同様に、とっさに飛んできたスクーターの上に着地して二段ジャンプするような超反応はスタントマンだって出来やしない。

「殆ど漫画の世界だぞ、あれ？」

『そうね。 でも、一瞬たりとも介入の余地がないって訳じゃないでしょ？ たとえば投げ技が決まった直後とか』

確かにその通りだが。

だからと言って投げ飛ばされたRUMIコスの子が起き上がるまでの間に群衆をかいくぐって射撃が当たる距離まで近づけるとも思えない。

Yuiyの人に至っては投げた直後には逃げるだろうからこちらもちちらで間に合いそうにない。

大体、何度も言うがあの二人に近づくと云う行為自体、半ば自殺行為だ。

片や軽く弾かれただけでも致命傷になりそうな怪力少女。

片や後ろに立った瞬間、ねじ伏せられそんな現代のくのいち。

出来る事なら近づかずに済ませたい。

『だったら、近づかずに事を済ませちゃえばいいのよ!』

「出来るもんならそうしたいよ」

『だーかーらー、出来るようにしちゃえば無問題でしょ。 アンタの目を使って』

その一言でようやく合点が行った。

「あつ、ARシューティングか」

『そういう事。 そのアーリーにはもう入ってるから、後は兄さんと北里 千里が対人用に改造してくれるわ。 アンタの持つてる銃はもともと新天寺社のものだから、クセなんかも計算に入れて、無風状態なら30メートル先まで正確に狙えるように出来るって。 アンタが下手打たなければけど』

ARシューティング。 細かいジャンルは色々とあるだろうけれど、AR技術によってカメラ越しの風景上に描写された標的を撃ち落とす、典型的なファーストパーソン（一人称視点）のシューティングゲームだ。

と言っても、ARを用いたそれはプレイヤー本人が動かねばならないため、あまり無茶な動きや特殊なシステムを採用しづらく、大概のゲームは似たり寄つたりの内容になりがち。

しかし、弾の軌道、ターゲットのサイズや動きなんかで微妙にゲームバランスを調整している。

そして、確かに実在の人間を標的にした対戦型ARサバイバルゲームなんてのもあった筈。

そう言ったゲームの中でも特に狙撃の疑似体験に重きを置くゲームであれば、少し設定を弄って調整を加えれば実銃でも使える……かも知れない。

そんな事を考えながら二人の戦いを見守っていると、不意にスマホが震えた。

「なんだ、千里か？」

『いえあ！ 秋一の可愛いメス犬、千里ちゃんだお！』

……うわあ、通話切てえ。

が、恐らくARシューティング絡みの話の可能性が高いため、切る訳にも行かない。

「で、何の用だよ？」

『今から改造したのを送るから、受け取る準備しといて』

「ああ、分かった」

空いている左手で大須 冬彦のアーリーを取り出す。新着メールを受信。

最上段にあるメールの添付ファイルを開き、ダウンロード。

数秒後、またしても俺の右目の景色が様変わりした。

「視線を感知する機能は健在か」

二つの目の焦点が合った所にいる対象を自動的にロックオンし、バーチャルの拳銃が映し出される。

更にその対象の体の部位へと意識を向けると、拳銃の位置が微妙に動いた。

そこに当てたいならバーチャルの拳銃のある空間に本物の銃を重ねろってことだろう。

視界の隅に意識を向ける。

何やら意味ありげなスペルと数字がズラリ。

確証はないがそれらの意味するところは銃の構造的な理由による

軌道のずれ、弾丸にかかる引力の影響、風向き・風の強さ…… e t
c。

要するに弾丸の軌道を計算するのに必要な情報である。

「あんまり長時間は構えてられないな」

懷に手を突っ込み、安全装置を外してから H & a m p ; K P 2
000 のグリップを握る。

通りを挟んで並行する二つの歩道の、二人が屋根の上で暴れている方の反対側。そこで彼女たちを見上げる野次馬から少し遠ざかった場所に陣取り、二人を凝視。

相変わらず二人の攻防は人間の常識を越えた速度と密度を誇っていて、いくら右目による補正があってもとても狙うべき場所を狙えそうにない。

が、それでも懷に手を突っこんだまま、じっとその超人的な動きを見守る。

そして――

――今だッ！

決定的なチャンス。それは坂田うめと言うらしい少女が Y u l
y コスの彼女の襟を掴もうと手を伸ばした瞬間に、そして彼女が飛び退きながらその手に警棒を押し当てた瞬間に訪れた。

その警棒はただの警棒ではなかったらしく、坂田うめの身体がわずかに仰け反り、硬直する。その一瞬を捉えて拳銃を構え、引き金を引いた。

狙うは、俺の視線の向かう先は坂田うめの白いフリルのついたオ
レンジのミニスカートから伸びる健康的な太もも。

思った以上に大きく、けれど少し間抜けな銃声が辺りに響く。

それとほぼ同時に弾丸が肉を穿ち、赤いものが溢れだした。

20話 某ゲーム機の顔シューティングは地味にハマるから油断ならない（後書

夏芽の一人称の表記ゆれに気付いた今日この頃。

彼女の一人称は「アタシ」が正解です。

本体の容姿は私^{わたくし}でも良い感じの設定なのに「アタシ」です。

21話 素直になれない幼馴染と解凍系ヒロインをツンデレの定義の範疇に収め

何の前触れもなく乾いた音が響いた直後、RUMIコスの少女が太ももから血を噴いて倒れた。

倒れた、と言っても意識を失った訳ではなく、あくまでも尻もちをついて、傷口を押えて呻いているだけだが。

「大丈夫ですか？」

「……君は？」

何食わぬ顔で、とまで言わないが思った以上に落ち着き払った態度で私の下へと駆け寄ってきたのは病院で会ったあの少年。

手には別れ際に手にしていた拳銃が握られている。

彼が駆け寄ってきた進路へと視線をやると野次馬がわずかながら確かに道を開けているのが分かった。

彼が発砲し、彼の手に持っているものに気付いた群衆が無自覚に道を開けた、と言ったところだろうか。

「早く降りて来て下さい。騒ぎ出す前に場所を移したいんで」

「そうね。どこか、お逃れの向きの場所は……」

「俺に心当たりがあります」

何とも手際の良い少年だ。

上司が私のために寄こしてくれた補佐役か何かじゃないかとさえ思えてくる。

それに、彼はどのくらいの距離から発砲したんだろうか？

ちょうど私が飛び降りて着地する分のスペースだけ確保した上で、屋根のすぐ下に陣取る彼がそこに駆け寄って来る時の速度と、銃声が響いてから今に至るまでの時間。

それらを踏まえると2、30メートル程の距離から撃ったという結論に至る。

——そんなバカな。

「……余計な考察は後回しでお願いします」

「ああ、済まない」

私の表情や目の動きで何かを察したらしい。

本当に鋭い。本部に戻ったらスカウトする方向で上に向け合いたいくらいだ。

よろよろと立ち上がる緑髪の少女を横目で伺いながら、屋根の上から飛び降りる。

膝を上手く曲げて衝撃を逃がし、何事もなかったかのように着地。

「さて、その心当たりとやらの案内してもらいましょうか？」

「と言ってもアナタも知ってる場所だと思えますけどね」

と、薄く笑みを浮かべる少年。

そんな表情を作りながら、彼は何故か羽織っていたシャツジャケットを脱ぐ。

それから、脱ぎたてのそれを屋根の上の少女めがけて放り投げた。

「止血しておかないと下手すると命の関わるぞ？」

「……」

少女は忌々しげに彼を睨みつけている。

対する少年は拳銃を手に持ったまま、彼女のもう一本の脚を見据えていた。

余計な動きを見せればもう一発見舞うぞ、という言葉外の忠告。

「……」

私と彼。二人を相手にあの怪我では勝ち目がない。

その事を察した彼女は渋々と言った様子で太ももに彼のシャツジヤケットを巻き始める。そんな彼女に背中を向けて、私は彼の心当たりとやらを指指して歩き出した。

「……という訳で、貴方の身柄を拘束させてもらうけど、良いかしら？」

「いや、どういう訳か分からないんだが。漫画じゃないんだから、かくかくしかじかのなぞつくばらんな説明で片付けようとするのはどうかと」

愛千橋病院に到着した私と少年——道中の紹介によると羽原 秋一というらしい——は何事もなく1007号室に到着。

そこで帰りを待っていたのは大須 冬彦。ちょうど彼にも、と言うか本来は彼に用があつた私は、彼の隣の椅子に腰かけた。

「……要するに大須 冬彦に良いように使われたって事だろ？」

「本当に君の勘の良さは気持ちが悪いね、羽原 秋一」
「どういたしまして」

にやりと笑みを浮かべる大須 冬彦。対する羽原くんはやれやれと肩をすくめている。

その仕草の意図を図りかねた私は、少しそのやり取りの意味を考える。

まず、良いように使われたのは誰か？——ここにいるメンツの誰かだろう。

私と大須 冬彦のやり取りの後にあの会話が入ったって事は……私か。

「もしかして、私達に情報を流していたのって……？」

「正解。 もっとも、君の上の人達はおおよその事情を察した上であえて乗っかっていたんじゃないかと思うけどね」

「十中八九そうだろうなあ……」

軽くため息を吐きつつ、羽原くんは窓の外へと視線を向けた。

確かに私の知る上の人達とやらはそう簡単に御せるような素直な連中じゃない。

情報源の信頼度くらいはきっちりチェックして、もしもガセだった時の対策くらいは既に講じていてもおかしくはない。 その程度の狡猾さは持ち合わせているだろう。

「でも、それならどうして千里ちゃんを保護しろ、なんて言ったのかしら？」

「多分ですけど、千里の利用価値を見抜いていたってことでしょう。あと、千里を人質に取れば自動的に夏芽も人質に出来る。それに意識不明のまま何カ月も経ってる少女を保護しろなんて言うよりは千里の方が保護するだけの合理的理由をでっち上げ易かった」

「確かにねえ。 あんまり胡散臭いと私が素直に動かないかもしれないものねえ……」

思わず、口の端がつり上がってしまう。

その表情の意図を察した大須 冬彦と羽原くんもそれぞれのやり方で同意を示した。

意図、と言うのは要するに「やってくれたな」という奴である。

「あの三人、なんか怖い」

「全員、腹黒キャラだから仕方ない」

そんな私達を遠巻き（と言っても狭い室内なので物理的には近いのだけ）から、大須 冬彦の妹さん——中野 夏芽というらしい——と北里 千里が少しだけ引いた態度で見守っている。

確かに三人揃って曰くありげな態度を取っているこの状況には妙な迫力があつた。

「で、結局、どういうことなん？」

「何はともあれ、結果オーライってことさ」

羽原くんがいと挑戦的なのに屈託のない奇妙な笑みを浮かべた。年齢不相応の食えない態度と、肝心なところで単純になれる彼の人柄を的確に表したような表情だ。

直後、真面目な表情に戻った彼は再び口を開く。

「まあ、結果的に一番まずいのは多分俺なんだろうけど」

確かにその通りだ。

大須 冬彦はそもそも表立って行動していない。それに、今回の件で妹ともども私の属する組織の監視下に置かれることになる。

北里 千里も似たようなもの。

翻って言えば、私達に新天寺社の手から守ってもらえるということでもある。

私はある程度組織に守ってもらえるし、コスプレのおかげで顔が多少は割れにくくなっている筈だ。新天寺社が任務に失敗したものをどう扱うかなんて知らないけれど、その点に関してはRUMI コスの彼女も同様だろう。

けれど、羽原くんは発砲した直後の姿を多くの野次馬に目撃されている。

きちんと確認した訳ではないだろうけれど、ケータイやアーリーのカメラで彼の姿を撮影した人だっているかも知れない。その写真がブログに上げられるかもしれない。

「とりあえず、もみ消せるだけのものはもみ消してもらえよう掛け合っておくわ」

「お願いします」

「もみ消しに失敗したら秋一の高校でのあだ名が早撃ちマックになるんか……胸熱」

「よおし！ ちょっと、頭を冷やそうか！」

流れるような動作で北里 千里の小ぶりな頭にアイアンクローをかける羽原くん。

きつと本人は自覚していないのだろうけれど、凄く楽しそうだ。

この子はきつと天性のDSに違いない。

一方の彼女もこめかみを激しく攻め立てられて、「あひい、らめえ！」と悲鳴を上げながらも心なしか嬉しそうにしている。

なるほど、仲も相性もかなり良いようだ。いささか理解に苦しむ関係ではあるけれど。

「あ、そうだ。 ねえ、秋一」

「ん、なんだ？」

控えめな調子で彼の名を呼んだのは夏芽さん。

「大声出すだけでも疲れちゃうから、出来れば近くに来てくれないかな？」

「ああ、分かった」

ようやくアイアンクローを解いた羽原くんは言われるままに彼女

のすぐ傍の椅子に腰かけ、耳を寄せた。

目を覚ましたばかりの夏芽さんは相当筋力が衰えているのか、上体を起こすのも辛そうだった。

それを察した彼は更に彼女の口許に耳を近づける。

——直後、夏芽さんはゆっくりと体を起こし、彼の頬に形の良い唇を重ねた。

「……えーと？」

「か、感謝のしるし、みたいなものよっ……！」

言い終えるや否や、耳まで真っ赤にしてそっぽ向く。

それまで茫然と見守っていた大須 冬彦が絶叫し、北里 千里が奇声を上げる。

もつとも、その奇声の内容は嫉妬云々ではなく、「ツンデレk t k r - - - !」という何ともアレな代物なのだけれど。

今にも羽原くんに襲いかかりそうな大須 冬彦を羽交い絞めにし、私は病室から一旦退避。 空気を読んだ初老の医師や北里 千里も私達と一緒に部屋の外へ。

「二人つきりにしちゃって良いの？」

「大丈夫だ、問題ない」

彼女は随分と自信に満ちた様子で小柄なわりに大きな胸を張る。

「自分、3Pとか大好物なんで」

この場にいない羽原くんに代わって、彼女の額にチョップをお見舞いした。

22話 最近凄い事に気付いた。高等学校にいる女子の大半は女子高生なんだぜ

あの慌ただしい1日からおよそ2週間が過ぎた春のある日。

俺と千里は肩を並べて通学路を歩いていた。

「……やっぱ時々俺に気付く奴がいるな」

「まー、仕方ないな。流石にSERENにまで圧力はかけられないだろうし、そもそもかけたところで意味がない」

「分かつちやいるが……はあ」

思わず盛大にため息を吐く。

Yuiykosの女性改め、本橋 春日さんは事後処理まで手を抜かずによってくれた。

おかげで新天寺社が誇るニューロンネットワーク上に俺を撮った写真が上げられる事は殆どなかった。

が、問題はニューロンでない方のネットワーク、つまりインターネット。

そもそも何処に圧力をかければ規制できるという類のものですらなく、未だにニューロン以上に母集団の大きなそれは流石に彼女や彼女の所属する組織の手に余る代物だったらしい。

テレビやラジオ、新聞といったマスメディアに俺や本橋さん達の情報が流れる事は無かったものの、インターネットというか、専ら某巨大掲示板で何度も俺や本橋さんの画像を見かける羽目になった。

「そのうち飽きられるから我慢するしかないと思われ」

「それも分かつてる。 けどな……」

珍しくアーリーではなく、ケータイを弄くり回しながら歩いている千里の手から、ピンク色のそれを引っ手繰り、待ち受け画像を突

きつける。

「すぐ横を歩いている奴がこんなことしながら言っても説得力がねえよ」

「良いじゃないか、中タイケメンに映ってるんだから」

「そっという問題じゃない!!」

坂田うめを撃ち、添えていた左手を下ろした直後の横顔を捉えた会心の一枚。

確かに、少々手前味噌ではあるが、その画像に写っている俺は驚くほど格好良い。

正直、最初にこれを見た時には「フォトシヨ乙」と言いたくなかった程だ。

……もつとも、それがこの画像の拡散に拍車をかける一因にもなったのだが。

「何でわざわざ俺の画像なんて待ち受けにしているんだよ？」

「そりゃあ、秋一が頼んでも撮らせてくれないからだろ」

「いや、そもそも、何で俺なんか待ち受けにしたいんだよ？」

「そりゃあ、バイブ機能で」

言い終えるよりも早く、即座に引つ叩いてやった。

高校生になつてもツインテールの髪が毎度の如く激しく揺れる。

「……まだ変な事は言っていないだろ？」

「まだ、ってことは言おうとしたんだな？」

「言葉のあや！ そんな意図はない！」

「じゃあ、最後まで言ってみろ。妙な事を口走ったら二度と口を聞いてやらんからな」

なるべく爽やかな笑顔で続きを促してやる。

が、千里は次の句を発する気配を見せず、齒がみするばかり。

「で、続きは？」

「変な事を言おうとしてました、ごめんなさい！」

そして素直に自分の非を認め、土下座した。

「いや、そこまでせんで良いから」

「秋一に相手してもらえなかったら寂しくて死ぬ」

「それは分かったから。無視とかしないから、早く立て」

カバンを置いてから、ツインテールを両手でがしつと掴んで千里の頭を持ち上げる。

いささか不自然な格好で頭を上げ、じつと俺の顔を凝視。　うむ、これはこれで何ともけったいな光景だ。

それでも入学初日に女子を道端で土下座させた男なんて不名誉極まりない称号を頂くよりはずっとましだろう。

「立つから手を離してくれ」

「土下座も土下寝も最敬礼もするなよ？」

「分かった分かった、分かったから」

首を縦に振る千里の目をじつと見つめ、他意がないのを確かめる。
……何かしたら本気で怒る事を察したらしくその表情にウソ偽りは無さそうだ。

もっとも、こいつの場合、俺の想像のはるか斜め上に行く方法でまた何かるくでもない事をやらかしそうな気はせんでもないのだが。たとえばそう、仰向けになって犬猫の類のやり方で服従の意思を示すとか、四つん這いになって尻を向けて来るとか……！

「まあ良い。俺の言った言わないはともかく俺が変なこととみなした時点で無視決め込めば良いだけか……」

そう聞えよがしに呟きつつ、手を離してやった。

ずっと背伸びするような格好になっていた千里はふうと一息ついてから、乱れた髪を手櫛で整える。

淡い色の、手入れの行き届いた髪を撫でる姿は中々どうして様になっっている。

俺達と同じように九尾高へと向かう新入生たちの視線や、漏れ聞こえる会話の内容を聞く限り、この認識はそれなりに客観的なものとみて間違いない。

「そろそろ行くぞ」

「うん」

……と言った感じの概ねいつも通りのやり取りからおよそ1時間後。

俺は1年4組の教室窓際の机に突っ伏し、ただひたすらに打ちひしがれていた。

「そんなに落ち込んで、どうしたん？」

そんな俺の顔を覗き込んでいるのは毎度おなじみ北里 千里。
いくら低身長とは言え流石に座っている俺よりは高い位置にある

頭を腰を曲げて同じくらいの高さまで持つて来ている。

高校生と言えどそれでもクラス内でも屈指のサイズを誇る二つの丘を際立てるようなポーシング故か、制服の冬服の厚いブレザーの上からでも確かな存在感を見せてついている。

普段なら「お前のじゃなければ心おきなく褒め称えるところだったんだけどな」などと生意気な言葉を吐きつつ、チラ見するところなのだが今はかりはそんな余裕もない。

何故なら――

「落ち込んでるのはお前のせいだよ、アホんだらあ!？」

「うおう、いきなりDVいくくない」

「何がDVか!?!」

担任の女性教師が何やら用事で席を外し、現在教室内では各所で新しいクラスメイトとのちよつとした交流が繰り広げられていた。そのあらゆる会話がメールアドレスの交換が、俺の叫びによって問答無用に中断される。

代わりに、クラスメイトほぼ全員が俺を遠巻きに眺めながら何やら内緒話を始めた。

「何なんだよ、あの自己紹介は!？」

「え、自己紹介だけど？」

「どこがだよ!?!」

もう一度叫びながら、力強く机を叩き付ける。

それと同時に勢い良く立ち上がり、まくし立てるように続ける。

「あのなあ、まず第一に俺とお前は至って普通の友人知人だ! 分かるか? 分かるよな!?? それをお前はよりにもよって……流石の俺でもあれは引くぞ!??」

「えー」

「えー、じゃありません！ さつき自分が言った事をもう一遍復唱して見る！」

「えっと……私の名前は北里 千里です。」

おなチユー出身の羽原 秋一が大好きです。

大好き過ぎて片時も離れたくないが為だけにここを受験した位大好きで、同じクラスになったのも新入生代表の言葉でとんでもない台詞を吐いてやる、もしも他の子に任せようとしたらその時はその時で対応の対処をするぞって校長以下を脅して無理を押しとおしたからです。

要するにそれくらい秋一が大好きって事で、きつと秋一が死ねって言えばそれで本当に秋一が喜ぶなら本当に死――

あ、でも秋一はそんな事はきつと言わないって確信してるから、そういう優しい秋一だから愛しい……

だけど、一片の慈悲も見せないドSで鬼畜な秋一に好き勝手に弄ばれて滅茶苦茶にされるのも一つの夢なのは否定できないのが実は悩みどころです。

とは言え、今でも突っ込みなんかは暴力的なところがあるから、その夢は半分くらいかなっているような気もしないんだけど、でもでもやっぱりなんて言うか人格も人権も人情も人間性も尊厳もすべて踏みにじるような圧倒的な支配が欲しいって言うか……。

けど、そう思うようになっていく時点でとつくに調教済な感がないでもないって言うかぁ……。

と言う訳で、私の事は秋一のメスブタって呼んでください」

このアマ、本気で声色まで再現しながら復唱しやがった。

しかも普段なら絶対にしないような口調や仕草のおまけをつけた上で、だ！

流石に我慢しかねた俺は半ば無意識にアイアンクローをしかけながら吼えた。

「一言一句違わず再現してんじやねえええええええ！！　その愛は流石に受け入れられねえ！　重いわ痛いわキモいわで、真綿で首を絞められつつ背中に白刃を突きつけられているような恐怖しか感じねえよ！？」

お前のせいで高校デビュー大失敗だよ、チクショウ!?　ここから巻き返しかどう考えても無理ゲーだろ!？」

「つて言いながら、そんな事やってると余計自分の首を絞めるわよ？」

そんな俺に冷や水をぶっ掛けるかのような静かな声の一つ。

ですよねー、とその言葉に全身全霊で同意しつつ、そちらを振り向くと見知った顔。

「おっ、夏芽ちゃん。おーっす」

「おーっす、って……もうちよつと女の子らしい挨拶したら、千里？」

そこにいたのは黙って立っていればどこかの深窓の令嬢と言われても１００人中１００人が納得しそうな腰まで届く長い黒髪が印象的な少女、中野 夏芽だった。

夏芽と千里はあいさつを交わす。この二人、いつの間にやら名前前で呼び合う程度には仲良くなっていたらしい。

ついでに言うと、千里は彼女がここに来る事を知っていたようだ。もつとも、俺には女同士の友情の距離感なんてのはいささか理解しかねる所があるので、本当に仲が良いのかどうなのかは疑問の余地が少なからず残るが。

特に夏芽は千里に良い感情を抱いていなかったようだし。

……が、今はそこを詮索すべき時ではない。

「……秋一は殆ど無反応なのね？ それとも驚き過ぎて声も出ないとか？」

「はあ？ 自意識過剰だ、バカ」

「んなつ……ばっ！？」

ため息交じりに、松葉杖で身体を支えて立っている夏芽にジト目を送ってやった。

「断片的な情報と推論、妄想の複合でしかないけどな。この程度は想像の範疇」

「どんな超推理よ、それ」

「まあ、そんな事はどうでも良いや」

すると「どうでも良いって何よ」と夏芽はむくれる。ARの時のようにむやみやたらに膨れてはいないが間違いなくあの夏芽のそれを想起させる表情だ。

そんな彼女の前にアイアンクロ―を解いた手を差し出し――

「これからヨロシクな」

「……うん！」

――しっかりと握手を交わした。

この際、クラスメイト達の「ああ、あの美人さんはあの鬼畜野郎の愛人かあ……」という何とも言い難い難い視線に関しては無視を決め込む事にした。

22話 最近凄い事に気付いた。高等学校にいる女子の大半は女子高生なんだぜ

と言う訳で、ようやく1部完……なのかな？

これからはARネタで好き勝手に書き散らかしていく予定。

お暇な方、物好きな方、もうしばしお付き合い頂けると幸いです。

23話 他愛のないメールって送る方と返信する方の思考時間の格差が酷いって

色々あつて盛大に高校デビューに失敗した日から数日が経つたある日。

連れシヨン（女子の場合、こう言つて良いのかは疑問だが）に行つた千里と夏芽を待ちながら、二人の生徒のやり取りを眺めていた。一人は身長165cm程度のやや低めの、まだ春なのに日に焼けつたような肌のスポーツ少年風。

もう一人は身長は170ちよつとといった程度のやや太めの男子。と言つても決して肥満と言う訳ではなく、どこことなくがっしりした印象もある。

彼らの口ぶりや態度を見るに二人は中学時代からの友人のようだ。ちなみに、非常に悲しい事だが俺は友人どころかまともな話し相手すら一人として見つかつていない。 どうにも千里のあの自己紹介のせいでとんでもない奴と認識されているらしく、（特に女子からは）露骨に敬遠されている。

更に不運な事に九尾高校に進学した同じ中学出身の生徒は俺を除いて全員女子で、接点のある奴は千里以外には一人もいない。

「なあ、このメールどう返せば良いと思うよ？」

「いやまずメールを見せてくれ」

「ほらよ」

ケータイを受け取つた男子生徒（太い方）はさつと液晶に視線を滑らせ、内容を音読。

「……『昨日ケーキ食べた！ めっちゃうま〜』か。なるほどなあ……」

「な？ だからどうした、としか思えないだろ？」

「うーん、確かに……」

男子二人が雁首揃えて難しい顔で液晶とにらめっこしている。
その光景は傍から見ていると何となく間抜けだ。

「そうだな、とりあえずそうか良かったな的な内容で行けば良いんじゃないか？」

「いや、何かそれすげえ興味なさそうで感じ悪くないか？」

「それもそうか……そうだよなあ……」

二人揃って頭を抱える。動作が見事にシンクロしているのが妙に笑いを誘う。

とは言え、メールの相手に真剣に返信しようとしている、真剣に協力しようとしているその姿勢は評価しても良い。

俺だったら、もしも千里からそんなメールが送られてこようものなら――

『それで、ここからどうやって変態談義に持っていくんだ？』

でお終いだろう。まあ、千里以外の相手だと多少はまともな返信をするだろうが。

何かこういうと俺は千里の事が嫌いなように聞こえるな。実際は……まあ、今語る事ではない。

改めて二人の男子に意識を向ける。

相変わらず、何と応えて良いのか分からず悩み続けていた。

「仕方ないな……」

のっそりと立ち上がって、二人の傍へと歩み寄る。

「こういうやり取りは基本的に5W1Hをきちんと拾う事が重要だと思っぞ」

「おわ、ハバラ・テラス」

と、あからさまに仰け反ってみせたのは小柄な方の男子生徒。ちよつと待て、ハバラ・テラスってのは俺のあだ名か？

言いたい事は分かるが、かの家畜人からの引用とか高校生がやるこつちやないだろ……。

それにあれか、千里はヤ○か？ 一日即墮ちコースなのか？止めてくれよ。

「そのあだ名をつけたボケナスについては追及しないが、俺の話は聞いとけ」

「話つて、5W1Hのことか？」

「ああ、そうだよ。まず、そのメールの内容に不足している情報を整理してみる」

言われるがままに二人は「ああでもないこうでもない」と話し合いつつながら、メールの内容を検証して行く。

そうして2分ほど経過したところで、二人はメールに欠けているものを一通りリストアップし終えた。

- 1・ケーキを食べた時間
- 2・ケーキを食べた店
- 3・一緒に食べに行った相手（一人の可能性もある）

「まあ、こんなところか」

他にも食べたケーキの種類とか、ケーキを食べに行った理由とかも掘り下げられるが。

特に意外に重要なのが食べに行った理由だろう。実は誕生日だったと告げるのが恥ずかしかったなんて可能性もあるからな。

もちろん、あからさまに「何で食べに行っただ？」なんて聞き方をしようものなら、相手がどう返せば良いのか分からなくなってしまったけど。

その日の相手の様子を思い返しながら「何か良い事あった？」と「何か嫌な事でもあったか？」を使い分けつつ、相手の自慢か愚痴を引き出してやるのが無難だろう。

「で、ここからどうすれば良いんだ？」

「とりあえず質問しろ……って、そっぴゃメールの相手は誰だ？」

「隣の席の鶴橋さんだよ」

「ああ、あのギャルっぽい子か」

ふむ……。

「と言う事はこのメールは事実を送っているというよりは一種のキヤラ付けと見るべきかな。つまり、女の子アピールしてる訳だ。

良かったな、脈ありだぞ」

「マジかよ」

「良かったじゃないか」

二人は仲良くハイタッチをして喜びを分かち合う。

仲が良さそうなのは大いに結構なのだが……

「そういう事をやる前に早く文面を考える。相手はタイピングがめちゃくちゃ速かったり、15分以内返信がマナーだと思ってる可能性があるからな」

「で、そのはつきりしない情報とやらのどれを使えば良いんだよ？」

「それは自分で考える。とりあえず、自分が話を広げやすいと思つたものにしてみ？」

「広げやすいものかぁ……うーん」

またしても悩む男子二人。

よくもまあ、こんな調子でメアドを聞き出せたものだ。

「仕方ないな、初回サービスだ。たとえばケーキを食べた時間。当然24時間全部が食べた可能性のある時間になる訳だが、流石に朝や学校のある昼間に食べるとは考えにくい。つまり、それ以降……夕方か夜に食べたものと仮定して話を進めてみる」

小柄な方からケータイを引つ手繰り、適当にタイピング。

文面は『学校帰りに買い食い？ それとも夜食？ あんまり夜遅くに食べると太るぜ？』……と、まあ、こんなところか。

ケータイを受け取った男子生徒はメールの内容をざっと確認。

「太るとか書いて大丈夫か？」

「大丈夫だろ。9割がた怒った顔文字と『それでもダイエットしてるんだから』的な文言が返ってくるから、『まあ、鶴橋は細いから寧ろ太った方が良くらいだろうけどな』とでも送っておけ。

それから、食べた時間が学校帰りなら『俺も実は甘いもの好きなんだよ。今度どこの店のケーキか教えてくれよ』の一文も添えておくとなおよし」

「本当かよ……」

と、首をかしげつつもメールを送信。

それから3分ほど雑談をしていると、メールが返ってきた。

『太るとか言うなー！ これでもダイエットしてるんだぞー！、（ん）』

あ、食べたのは学校帰りだよ。通学路にあるロッソ・ファン。ズムってお店』

「マジで予想通りのメールが来た……」

「ああ、こんな感じで全て見透かされて思うままに操られて家畜人になって行っただろうな、北里さん……」

「いや、あいつの言ってる事は殆どデタラメだから」

俺と言葉を交わしながらも小柄男子はいそいそと文章を打つ。

「そっぴゃ、羽原さんは北里さんや中野さんとメールしたりするんですか？」

「さんはいらねえよ。あと同級生相手に丁寧語は止めれ」

「いや、恐れ多いんで……」

何ゆえ名前もまだ覚えていないクラスメイトに畏れられにやならんのか。

そして、今気付いたんだがこの二人の名前知らないな、俺。

「よし、こんなもんでどうですか？」

「ん、どれ……『まあ、鶴橋は細すぎるくらいだから、むしろもうちょっと太つても良いくらい思っけど。ところで、今度一緒にその店に食べに行こうぜい？』か。堅いがまあ、良いんじゃない？」

いささかがつつき過ぎな感はあるが、あっちから店の名前を教えしてくれた時点でこういう流れになる事は想定している可能性は十二分にある。

このくらいの攻めの姿勢を取ってもさほど問題ない……かもしれない。

ふむふむ、どうやら鶴橋さんのギャルっぽさはかなり計算されている節があるな。

「とりあえず、これで行ってみ？」

言われるがままに男子Aはメールを送信。
返事が返ってくるのを待つ間に、改めて二人に尋ねる。

「そう言えば君ら名前は？」

「自己紹介聞いてなかったのかよ？」

「千里のせいでぶっ飛んだわ、そんなもん」

「ああ、納得……」

どうやら理解してもらえたらしく、二人揃って首を縦に振ってくれた。

それから太め男子の方が「じゃ、改めて」と仕切り直す。

「俺は森宮もりのみや 太郎たろう。で、こいつが今宮いまみや 新しん」

太い方が森宮 太郎、背の低い方が今宮 新か。

「よし、覚えた。俺は羽原 秋一だ、ヨロシク」

まあ、言わんでも覚えられているとは思うが。主に誰かさんのせいで。

俺の挨拶に二人が揃って「ああ、はい、こちらこそよろしくおねがいします」と何だか腹立たしいよりも悲しくなってくる程に丁寧

に返事されたところで、再びケータイが震えた。
小柄スポーツマン風男子改め、新がケータイを操作し、メールを開く。

そして、満面の笑みを浮かべてガッツポーズをした。

「よっしゃあ！ デート……って程のもんじゃないけど、約束取り付けた！」

「おお、良かったじゃないか」
「ふむ、どれ……?」

小躍りする新の手の中のケータイの液晶を覗く。

『おっけー、それじゃ明日にでも寄り道しよー。 あ、あらたんの
おごりね 』

さて、そのロッソなんちゃらという店のケーキの値段はどれくらいなんだろうな……。

「あ、羽原さん?」

「いや、だからさん付けは止めろっての。 っで、なんだ?」

「お礼を言おうと思っただけですけど……」

「お礼って、んな大げさな。 あとさん付けは止めろと」

今にも土下座しそうな勢いで身を乗り出す新に掌を向けて制止をかける。

が、デートの約束を取り付けたのがよっぽど嬉しかったらしく、
新は自重しない。

「じゃあ、師匠と呼ばせてもらいます!」

「……殴って良いか?」

「あー、そいつ言い出すと止まらないんで諦めてください、師匠」

あ、こいつ便乗しやがった。

キングオブ地味ネームのクセにふてえ野郎だ。

「今なんかすげえ失礼なこと考えませんでした?」

「気のせいだ、諦めろ。 怨むならご両親を恨め」

「言ってる事が支離滅裂!」

背後にがび〜んとかそんな感じの古典的なオノマトペを背負って
いそうな表情で突っ込む森宮 太郎。 あの中途半端なボケをきつ
ちり拾ってこれだけの反応を返せるあたり、なかなかの突っ込み役
のようだ。

一方、相変わらず浮かれポンチになっている新は俺達のやり取り
などまるで意に介さず、ケータイを抱きしめてくるくる回っている。
はつきり言ってキモい。

「で、新。 おごりって書いてたけど、お前の小遣いどれくらいあ
るんだよ?」

「とりあえず5000円っすね。 あとはアーリーの副収入が20
00円ちよつと」

「アーリーの……ねえ」

今時、小学生だってそれくらいの事はやっている。 その事は十
分に理解している。

が、春休みのあの日知った事実を思うと嫌でも顔をしかめてしま
いそうになる。

「あ、師匠はアーリー持ってますよね? 北里さん、なんかすごい
っぞ噂ですし」

「いや、俺は少し前に壊してそれからまだ修理してないから……」

言い淀みながらも、ポケットからスマホを取り出す。

「つつ訳で電話番号とメアド教えてくれ」

「ういー。 赤外線って何か信用出来ないんで紙に書いたので良い
すか?」

「ああ、別に何でもいいよ」

新はノートの切れ端に意外と綺麗な字でアドレスと電話番号を書き始めた。

その間に、特に妙なこだわりの無い太郎と赤外線で互いの情報を交換。

念のため、メールを送ってから電話をかけて確認を済ませる。

「よし、問題なさそうだな」

「師匠！ 書き終わりました！」

「そうか、んじゃ……」

ささつと必要な情報を打ち込み、確認のために新からメールを送る。

無事メールが届いたのを確認して、今度は電話を。

1回目のコールが教室内に響き渡った瞬間、勢い良くドアが開き、むやみやたらと良い笑顔の千里とやや呆れ顔の夏芽が戻ってきた。

豪快な物音につられて3人揃って彼女たちの方へと振り向く。

そして、千里は開口一番、デジャヴってレベルじゃねーぞと言いたくなるような台詞を口走った。

「秋ー！ 部活を作ろう！」

23話 他愛のないメールって送る方と返信する方の思考時間の格差が酷いって

ビックリするほどA R関係ねえ！

秋一のキャラ紹介エピソードとしてもすっげえ微妙だし、新キャラ冴えない男二人だし、誰得だよコレ？

千里って千早と（字面的に）見間違えるよな、天才HENTAI少女だとかそんな事を考えながらのんびり書いた結果がこのザマだよ！？

24話 ボブって聞くとゴツイ野郎しか思い浮かばない諸君！ ボブ おかっぱ

「で、何部を創設するんだよ？」

「秋一に首輪で繋がれる部！」

笑顔のまま俺達の方にやってきた千里めがけて俺の拳が唸る。

渾身の右フックが容赦なく彼女の下あごを打ち抜いた。

が、千里は崩れ落ちそうになるのを机に手をつけて踏みとどまり、即座に立ち上がる。

「へへっ、良いパンチじゃねーか……でも、それじゃオイラは倒せねーよ」

「変なキャラ作ってないで、話を進める。 もう一発殴るぞ？」

「お。 さっき夏芽と話してて思いついた事んだけど、放課後に半ば私物化出来る部室があると楽しいと思わないか？」

「今さらつとろくでもない本音が漏れ出たな、おい」

部室は有限なんだから、くだらない事に使うんじゃないありません。とは言え……

「本当に私物化して、無為に時間を過ごすだけじゃないのなら手伝つてやらん事もない」

「だってさ。 良かったわね、千里ちゃん」

「むう……そうは言ってもなあ、秋一は注文が多いから……」

俺の注文が多いんじゃないで、お前に突っ込みどころが多過ぎるだけだろう。

と、言ったところで千里には馬耳東風も良いところなのだろうが。

「で、どんな部活にするんだ？」

「えっと、超能力者とか……」

「宇宙人や未来人や異世界人なんか探すS。S団は却下な。それから友達作りに励む隣。部、生徒の悩みを解決する奉。部、世界の支配構造を打ち砕く未来。ジェット研究所もナシだ。せめて本を食う女子高生に三題噺を延々と書き続けると見せかけて事件を解決する文芸部や、基本的にお茶会ばかりでも学園祭の時には主役になれる軽音部程度には活動すること、良いな？」

「うつつ、私は校内で秋一といちやいちや出来る場所が欲しかっただけなのに」

がくりと崩れ落ちた千里は膝と両手を床について打ちひしがれる。学校をなんだと思っているんだ、こいつは。そもそも超能力者はここに二人いるし。

しかし、千里の能力で何かしらの部活となると……

「アーリー部とか、AR部とか？」

「……物凄く気乗りしないわね、どっちも」

苦虫を噛み潰したような表情で夏芽がため息をついた。

思い付きで言っただけの、正直気が進まないのは俺も一緒だ。

あの日知ってしまったアーリーの、新天寺社のろくでもない裏の顔を思えば、とてもじゃないがアーリーを持ち歩く事さえ躊躇われる。要するにあれば発信機と盗聴器を抱き合わせたような代物なんだから。

個人的な考えとしては、地下に潜って新天寺社と抗争を繰り広げる訳でもないのならあってもなくてもさしたる影響はないと思うが、新天寺社を追う立場にあつた本橋さんがワクドでアーリーを弄っていたのもそういう判断によるものだろう。

まあ、余計な情報を送らないように改造されていたって可能性もあるが、それならそれで千里に頼めばそれくらいの事は何とかしてくれそうだし。

「どうする、千里？」

「んー、私はどっちでも良いけど……」

考える振りをしながら、俺と夏芽の様子を伺う千里。

一応、こいつなりに気を遣っているんだろう。

個人的には何も知らない一般人の前で妙な含みのある話する事の方が気になるのだが。

「俺はどっちでも良いかな。特に入りたい部活がある訳でもないし」

「……良いの？」

夏芽が不安そうに俺と千里の表情を伺っている。

彼女に至っては俺達は殆ど何も聞かされていない新天寺社の前進とやらとも接点がある。俺達以上に色々と思うところもあるだろう。

「別に構わないけど。ただ、創部となると色々手続きがあるだろうから、何をするにしてもそれを調べてからだな」

「おkおk！面倒くさい事は全部任せた！！」

「……お前なあ」

いや、確かに調べものとか手続きとか、そういう地味な作業は得意だけども。

面倒くさいから押し付けたとあからさまに言われるとなんか腹が立つ。

「まあ良い。それより出すもん出したんならよ帰るぞ」

「ちょ、出すとか言わないでよ」

「それはスカもごほお!？」

「そつち系のネタ振りでは断じてないからしょうもない事を口走るな」

実に自然な動きで千里の下あごに裏拳を叩き込みつつ、荷物をまとめたカバンを担ぐ。

それから、完全に置いてけぼりになっていた新と太郎の方を振り返り「じゃ、また明日」と軽く会釈した。

「ああ、また何かあったら相談頼みます、師匠！」

「右に同じく。困った時にはたのんます、先生！」

「俺は先生でも師匠でもねーよ」

二人に手を振りながら教室のドアをくぐる。俺の後ろを顎をさする千里と松葉杖をついた夏芽がゆっくりと追いかけてくる。

「師匠だつて」

「おかげ様でな」

「形はどうあれ、友達が出来て良かったじゃない」

整った双眸で俺の顔を覗きながら、しれっとそんな事を言ってくれる夏芽。

歩調を合わせてはいるもののそれでも慣れない動きで俺の横を歩く彼女は俺達より一つ年上。その上、俺や千里の知り合いだ。

考えてもみれば俺なんかよりずっと不利なスタートラインに立っていると言っても過言ではないんじゃないかなかるうか？千里と同列に自分を置くのは何か嫌だが。

「もう少しゆつくり歩いた方が良いか？」

「うっん、大丈夫。それより、どこ向かってるの？ 北門とも南門とも違う方角なんだけど……」

「生徒会室だよ」

「どうして？」

「生徒手帳に創部の手続きは生徒会でって書いてたから」

正確に言えば、いくつか条件を満たした上で生徒会に届けを提出、そこの審議を経て職員会議に回され、最終的な結論が下されるという流れらしいが。

果たしてこれは面倒くさい仕事を体よく押し付けているだけなのか、それとも生徒の自主性の尊重と教師の責任のバランスを取ろうとした結果なのか。

一見すると手間が増えているだけのようにも見えるが、実際のところはどうなっているのだろうか？

「さつきは知らない風な態度だったか？」

「ありや、他人^{ひと}の目があつたからだよ」

まあ、アーリーの話をし始めたのは俺だけだよ。

さすがに夏芽があそこまで露骨な反応を返してくれるとは思ってなかった。

……ただの他ハード信者だと思っていてと信じておこう。

「確か、この階段を上ってすぐだった筈」

「校内の施設の場所全部覚えてるの？」

「まさか。ただ、千里がこういう事を言い出しそつだと思ったから、たまたまだよ」

「それ、たまたまとは言わないと思うわよ？」

「ごもつとも。」

「うーん、愛^{ラブ}だな！」

「寝ぼけた事を抜かすな……つと、階段大丈夫か？」

「うん、このくらいなら問題ないわよ。なんならお姫様だつこでもしてくれる？」

「しょうか？」

「……えっ！？」

自分で言い出したにもかかわらず、意表を突かれたとばかりに驚く夏芽。

その拍子に杖を落として体勢を崩して転倒……

「おっと」

……する前に何とか抱き止めた。

「大丈夫かよ？」

「う、うん」

「おっと突然の立ちくらみがー！」

俺と俺に抱きかかえられる夏芽のすぐ傍で千里が突然ヘッドスライディング。

かなり勢いがついていた所から察するに鼻の頭くらいはすりむいていそうだが、無視。

「で、大丈夫か？」

「う、うん……それより、近い」

「ああ、悪い」

松葉杖を拾って夏芽に手渡し、ちゃんと立てそうなのを確認してから離れる。

心なしか顔を赤らめて「ありがと」と呟く。

その横、というか寧ろ下で千里が何やら喚いているがこれまた無視。

せめてもの情けと首根っこを掴んで起き上がらせてやる。顔を覗きこむと心なしか鼻を赤らめて「何この格差」と呟いた。

そんな二人を引き連れて階段を上り、上級生の色々な感情の混じった視線を浴びながら生徒会室へ到着。

気を取り直した千里が、夏芽が「心の準備するからちょっと待って」というのも聞かずに意気揚々とドアを開け放った。

「たのもー!」

「さすがにその挨拶はねえよ、バカ」

「えっと、失礼しまーす」

「……どうぞ」

静かな、しかし澄んだ良く通る声で返事したのは一人の少女。

夏芽と同じように松葉杖についているにも関わらず、背筋を伸ばして立ったままファイリングされた資料に目を通してている。

首から垂れ下がる藍色のネクタイの色を見る限り、2年生だろう。遊びのない着こなしはまさに生徒会、といった雰囲気醸し出していた。

しかし、女性特有のふくらみが同年代の女子に比べて圧倒的な存在感を放っているため、そのお堅い着こなしが何故か物凄く不謹慎に見えてしまう。

ネクタイが不自然な軌道を描いてその丸みをいつそう強調するのが実にけしからん。

まあ、本当にけしからんのは千里のそれと変わらない俺の思考様

式なのだろうが……。

しかし、そんな思春期丸出しの思考は彼女の瞳を見るや否や一瞬にして消し飛んだ。

俺達を横目で見つめるその双眸はいささか感情が欠如したような印象を与える。

喻えるならば、そう……昆虫や爬虫類を彷彿とさせる漆黒。

そして、その吸いこまれそうな黒に見覚えがあった。

すこしクセ毛のミディアムボブの髪越しに俺達の様子を伺う彼女は確か――

「……げ、坂田うめ」

「……あ」

「……ん？」

冬服の肩口に安全ピンで留められた腕章には副会長の3文字が躍っていた。

25話 関西弁は文章にすると案外無個性だから何かと扱いに困る

「……創部には部員5名と顧問が必要。部員には1名以上の上級生がいること」

「上級生ってのは2年か3年だよな？ あと、顧問は校内の教員限定？」

俺の質問に対して、坂田うめは言葉で返さずにこくりと首を縦に振って答える。

「で、何だこの状況？」

「……創部手続きの説明？」

大げさに首をひねってみせる俺と目線を合わせるように、彼女は首を傾げた。

思わず突っ込みそうになったが、千里と夏芽の手前、ぐっところえて何とか取り繕う。

「で、その上級生ってのは誰でも良いのか？ たとえば生徒会の役員でも？」

「……問題ない」

ぼそぼそと蚊の鳴くような声量なのに何故か聞き取り易い声で答える坂田うめ。

もそもそとしか動かない口元はなんだか草を食むげっ歯類のようだ。

「ふうむ……そっぴや夏芽。帰りは電車、バス？ それとも歩き？」

「今日は兄さんが迎えに来てくれる」

「仕事辞めてまさかのニート状態かよ……」

何故か知らないが物悲しさで胸がいつぱいになった。

家族のために奔走したお兄ちゃんの末路としてはあんまりにもあんまりじゃなかるうか。その内、妹も家で日長一日ごろごろしている兄の事を疎んじるようになって、顔を合わせれば「働けニート」とつばを吐かれるようになるに違いない。

ああ、なんて気の毒な奴だろう……。

なんて考えはおくびにも出さず、真剣な表情のまま話を続ける。

「なら都合が良い。夏芽と千里は先に帰ってくれ。千里も大須さんに送ってもらえ」

「なして？」

「他にも色々と聞きたい事があるからだよ。この調子だとあと2時間はかかりそうだ」

「ふうん」

首を傾げる千里と胡散臭そうに俺と坂田つめを交互に見比べる夏芽。

「分かった。でも、後で変な噂を聞いたら……分かってるわよね？」

「噂って、そんな無茶な。まあ、善処はするよ」

その返事に一応納得してくれた夏芽は席を立ち、ゆっくりと生徒会室を後にした。

彼女を追いかけるように千里も立ち上がり、一度不安そうに俺の方を見てから小走りで生徒会室から出て行った。

ひとり残った俺は席に座ったまま二人を見送り、それから改めて

坂田うめと向き合う。

「何でアンタがこんな所にいるんだよ？」

「……副生徒会長だから」

「それは知ってるし、入学式の生徒会挨拶の時に副会長は事故で入院中だって話をしていたのも思い出した。俺が言いたいのはそんな事じゃなくて、警察にしょっ引かれなかったのかとか、新天寺社はアンタをどう扱っているんだとか、そういうのだよ」

一息で聞きたい事を一通り語り終え、軽く深呼吸する。

坂田うめは俺の質問に対する答えを探している最中らしく、机の上で組まれた彼女の手をぼやんと眺めている。

「……あの後、何とか人目のない所に隠れたから」

「で、新天寺社の方は？」

「……」

顔を伏せて、だんまりを決め込んだ。　どうやら話したくないらしい。

ただ、今も彼女がこうして学校に通っている事を考えると、少なくとも新天寺社は彼女を見捨ててはいないだろう。　もしも、彼女を使い捨てにしていれば学校に対して入院中だと連絡が入る事はないだろうし、銃創をこさえた女の子がそこの病院に行こうものならまず間違いなく警察に連絡が入る。

病院か、警察かは分からないが、そのどちらかに新天寺社の影響力が働いたと考えても差し支えないだろう。　ついでに言うとう極めて高い確率で新天寺社が何かしらのアプローチを仕掛けたのは病院の方だろう。　警察はリスクが大き過ぎる。

「まあ良いや。　それよりも怪我の方は大丈夫か？」

「……え？」

「だから、足の怪我はどんな感じなんだって訊いたんだよ？　っその怪我の張本人が言うのもどうかとは思うけどな」

「ほっほう、そいつは聞き捨てならんなあ！」

何の前触れもなく、明後日の方角から無駄に威勢の良い声がした。振り返ると一人の女子生徒が腕を組み、仁王立ちで偉そうにふんぞり返っていた。

身長は160あるかないかと言ったところだろうか。決して高い訳ではないが腰まで伸びるブロンドの長髪が強烈に目を引き、圧倒的な存在感を放っている。

瞳の色は緑色。顔立ちはまず間違いなく平均的な日本人のそれではあるが、妙にでかい態度に相応しく凛々しい眼差しが印象的。

夏芽の吊り目が意志の強そうな目だとすれば、彼女のそれは気が強そうな目とでも形容すべきだろう。

そして、この少女の肩口にもまた生徒会の腕章が取り付けられていた。

「……あ、会長」

「おっはー、マイスイートおっばいちゅわ〜ん！」

「すげえ頭の悪そうな挨拶だな、オイ。　っていうか、ただのセクハラじゃねーか」

しかも「おっはー」で！　「おっはー」って……！

「ヤ。ちゃんかよ！」

「そっち！？　普通、ママの方ちゃうん！？」

「こちとら流行語大賞取った時はまだ子宮はん中だよ！」

その場の勢いに任せて思わず立ち上がった。し

「こ、これがジェネレーションギャップ……！　って、ちゃうちゃう！　そんな事言ってる場合やない！　さっきの話、ホンマなん！　？」

「ウチの可愛いうめちゃんをキズモノにしたとか、このけしからん
お山を征服して蹂躪しまくったとか、太ももに一生消えへん傷痕を
刻んでやったぜ、これでお前の身体は一生俺のおもちやだぜげっへ
っへとか?!」

「あべぢつ?！」

思わず、チヨップをお見舞いしてしまった。

「入学式の挨拶の時には威厳たっぷり演技してたかと思えば、蓋を開けてみりゃただの千里2号じゃねーか!？」

「むしろイタいわ、アホんだら」

涙目になってうずくまり、額を両手で押さえる生徒会長。

「おっ、お母ちゃんに言いつけたるうっうっうっ！」「

そんな捨て台詞を残して全力疾走で立ち去って行った。

しかし、お母ちゃんとは。残念さ3割増だな……。

彼女を茫然と見送った後、坂田うめと顔を見合わせ、同時にため息を吐く。

「生徒会長が廊下を走っていいのか？」

「……分かんない」

その一言を最後に、生徒会室に静寂が訪れる。
しばらくして、その妙な沈黙を破ったのは俺の方だった。

「あー、何か色々訊く雰囲気じゃなくなったし、帰るわ」

「……あ、待って」

出入り口へ向かって一步を踏み出そうとした所を、左手の袖をつまんで止められた。

たったそれだけで、俺の前進はものの見事に止められた。流石はスクーターを平然と振り回す怪力少女。

「何？」

内心かなりびくびくしながらも、それを隠してただ呼びとめられたから振り返っただけですと言わんばかりの態度で尋ねる。

が、直後に坂田うめが放った一言の前では動揺を隠すことが出来なかった。

「……えっと、私の家に、来て」

何か知らん間にフラグが立っていたようだ。

よく分からん成り行きで坂田うめの自宅にお邪魔する事になった。
学校から歩いて20分。 電車通学なのでここから駅まで30分
以上かかるのだと思うと帰りの事を考えるだけでも億劫だ。

これと言って見るべきもののない道のりの先にあつたのはこれま
た至って平凡な一軒家。

強いて特徴らしきものを挙げるとすれば、やや古くさい点くらい
だろうか。

「これでお父さんもお母さんも今夜は帰って来ないの的な台詞があ
れば役満だな」

「……何で知ってるの?」

「マジかよ……」

流石の俺も思わずつばを飲み込まずにはいらなかった。

いかんいかんとは思いつつもついつい、彼女の制服越しの肢体
を意識してしまう。

……もつとも、彼女と俺の立場を考えると俺が今夜は家に帰れな
いの、むしろ一生帰れないになる可能性も少なからずあるのだが。

「……でも、おばあちゃんと弟はいる」

「まあ、そりゃそうだよな」

「……両親、は顔も知らない」

こんな不憫な子をつかまえて下品な想像する奴は殴ってやりたい
ね、まったく。

「で、何で俺はここに招待される羽目になったんだ?」

「……服を、返そうと思って」

そう言えば止血用にシャツジャケットを貸したな。

しかし、そんな用事なら明日にでも学校に持って来てくれりやそれで済んだのに。

やっぱり罨なんだろうか、なんて事を考えながら絵に描いたような昭和の日本家屋の引き戸を眺めていると、何の前触れもなく、それがガラガラと音を立てて開いた。

そこから飛び出して来たのは武装した厳ついおっさんでも、黒服サングラスのそっち系のお方でもなく、小学4年程度と思しき少年。さっき言っていた彼女の弟だろう。

「おかえり、ねーちゃん！ そいつ誰？」

「口の利き方のなつてねえクソガキだな」

警戒していると言った様子は特にない。

ただ見慣れない相手に相応の関心を向けていると言った程度の反応だ。

ついでに言うつと異性を連れて来た事に特別な意味を見出すほどマセてはいないようだ。

「で、誰？」

「お前の姉ちゃんの学校の後輩だよ」

「名を名乗れ！」

「人に名前を尋ねる時は、つてお約束の反論させてもらって良いか？」

興味津々と言った様子で俺を指差しつつ見上げる坂田（弟）。

その適当に切つて適当に伸びて来ましたと言った感じの髪を頂く頭をぼんぼんと2、3度叩いてやる。

俺の手をもう一方の手で払いながら、俺の反論に威勢良く答えた。

「坂田 大^{ダイ}！」

「そうかそうか、俺は大須^{おおす} 冬彦^{ふゆひこ}だ」

とつさの偽名。特に意味はない。

ぐつと堅く握手を交わし、男同士の友情を育む。

しばらくすると大の方から手を解き、坂田 うめに「友達と遊んで来る！」と言い残して走り去って行った。

「弟の握力は人並みなんだな」

「……血は、繋がってないから」

「でも、可愛い弟だ」

「……うん」

こくりと首を縦に振る彼女の表情は変化に乏しいなりに薄く微笑んでいた。

その表情を見てみると、決して悪い子じゃないんだろうなあなんて馬鹿げた事を考えてしまう。一度は殺されかけた身の上で言うのはどうかと思うけれど。

しかし、俺の横を通り過ぎて引き戸を開ける彼女は普通の女の子にしか見えない。

まあ、日常を壊しかねない非日常なんてのは大体普段は平凡の仮面を被って全裸待機しているものなのかも知れないが。

「……入って」

「ああ、お邪魔します」

「お帰りなさい、うめちゃん。……あら、彼氏？」

今度はおばあちゃんが現れた。おばあちゃん、と言っても年齢

は50を超えているかどうかも怪しい風貌で、地味な色調の長袖のシャツとジーンズ・エプロンを身にまとう彼女は坂田うめの母親だと言っても誰も疑いはしないだろう。

「あ、はじめまして、お母さん。うめ先輩の後輩の大須です」

色々思うところがあるのはさて置き、とりあえず会釈と自己紹介。まんざらでもなさそうな笑顔で俺の挨拶にあらあらと言わんばかりに手を振る仕草（実際にする人は初めて見た）をしてみせる祖母さん。

“お母さん”の一言が効いたのかどうかは定かではないけれど、初対面としては好感触の反応だろう。

「あらま、年下？……ん？」

言いながら、彼女は首を傾げる。

この反応はおおむね想像の範囲内だが、こつもすぐに気付くとは思わなかった。

坂田うめは2年生。という事は彼女の後輩は当然ながら1年生で、今は四月の頭である。では、俺と彼女はいつ知り合ったのか、という話になる。

「はっはっは、先輩に一目惚れされました」

「あらまあ……」

「……」

祖母さん、すっげえ楽しそう。一方の坂田うめ、改めうめ先輩すっげえ恥ずかしそうに俯いている。

祖母とはそれ以上会話を交わさずに靴を脱ぎ、祖母の横をすり抜けたところでこっちに振り返ってぼそぼそと口を動かす。

「……こっち来て」

「はいはい、お邪魔します」

靴を脱ぎ、適当に揃えてから彼女の後を追いかける。

後方から「おばさんはちよつと2時間ほど買い物に行ってくるわ」という独り言が聞こえてくる。それが意味する所についてはあまり深く考えない事にしよう。

「それじゃ、行つてきまーす！」

「……いつてらっしゃい」

取るものも取りあえずといった様子で財布も持たずに、というかエプロンも外さずに祖母さんは出て行った。いくらなんでも色々先走り過ぎだろ。

怒涛の如く彼女が去っていった後には、何とも対処に困る沈黙が残された。

流石に祖母さんが残して行った爆弾に火をつける勇氣はない。彼女に向かつて「えつと、コンドームある？」なんて言えるほど俺は阿呆でも勇敢でもない。

この人に突っ込みで殴られたら痛いじゃ済まなさそうだし。

「……ここが私の部屋だから、入って」

「お、お邪魔します……」

「……お茶、淹れて来るから、くつろいでて」

「ありがとうございます」

と、言われても初めて入った女の子の部屋でくつろぐような豪胆は当然持ち合わせちゃいない。

千里の部屋なら何の躊躇もなくPCを立ち上げてベッドに寝転が

ってやれるんだがなあ。

それどころか本人がいなくても勝手に上がってくつろげる自信がある。

……まあ、自慢げに語るような事ではないのだが。

そんな馬鹿げた事を考えつつ、床に胡坐をかいて腕を組んだまま先輩の部屋を見回す。

ああ、うん。普通だ。これ以上に形容しようがないくらい普通だ。

これまた強いて特徴を挙げるならば女の子らしいものが殆ど無く、カーテン・学習机・タンス・ちゃぶ台に至るまでが落ちついた色彩で統一されている点だろうか。ちなみにベッドはない。

引き出しを開ければ寝るときに布団を敷くのは他の部屋で寝ているのかはつきりするが、そこまでして知りたい情報ではないのでもちろんそんな事はしない。

通学カバンは学習机の上に置かれたっばなしになっている以外に家具以外の彼女の持ち物と思しきものは殆ど見当らず、部屋の主の手柄を伺わせるようなものは一切なさそうだ。

つまり、適当に間を繋ぐのに使えそうな話題は殆ど無い、ということだ。

「……どうぞ」

「うおわ、おかえりなさい」

「……えっと、ただいま？」

俺のあまり意味のない挨拶に律儀に応じながら、先輩はお茶とお茶受けの載ったお盆をちゃぶ台の上に置く。

緑茶に羊羹か。見た目はかなり若いのに趣味の方はまさしくおばあちゃんって感じなんだな。もしかしたら先輩や大くんの趣味なのかも知れないが。

「えーっと、とりあえず服返して下さい」
「……うん」

すっと立ち上がった彼女はタンスの一番上の棚を開けると先日貸したシャツジャケットを取り出した。

汚れはきちんと落としてくれていたらしく、血の跡なんかは無さそうだった。

「……これ、ありがとう」
「どういたしまして」

うん、清々しいほど会話が続かない。
受け取ったジャケットをカバンに突っ込み、出された緑茶に口をつける。

程良い苦みが舌を通り過ぎる。なるほど、これは甘いお茶受けに合いそうだった。

「って、呑気に茶しばいてる場合じゃねえ！ もういつそのこと単刀直入に聞くけど、何でわざわざ家にまで招待したんだ？ 何かしら企んでるって気配もないみたいだし」

「……それは」

「それは？」

「……分からない」

はい、会話終了。 本人すら無自覚の感情をわざわざ掘り起こす気にはなれないしな！

もっとも、少なくとも発砲した件で恨まれちゃいならしい事だけははっきりしたと見て良いのだろうか？

色々あって彼女との距離感、付き合い方というのはいささか推し量りかねる所ではあるが、何はどうあれ嫌われて嬉しいと思えるほど

ど歪んじやいない。それだけにその事実には少しだけ安堵を覚えた。

「そうか……」

取り繕うようにそう呟き、羊羹を一口頬張る。

控えめの甘さが好みの逸品だった。祖母さんはなかなか良い味覚^{センス}してる。

咀嚼しながら理由は自分でも分からないが家に誘ったその理由を考え、不意に一つの可能性についてぶち当たったが、いくらなんでも無理があるだろうと言葉にすることなく羊羹と一緒に飲み込むことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4930w/>

電脳世界ディストピア

2011年10月21日04時03分発行